仙台市文化財調査報告書第 436 集

山の寺廃寺ほか

発掘調査報告書

山の寺廃寺第 2 次、田母神遺跡第 2 次、沓形遺跡第 5 次・6 次
六反田遺跡第 11 次、大野田古墳群第 22 次、辻遺跡第 1 次

2015 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には現在約760箇所の遺跡が確認されており、このうち約610箇所が一般に遺跡と呼ばれている埋蔵文化財包蔵地です。

平成23年3月11日の東日本大震災より4年が経ちますが、ようやく復旧・復興のための公共事業が本格化し、民間の開発事業も活発に行われるようになってまいりました。このような状況を反映し、平成26年度の公共事業や民間の開発に伴う発掘調査は、件数こそ平成25年度よりも少ないものの、規模の大きな調査が増えつつあります。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護に日々務めているところです。

本報告書には、公共事業や民間の開発に伴って平成26年度に発掘調査を実施した、山の寺廃寺第2次調査、田母神屋敷第2次調査、沓形遺跡第5次･6次調査、六反田遺跡第11次、大野田古墳群第22次調査、辻遺跡第1次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの大切な役割であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

平成27年3月

仙台市教育委員会
教育長　上　田　昌　孝

例　　言

1．本書は、平成26年度に仙台市及び宮城県が実施した各種の整備事業および民間の開発事業に伴う発掘調査報告書であり、山の寺廃寺第2次、田母神屋敷跡第2次、沓形遺跡第5次・6次、六反田遺跡第11次、大野田古墳群第22次、辻遺跡第1次の各発掘調査報告を合本にしたものである。

本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。

2．本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は平間亮輔が行った。

第1章　―　平間亮輔　　第2章第1節　―　鈴木隆　　第3章第1節　―　小山紘明

第4章第1節Ⅰ・Ⅱ　―　小泉博明　　Ⅲ　―　千葉悟

第5章第1節　―　小泉博明　　第2節　―　千葉悟　　第3節　―　鈴木隆

総括　―　平間亮輔

遺物の基礎整理～実測図作成　―　佐藤洋、向田整理室作業員

遺物図・遺構図デジタルトレース　―　鈴木隆、小林航

遺物観察表作成　―　佐藤洋　　遺構註記表作成－各担当職員

遺物写真撮影・図版作成　―　千葉悟・早坂純一　　遺構写真図版作成　―　早坂純一

3．出土遺物の鑑定は、佐藤洋が行った。

4．本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．文中および図中の方位は概ね北を示している。

2．図中の標高を測定した基準点のデータは平成23年3月11日の東日本大震災以前に測定したものをそのまま使用している。

3．遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し№である。

SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　SX：性格不明遺構

P：ピット

4．遺物の略称は以下のとおりである。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ調整）　D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器

E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　H：その他の瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品

L：木製品　N：金属製品　P：土製品

5．土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。

6．遺物実測図中の網点は黒色処理を示している。

7．遺物観察表の（　）がついた数値は図上復元した推定地である。

8．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰（To - a）」と考えられている。降下年代は西暦915年と推定されている。

庄子貞夫・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰」について『多賀城跡 - 昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会2000『沼向遺跡　第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題―十和田aと白頭山（長白頭）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目　　次

第１章　調査計画と実績…… 1
Ⅰ　調査体制　　Ⅱ　調査計画　　Ⅲ　調査実績…… 1
第２章　泉区内の調査…… 3
第１節　山の寺廃寺…… 3
Ⅰ　遺跡の概要…… 3
Ⅱ　第２次調査…… 3
1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
第３章　宮城野区内の調査…… 14
第１節　田母神屋敷跡…… 14
Ⅰ　遺跡の概要…… 14
Ⅱ　第２次調査…… 14
1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
第４章　若林区内の調査…… 19
第１節　沓形遺跡…… 19
Ⅰ　遺跡の概要…… 19
Ⅱ　第５次調査…… 19
1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
Ⅲ　第６次調査…… 33
1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. 遺構外出土遺物
2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物　　6. まとめ
第５章　太白区内の調査…… 38
第１節　六反田遺跡…… 38
Ⅰ　遺跡の概要…… 38
Ⅱ　第11次調査 …… 39
1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
第２節　大野田古墳群…… 46
Ⅰ　遺跡の概要…… 46
Ⅱ　第22次調査 …… 46
1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
第３節　辻遺跡…… 58
Ⅰ　遺跡の概要…… 58

Ⅱ　第１次調査…… 58
1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
2. 調査に至る経緯と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物
総括…… 68

挿図目次

第１図　山の寺廃寺と周辺の遺跡…… 3
第２図　第２次調査区位置図…… 4
第３図　第２次調査区配置図…… 5
第４図　1・2トレンチ平面・断面図 …… 6
第５図　3～7トレンチ平面・断面図 …… 7
第６図　仁王門礎石跡（網掛）位置図…… 8
第７図　仁王門礎石跡平面図…… 8
第８図　仁王門礎石跡エレベーション図…… 9
第９図　第２次調査出土遺物…… 11
第10図　田母神屋敷跡と周辺の遺跡・第２次調査区位置図…… 14
第11図　第２次調査区配置図…… 15
第12図　第２次調査区平面・断面図…… 17
第13図　沓形遺跡と周辺の遺跡…… 19
第14図　第５次調査区位置図・配置図…… 20
第15図　1トレンチ６層水田跡平面・断面図 …… 22
第16図　1トレンチ７層上面平面・断面図 …… 24
第17図　2トレンチ２ｃ層水田跡平面・断面図 …… 25・26
第18図　2トレンチ６層水田跡平面・断面図 …… 27・28
第19図　第５次調査出土遺物…… 30
第20図　第６次調査区位置図・配置図…… 33
第21図　1トレンチ５層水田跡平面・断面図 …… 35
第22図　2トレンチ５層水田跡平面・断面図 …… 36
第23図　六反田遺跡と周辺の遺跡・調査区位置図…… 38
第24図　第11次調査区配置図 …… 39
第25図　第11次調査区平面・断面図 …… 41
第26図　第11次調査出土遺物（1）…… 42
第27図　第11次調査出土遺物（2）…… 43
第28図　第22次調査区位置図・配置図 …… 46
第29図　第22次調査区平面図 …… 48
第30図　第22次調査区断面図 …… 49
第31図　確認調査区平面・断面図…… 50
第32図　第22次調査出土遺物（1）…… 51

第 33 図　第 22 次調査出土遺物（2）…… 52
第 34 図　第 22 次調査出土遺物（3）…… 53
第 35 図　第 22 次調査出土遺物（4）…… 54
第 36 図　辻遺跡と周辺の遺跡…… 58
第 37 図　第 1 次調査区配置図…… 59
第 38 図　2 トレンチ基本層柱状図 …… 60
第 39 図　1 トレンチ　平面・断面図 …… 61
第 40 図　2・3 トレンチ　平面・断面図 …… 63
第 41 図　4 トレンチ　平面・断面図 …… 64
第 42 図　第 1 次調査出土遺物…… 65

挿表目次

表 1　公共事業に伴う発掘調査一覧…… 1
表 2　民間事業に伴う発掘調査一覧…… 2
表 3　仁王門礎石跡　礎石観察表…… 10

写真図版目次

写真図版 1　第 2 次調査（1）…… 12
写真図版 2　第 2 次調査（2）…… 13
写真図版 3　第 2 次調査 …… 18
写真図版 4　第 5 次調査出土遺物 …… 30
写真図版 5　第 5 次調査（1）…… 31
写真図版 6　第 5 次調査（2）…… 32
写真図版 7　第 6 次調査 …… 37
写真図版 8　第 11 次調査 …… 44
写真図版 9　第 11 次調査出土遺物 …… 45
写真図版 10　第 22 次調査 …… 55
写真図版 11　第 22 次調査出土遺物（1）…… 56
写真図版 12　第 22 次調査出土遺物（2）…… 57
写真図版 13　第 1 次調査（1）…… 66
写真図版 14　第 1 次調査（2）…… 67
写真図版 15　第 1 次調査出土遺物 …… 67

第１章　調査計画と実績

Ⅰ．調査体制

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課

【文 化 財 課】　課長　吉岡恭平

【調査調整係】　係長　斎野裕彦　　主査　平間亮輔　　主任　村上とよ子　　鈴木隆

主事　小泉博明　　黒田智章　　小林航

文化財教諭　早坂純一　　千葉悟　　千葉靖彦　　小山紘明

【整備活用係】　係長　長島栄一　　主任　斎藤克己　　主事　及川謙作

文化財教諭　石山智之　　伊藤翔太　　橋本勇人

専門員　　木村浩二

Ⅱ．調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）に伴う発掘調査および、民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

Ⅲ．調査実績

平成 25 年度第 4 四半期から平成 26 年度第 4 四半期（平成 26 年 2 月 1 日～平成 27 年 2 月 28 日まで）実施された調査は表 1・2 のとおりで、公共事業関連が 11 件、民間開発が 21 件、計 32 件である。このうち本書に収録したのは 7 件である。

平成 25 年度　公共事業に伴う発掘調査一覧（平成 26 年 3 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日）　調査面積 20.0 ㎡

調査№	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等№	報告書	調査原因
H25-88	中田畑中遺跡	太白区袋原	125.9	20.0	3月25日	遺構無、遺物僅少	H25 253-25	―	交番新築

平成 26 年度　公共事業に伴う発掘調査一覧（平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 2 月 28 日）　調査面積 2190.7 ㎡

調査№	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等№	報告書	調査原因
H26-10	史跡陸奥国分寺跡	若林区木ノ下	1019.0	54.0	5月7日～22日	SX1 基	H26 109-4	―	道路改築
H26-14	辻遺跡	太白区四郎丸	4.26ha	106.0	5月22日～6月4日	疑似畦畔、土師器	H25 253-30	1 次	農業基盤整備
H26-18	屋敷東遺跡ほか	若林区下飯田	87.3ha	520.0	6月23日～9月19日	古墳・溝、埴輪・土師器	H26 109-8	―	区画整備
H26-22	沓形遺跡	若林区広瀬東	457.1	44.0	7月23日～8月1日	水田跡	H26 109-11	6 次	戸建復興公営住宅
H26-24	和田織部館跡	宮城野区蒲生	126.0	1227.0	7月28日～11月7日	土塁・堀跡・溝跡・土坑、陶器、磁器	H25 253-14	―	区画整理
H26-28	田母神屋敷跡	宮城野区岡田蒲生	247.6	42.1	8月25日～9月3日	溝跡	H26 109-16	2 次	津波避難タワー
H26-32	貞山堀	若林区井土	866.7	15.0	9月8日	なし	H25 165-15	―	排水機場復旧
H26-44	燕沢遺跡	宮城野区岩切	267.0	14.0	10月27～28日	遺構・遺物なし	H26 107-29	―	市道付替
H26-45	藤田新田	若林区沖野・荒井・上飯田他	195.5ha	109.3	11月14日～12月4日	溝跡	H26 109-9	―	区画整備
H26-53	下飯田遺跡	若林区下飯田	58.0ha	59.3	12月15日～1月8日	遺構・遺物なし	H26 109-39	―	区画整備

表１　公共事業に伴う発掘調査一覧

平成25年度　民間事業に伴う発掘調査一覧（平成26年2月1日～平成26年3月31日）　調査面積119.0㎡

調査No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書	調査原因
H25-80	神明社窯跡	宮城野区枡江	648.3	66.0	2月24日	遺構無、遺物少	H25 124-120	―	マンション
H25-83	南小泉遺跡	若林区南小泉	87.3	9.0	3月3日	遺構無、遺物少	H25 124-137	―	造成工事
H25-85	岩切城跡	宮城野区岩切	8112.6	16.0	3月10日	遺構・遺物無	H25 124-122	―	造成工事
H25-87	中在家南遺跡	若林区荒井	112.0	28.0	3月17日	遺構・遺物無	H25 124-131	―	長屋住宅

平成26年度　民間事業に伴う発掘調査一覧（平成26年4月1日～平成27年2月28日）　調査面積2801.8㎡

調査No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書	調査原因
H26-2	山の寺廃寺	泉区山の寺	212.46	59.2	4月10～15日	礎石、磁器	H25 124-143	2次	山門新築
H26-7	大野田古墳群	太白区大野田	343.1	60.0	5月8日～12日	古墳（32・41号墳）、埴輪	H26 108-1	22次	診療所
H26-11	郡山遺跡	太白区郡山	38.1	10.5	5月12日	遺構・遺物なし	H26 108-20	―	建売住宅
H26-15	西台畑遺跡	太白区あすと長町	2487.1	56.7	6月2日	遺構・遺物なし	H25124-158	―	GS建設
H26-16	大野田古墳群	太白区大野田	343.1	105.3	6月11日～26日	古墳（41号墳）・小溝、埴輪	H26 108-1	22次	診療所
H26-23	南小泉遺跡	若林区遠見塚	53.8	7.6	7月28日	遺構・遺物なし	H26 108-72	―	建売住宅
H26-25	山の寺廃寺	泉区山の寺	80.0	9.5	8月4日	遺構・遺物なし	H26 106-135	2次	擁壁
H26-27	入生沢遺跡	宮城野区岩切	283.9	43.8	8月19日～21日	ピット・土坑	H26 108-75	―	長屋住宅
H26-29	新熊野堂遺跡他	太白区茂庭	19.7ha	390.0	8月20日～27日 11月10日～14日	遺構・遺物なし	H26 106-137	―	区画整理
H26-38	南小泉遺跡	若林区遠見塚	273.6	40.0	9月24日	遺構・遺物なし	H26 108-89	―	店舗
H26-37	沓形遺跡	若林区荒井	1477.9	179.0	9月29日～10月27日	水田跡	H26 108-90	5次	区画整理
H26-46	今泉遺跡	若林区今泉	134.9	32.0	11月5～6日	溝跡、遺物僅少	H26 108-147	―	建売住宅
	沓形遺跡	若林区荒井	13120.0	1500.0	9月16日～12月22日	水田跡	H26 108-130	4次	区画整理
H26-55	南小泉遺跡	若林区遠見塚	1778.1	90.0	12月15日～19日	竪穴住居・溝、土師器	H26 108-170	―	店舗
H26-58	化粧坂城跡	宮城野区岩切	105.8	1.3	12月24日	遺構・遺物なし	H26 108-173	―	長屋住宅
H26-57	養種園遺跡他	若林区南小泉	190.7	86.9	1月19日～28日	堀跡	H26 108-167	―	長屋住宅
H26-65	西台畑遺跡他	太白区あすと長町	3436.8	130.0	2月16～20日	竪穴住居・溝	H26 108-175	―	マンション

表２　民間事業に伴う発掘調査一覧

第２章　泉区内の調査

第１節　山の寺廃寺

Ⅰ　遺跡の概要

山の寺廃寺は、仙台市の北東部にあたる泉区山の寺二丁目に所在する。地下鉄南北線泉中央駅の北東約 1.9 ｋｍに位置し、七北田川の左岸に形成された河岸段丘上に立地する。今回の調査地における現標高は約 33 ｍである。遺跡は、東西 170 ｍ、南北 110 ｍの範囲におよび、面積は約 1.6ha である。

山の寺洞雲寺本堂の増築等に伴い、平成４年に発掘調査が実施され、開山堂跡における造成の様相が明らかとなった。また、中世に遡る陶器などが出土した。この際の報告書は洞雲寺遺跡として刊行されたが、今回の調査地も含めて、現在は山の寺廃寺として登録されていることから、平成４年の調査を第１次調査とし、今回の調査は第２次調査とする。

Ⅱ　第２次調査

1. 調査要項

遺　跡　名　　山の寺廃寺
（宮城県遺跡登録番号 19005）
調 査 地 点　　仙台市泉区山の寺二丁目 37 番地
調 査 期 間　　平成 26 年４月７日～４月 15 日、
平成 26 年８月４日
調査対象面積　　212.46㎡（山門、参道）、
80㎡（擁壁）
調 査 面 積　　59.2㎡（山門、参道部分）
9.5㎡（擁壁部分）
調 査 原 因　　木造平屋建山門新築工事、および参道石畳設置工事、擁壁設置工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部
文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主任　鈴木隆　　主事　小林航
主事　小泉博明
文化財教諭　千葉悟
文化財教諭　早坂純一
文化財教諭　千葉靖彦
文化財教諭　小山紘明

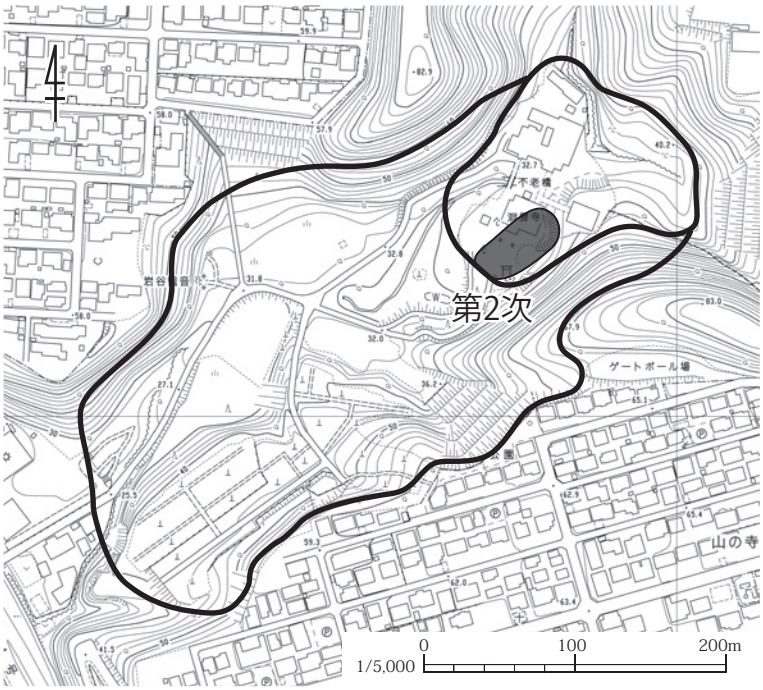
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 26 年２月 17 日付 H25 教生文第 124-143 号で回答）に基づき実施

番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	山の寺廃寺	寺院跡	丘陵斜面	中世・近世
2	洞雲寺遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文
3	新道遺跡	散布地	段丘	縄文
4	鳥居原遺跡	散布地	段丘	縄文
5	天神沢遺跡	散布地	段丘	縄文
6	赤生津遺跡	包含地・水田跡	段丘	縄文・弥生・平安
7	柳遺跡	散布地	沖積地	古代
8	石止遺跡	散布地	段丘	平安
9	貴富祢遺跡	散布地	丘陵	縄文・平安

第１図　山の寺廃寺と周辺の遺跡

した。確認調査は平成 26 年４月７日（月）に着手した。調査区は新山門建築予定地に１トレンチ、参道予定地に２～５トレンチの計５か所を設定した。また、申請者側の追加工事（擁壁設置工事）に対し、6，7 トレンチを設定し平成 26 年８月４日（月）に調査を行った。すべての調査区で、重機を使って盛土（砕石、山砂）を除去し、Ⅰ層（盛土直下の旧表土層）上面で遺構精査を行った。仁王門跡地に設定した２トレンチでは、調査区東壁で確認した礎石の掘方、根固め石を確認した。1、３～５トレンチではⅠ層上面またはⅡ層（近世整地層）上面で遺構等の有無を精査した後、一部深掘りを行い、基本層の確認を行った。6，7 トレンチは、崖の裾部にあたり、岩盤および岩盤崩落土を確認した。今回の調査では、各トレンチにおいて、平面図および断面図（S = 1/20、1/40）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また、仁王門礎石跡については、桁行、梁行における全ての礎石列のエレベーション（S = 1/20）、および礎石跡の平面図（S = 1/20）を作成した。すべての調査区は重機を使って埋戻しを行い、平成 26 年４月 15 日（火）（山門、参道部分）、同８月４日（月）（擁壁部分）に申請者側へ現場を引き渡し、調査を終了した。



第２図　第２次調査区位置図（1/2,500）

3. 基本層序

今回、１～５トレンチにおいて確認した基本層は、現代の盛土を除き、大別５層（Ⅰ～Ⅴ層）、細別 15 層である。Ⅰ層は盛土直下の旧表土層であるが、4、5 トレンチでは確認されなかった。Ⅱ・Ⅲ層は、一帯の平場を造成した際の整地層で、より水平方向の堆積を示すⅡ層と、整地以前の原地形に沿って東から西へ傾斜した堆積を示すⅢ層とに大別した。整地の時期は、5 トレンチⅢｂ層の出土遺物から江戸時代中期（18 世紀）とみられる。Ⅳ層は整地が行われる以前の旧表土層で、1・3・4 トレンチにおいて確認した。Ⅴ層は、Ⅳ層下の自然堆積層で、3 トレンチでは砂の互層、1 トレンチでは凝灰岩の岩盤が確認された。以下、大別層毎にその特徴について記述する。各層の特徴については第４図中の表を参照。なお、6，7 トレンチについては、崖の裾部で調査したため、他のトレンチとは基本層を対応させていない。現表土下で崖の崩落土と岩盤を確認した。

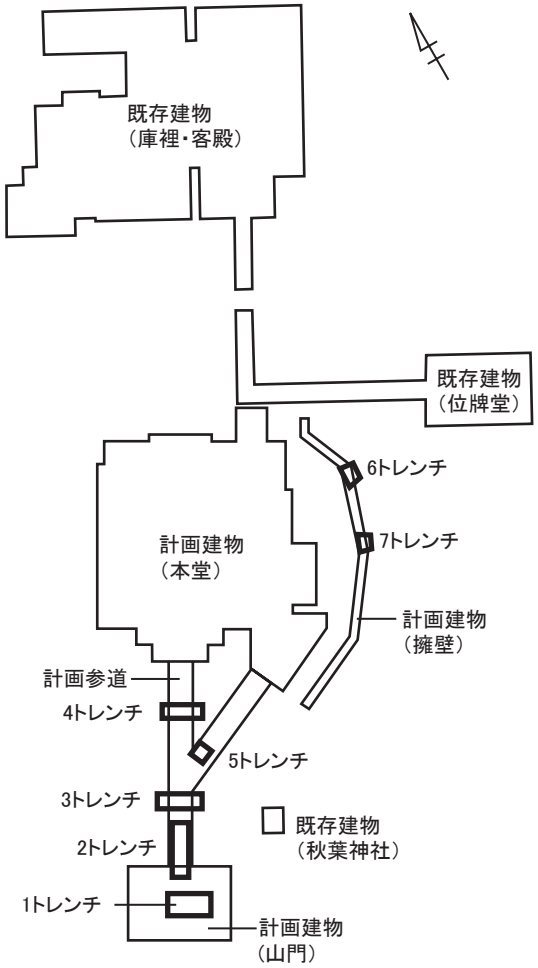
盛土：上部の砕石と下部の山砂から成る現在の表土層である。層厚は 15 ～ 40㎝である。旧仁王門礎石のうちの２石を完全に覆っていることから、仁王門が焼失した昭和 18 年の火災以後、コンクリート造の本堂が再建された昭和 38 年頃に盛土されたものと考えられる。

Ⅰ層：旧表土層である。層厚は３～ 5㎝である。２層に細分した。Ⅰａ層は、2・3 トレンチのみで確認した。近世の整地層であるⅡ層直上に堆積するが、2 トレンチでは一部旧仁王門の礎石を覆っていることから、門の建立から近年、盛土されるまでの間に形成されたものと考えられる。Ⅰｂ層は、焼土を含む炭化物層で、仁王門をはじめ本堂、山門、開山堂等が焼失した昭和 18 年の火災時に堆積したものと考えられる１トレンチでのみ確認した。他のトレンチにおいては、焼け面や炭化物層といった火災の痕跡が認められなかったことから、火災の直後もしくは盛土を行う際に、削平された可能性が考えられる。

Ⅱ層：近世の整地層（上部）である。Ⅱ層全体の層厚は20～40cmである。6層に細分した。全体的に概ね水平な堆積を示している。土層は、凝灰岩を粒状に多量に含み固く締まっている。Ⅲ層による整地の後、最終的にこのⅡ層の整地により、一帯の平場が形成されたものと考えられる。

Ⅱａ層は、2トレンチ南端部における仁王門礎石の外側でのみ確認した。門の建築時に、礎石を設置した後、門前部分にのみ整地された土層と考えられる。Ⅱｂ層は全てのトレンチで確認された。2トレンチにおける礎石の掘方は、Ⅱｂ層上面を掘り込み面としている。Ⅱｃ層は、1，2，5トレンチで確認された。Ⅱｄ・Ⅱｅ・Ⅱｆ層は3，4トレンチで確認された。

Ⅲ層：近世の整地層（下部）である。Ⅲ層全体の層厚は35～100cm以上である。4層に細分した。整地以前の旧表土層（Ⅳ層）に沿って、東側の崖地から西側の沢へ向かい全体的に傾斜した堆積を示すが、その上面では概ね平坦となっている。土層は、凝灰岩を粒状に多量に含むが、Ⅱ層に比べて締まりが弱い。Ⅲａ層は4トレンチでのみ確認した。灰黄褐色を基調とする他の細分層と異なり、旧表土（Ⅳ層）起源とみられる暗褐色砂質シルトが主体となる。Ⅲｂ層は1，3，4，5トレンチで確認した。5トレンチでは、Ⅲｂ層より18世紀後半の染付碗が出土した。Ⅲｃ層は4トレンチでのみ確認した。Ⅲｄ層は1，3，4，5トレンチで確認した。旧表土（Ⅳ層）直上に堆積する整地層である。



第３図　第２次調査区配置図（1/1,000）

Ⅳ層：Ⅱ・Ⅲ層による整地が行われる以前の旧表土層である。層厚は15～30cm以上である。1，3，4トレンチで確認した。1，4トレンチでは、東から西側へ向かって傾斜した堆積状況が確認された。

Ⅴ層：Ⅳ層直下の自然堆積層である。層厚は20cm以上である。1，3トレンチで確認した。3トレンチでは粗砂、砂の互層（Ⅴａ層）、1トレンチでは凝灰岩の岩盤（Ⅴｂ層）である。Ⅴａ層は、ラミナ状の特徴が認められることから、沢の堆積物である可能性が考えられる。6、7トレンチで確認された基本層もⅤ層に含まれる。

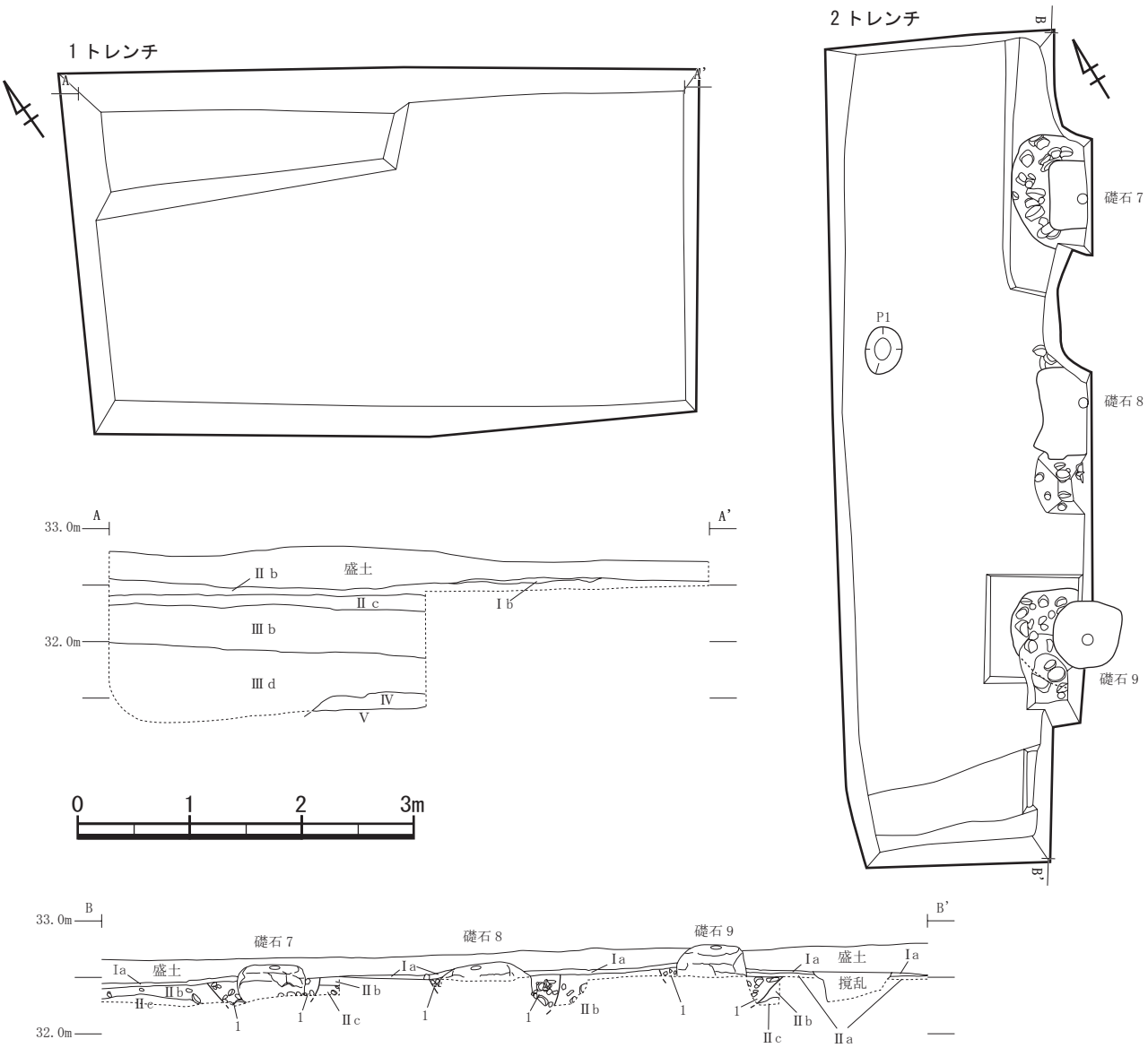
4. 発見遺構と出土遺物

遺構は、2トレンチで旧仁王門礎石跡、ピット1基を確認した。遺物は、2トレンチのⅠａ層より、近代の可能性がある青磁皿が出土した。また、5トレンチの近世整地層（Ⅲｂ層）より18世紀後半の肥前産染付碗（第9図）が出土した。

(1) 仁王門礎石跡

仁王門は、江戸時代中期、明和9（1772）年の完成と伝えられるが、昭和18年の山火事により、仏殿、山門、開山堂、庫裏と共に焼失した。その後、仏殿の跡地には昭和36年にコンクリート製の本堂が建築された。仁王門の跡地には礎石のみが残された状態であった。焼失前の仁王門については、昭和14年、仙台高等工業学校建築科小倉強教授により調査が実施され、平面図が残されている。

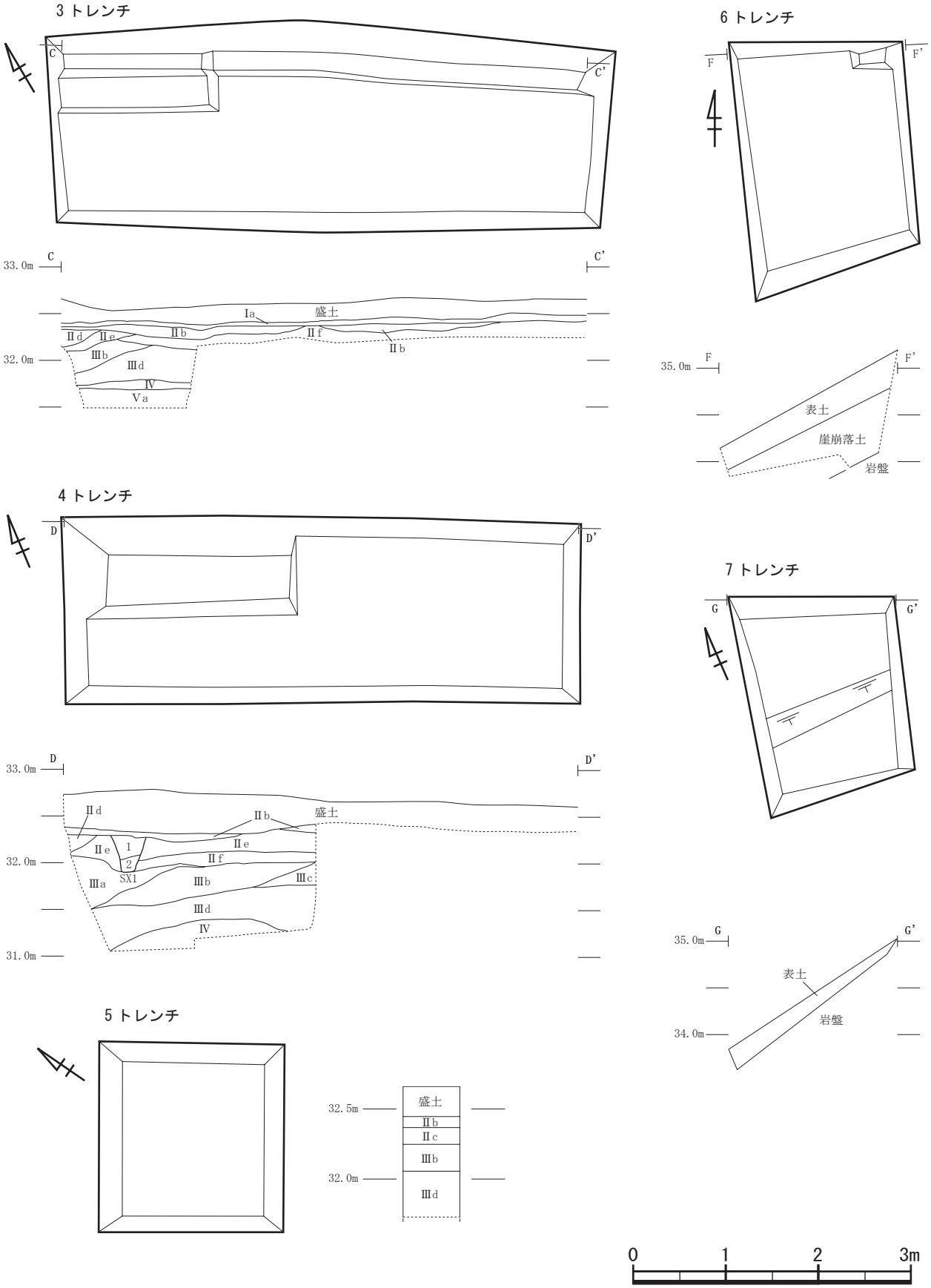
今回の発掘調査では、個々の礎石に番号を付し（第2表参照）、桁行方向の礎石3列について、それぞれ両端に基準点を設定し平面図（1/20）を作成した。計6点の基準点は、平板測量により図化し、そこに3列分の礎石平面図を合成することで、仁王門礎石跡の全体平面図を作成した。また、桁行3列、梁行4列について、全てエレベーショ



基本層

		層位	土　色	土　質	備　考
盛土（砕石・山砂）		盛土	－	－	下部黄褐色山砂、上部砕石　コンクリート本堂再建時（S36）の盛土か
旧表土		Ⅰa	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	旧表土　仁王門建立から本堂再建まで　一部火災（S18）時に削平か
		Ⅰb	10YR2/1 黒色	粘質シルト	炭化物・焼土含む S 18 年火災時の堆積土。部分的に残存
近世整地層（18 世紀後半）	上部整地層（Ⅱ層）	Ⅱa	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	礎石設置後の整地層。φ 1 ～ 3cmの凝灰岩礫を多量含む
		Ⅱb	10YR4/3 灰黄褐色	砂質シルト	整地層　Φ 0.5 ～ 2cmの凝灰岩礫を多量含む　礎石掘方の掘り込み面
		Ⅱc	10YR4/4 褐色	砂質シルト	整地層　Φ 0.5 ～ 2cmの凝灰岩礫をやや多く含む
		Ⅱd	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	整地層　Φ 0.5 ～ 2cmの凝灰岩礫をやや多く含む
		Ⅱe	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	整地層　Φ 0.5 ～ 2cmの凝灰岩礫を少量含む
		Ⅱf	2.5Y5/4 黄褐色	砂質シルト	整地層　Φ 0.5 ～ 2cmの凝灰岩礫をやや多く含む
	下部整地層（Ⅲ層）	Ⅲa	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	整地層　Φ 1 ～ 2cmの凝灰岩礫を少量含む
		Ⅲb	10YR4/2 灰黄褐色	粘質シルト	整地層　Φ 1 ～ 3cmの凝灰岩礫を多量含む。5 トレ 18 C 後半染付碗出土
		Ⅲc	10YR4/3 灰黄褐色	砂質シルト	整地層　Φ 1 ～ 3cmの凝灰岩礫をやや多く含む
		Ⅲd	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	整地層　Φ 1 ～ 3cmの凝灰岩礫を多量含む
近世整地以前の旧表土		Ⅳ	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	整地以前の旧表土
自然堆積層（地山）		Ⅴa	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂	祖砂、砂の互層　旧沢内部の堆積土か
		Ⅴb	2.5Y4/1 黄灰色	岩盤	凝灰岩岩盤
掘方埋土		1	10YR4/3 灰黄褐色	砂質シルト	仁王門礎石掘方埋土　凝灰岩粒少なく、円礫（裏込）多量含む

第４図　１・２トレンチ平面・断面図

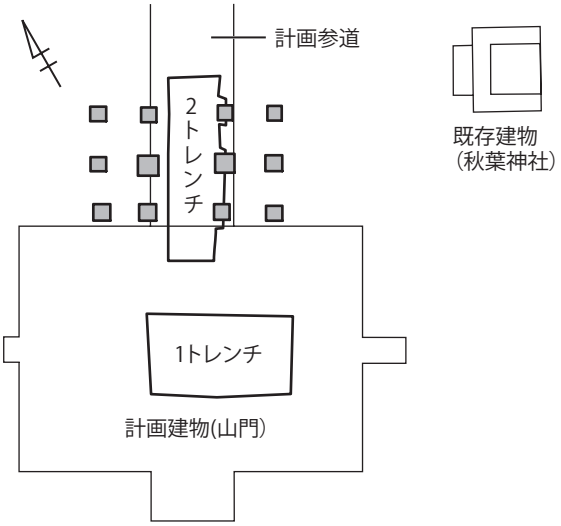


第５図　3~7 トレンチ平面・断面図

ン図（1/20）を作成した。

（基壇の有無について）

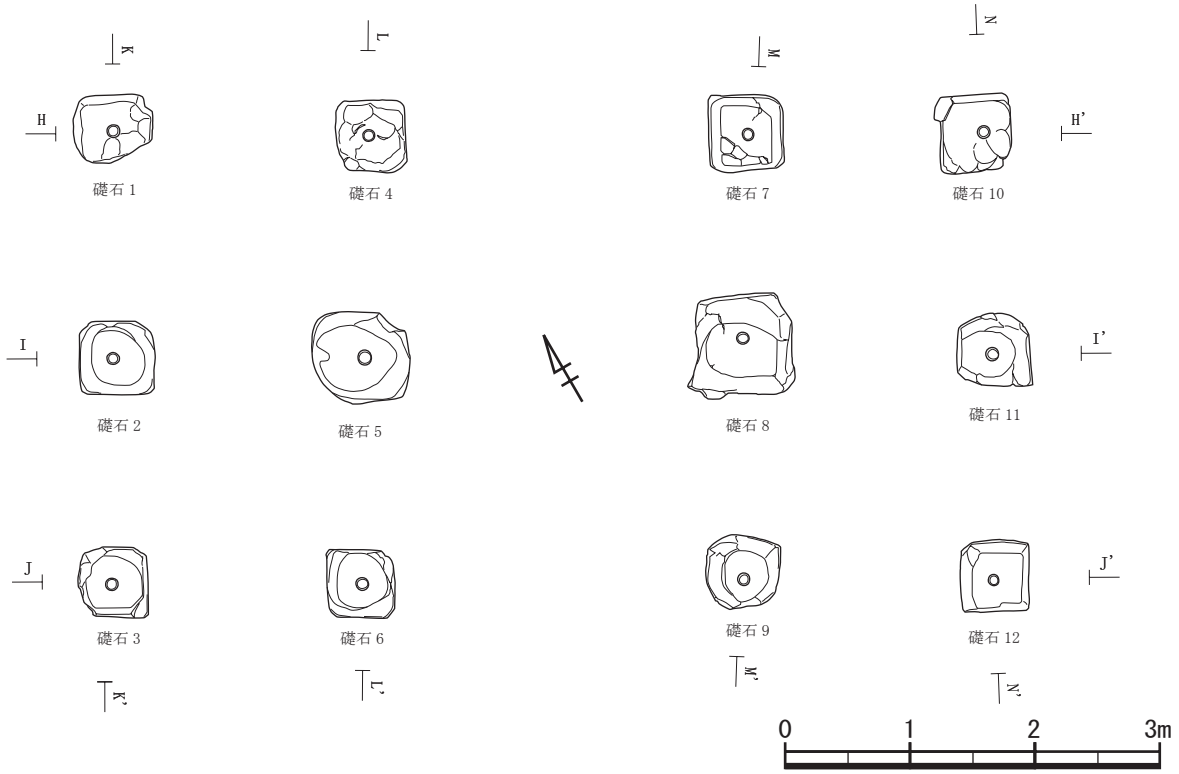
仁王門跡地に設定された２トレンチにおける東壁断面で、礎石掘方掘り込み面のレベルを比較すると、門の内部が、南側で約 8cm、北側で約 5cm、門の外部より高い。また、各トレンチにおける整地層（Ⅱ層）上面のレベルを比較すると、２トレンチ（仁王門跡）より北側の旧本堂寄りに設定した３～５トレンチが 10 ～ 15cm低くなっており、相対的に門跡のレベルが高い。このことから、基本的には平場全体を整地する一連の造成が行われる過程で、門の箇所を一段高くした可能性はあるものの、門の内外におけるレベル差も明確な段差等を伴うものでは無く、調査も部分的であることから、詳細は不明である。なお、昭和 14 年に仙台高等工業学校建築科が作成した写生図では、基壇上の高まりが表現されている。



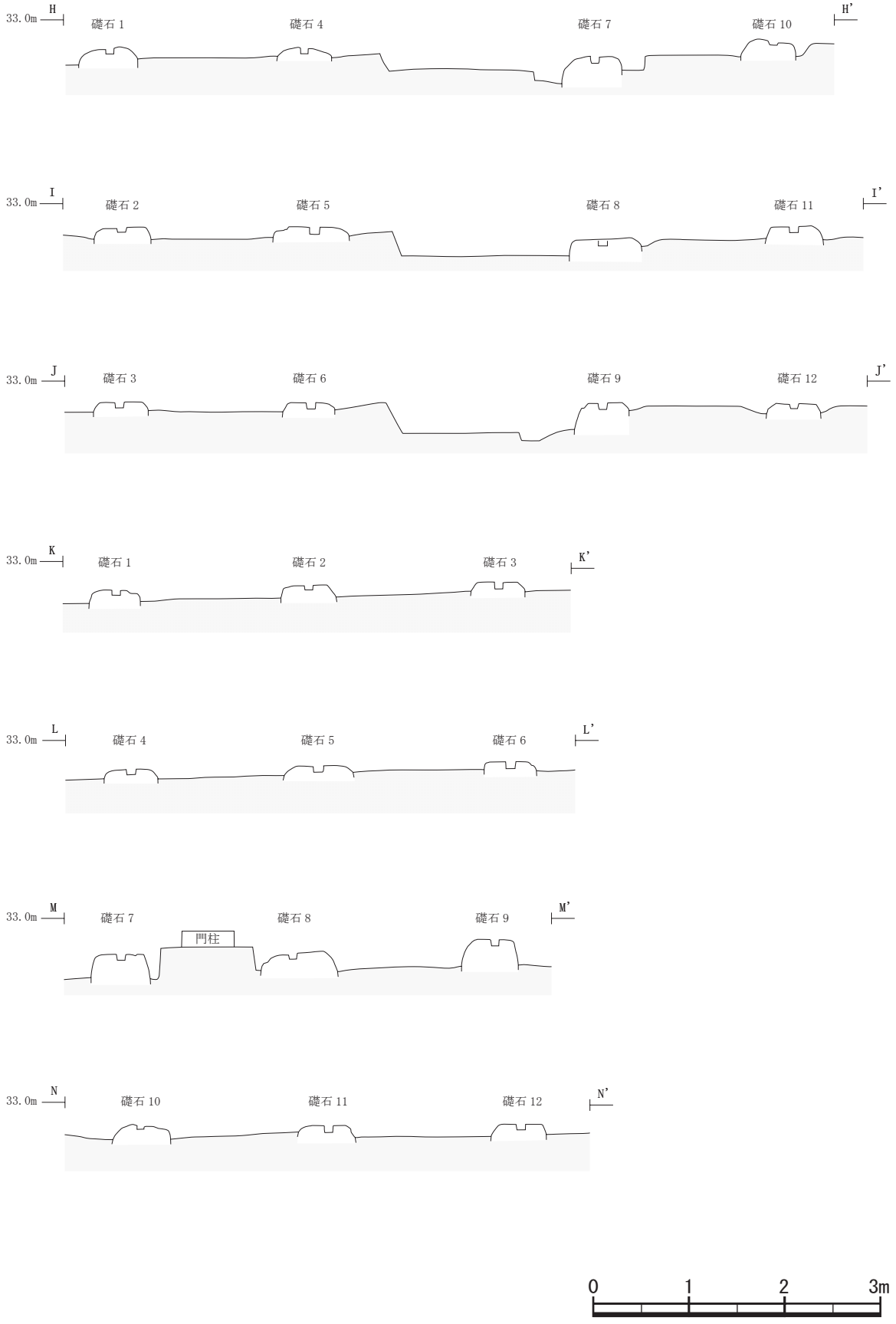
第６図　仁王門礎石跡（網掛）位置図

（礎石について）

門の礎石 12 石全てが確認され、北西角より No.1 ～ 12 の番号を付した（第６図）。礎石の大きさは、本柱にあたる No.5 が東西 78cm、南北 74cm、同じく No.8 が東西 85cm、南北 83cmと大きく、その他の礎石は東西、南北共に 60cm程度である。平面形は、割れ等により形状が崩れているものもあるが、全体的に方形を基調とする。12 石中６石の礎石側縁には部分的にノミ加工痕がみられ、直線的な整形が施されている。また、礎石上面のノミ加工による平坦面は、風化や剥落、崩れにより加工痕の観察が困難な３石を除く９石で確認された。この平坦面の大きさは、本柱にあたる No.5、No.8 が長径で 53cm、55cmと大きく、その他の礎石は 40 ～ 45cm程度である。柱の径の違いを



第７図　仁王門礎石跡平面図



第８図　仁王門礎石跡エレベーション図

No.	礎石大きさ（東西×南北㎝）	礎石平坦部の大きさ（東西×南北㎝）	礎石上面（ほぞ穴上端）の標高（m）	ほぞ穴（全て円形）							その他の特徴
				径（㎝）	深さ（㎝）	礎石側面のノミ加工				ハツリ加工	
						東	西	南	北		
1	62×54	風化により不明	32.70m	10	6	風化により不明				×	ヒビ、一部崩れ
2	60×58	42×43	32.76m	10	5	×	○	○	×	×	ヒビ、一部黒色化（受熱痕？）
3	56×56	45×42	32.78m	10	6	○	×	○	×	×	一部黒色化（受熱痕？）
4	55×57	風化により不明	32.70m	10	5	風化により不明				×	ヒビ、一部崩れ
5	78×74	53×50	32.74m	10	8	×	×	×	×	×	ヒビ
6	54×55	40×43	32.78m	10	7	×	○	×	○	×	なし
7	60×61	40×48	32.62m	10	7	○	×	○	×	×	ヒビ、一部崩れ
8	85×83	55×43	32.64m	10	6	×	×	×	×	○（西側面）	北側へ傾斜（沈下か）
9	60×60	35×40	32.78m	10	7	×	×	×	×	×	なし
10	61×64	風化により不明	32.77m	10	4	風化により不明				×	ヒビ、一部崩れ
11	60×58	42×37	32.76m	10	6	○	○	×	×	×	なし
12	55×57	40×47	32.77m	10	6	○	○	○	○	×	なし

表３　仁王門礎石跡　礎石観察表

反映したものと考えられる。この平坦面の平面形は、円形もしくは楕円形である。

全ての礎石でほぞ穴が確認された。穴は径 10㎝の円形で、深さは６～８㎝である。

12 石のうち７石にヒビや剥落、崩れが認められたが、特に門の背面側にあたる No.1，4，10 の３石については、表面のノミ加工痕等が全く観察できない程、表面の風化が進み、剥落や崩れがみられた。これらの痕跡が、全て昭和 18 年の火災に伴うものか断定はできないが、被熱によると思われる黒色化した箇所も一部の礎石（No.2，3）で観察された。

礎石の石材は、全て安山岩系の岩石とみられるが、採取地は不明である。

（礎石掘り方について）

２トレンチのⅡ層（近世整地層上部）上面において、根固めとみられる径３～20㎝の円礫を各礎石（No.7，8，9）の周囲で確認した。この時点で明確な掘り方のプランは確認されなかったが、各礎石の脇で土層を断割ったところ、風化した凝灰岩礫を含みやや黄色味がかったⅡ層土に対し、安山岩質の円礫を主体的に含みやや暗い土色の掘り方埋土とみられる土層を確認した。この結果に基づき、礎石 No.7，9 について一部面的に掘下げ、再度精査し、根固め石の分布範囲をほぼ掘り方プランとして認識した。各掘り方の直径は約１ｍである。

（柱間について）

仁王門は、焼失前の昭和 14 年に仙台高等工業学校建築科 小倉強教授が行った調査によれば、桁行 23 尺（通り間 10 尺）、梁行 13 尺の八脚門で、柱間は６尺５寸（約 196㎝）である。今回の調査においても基本的に同様の測量結果となっているが、一部の礎石に、沈下による位置のずれが認められた。特に東側の本柱にあたる No.8 は、北側が沈下するかたちで礎石全体が傾斜しており、ほぞ穴の位置が北に 20㎝程ずれている。

（礎石上面のレベル差について）

各礎石上面（ほぞ穴上端部）のレベルを比較すると、門背面側に位置する風化や剥落が顕著な No.1，4 が他より約 6㎝低く、No.7 については約 14㎝低くなっている。剥落等により、上面レベルが低くなっている可能性もあるが、ほぞ穴の残存度や風化や剥落があまり見られない No.7 のレベルが著しく低い点を考慮すると、門背面側の、この３石については、沈下している可能性が高いと推測される。（第２表参照）。

（2）ピット

Ｐ１ピット

２トレンチの中央やや西壁寄りで確認した。確認面はＩａ層上面である。平面形は楕円型で、規模は長径 40㎝、短径 30㎝、深さ 19㎝である。遺物は出土していない。昭和 18 年における仁王門焼失以降の遺構と考えられる。

（3）遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少なく、磁器２点のみである。この内、５トレンチのⅢｂ層より出土した 18 世紀

後葉の肥前産染付碗は、近世期の整地年代を示す資料である。口縁部から腰部にかけて全体の５分の１程が残存している。外形は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。外面には格子目文、○×文が配される。内面に文様は認められない。破片資料であるため見込み文様の有無は不明である。

２トレンチのⅠａ層から青磁の小片が出土した。器種は不明だが、年代は19世紀後半以降である可能性が考えられる。

5. まとめ

(1) 近世期の整地層について

今回の調査で確認された整地層は、整地層下部（Ⅲ層）の上位に位置するⅢｂ層より18世紀後葉の肥前産染付碗が出土したことから、18世紀後半には、ある程度造成が進んでいたものと考えられる。寺の伝え（『龍門山洞雲寺伝』）によれば、洞雲寺における諸堂の建立は、伊達家の庇護を受け、享保14（1729）年より50年をかけて完成されたとされ、享保年間以降に建立された建物の年代は、仏殿：延享２（1745）年、仁王門：明和９（1772）年、開山堂：安永４（1775）年、山門：天明元（1781）年、庫裏：寛政３（1791）年とされる。堂宇の中心である仏殿の建立が最も早いことから、仏殿の位置する平場北半から先に造成が進められた可能性が高い。18世紀後半の染付碗が出土した５トレンチは、仁王門の北８ｍに位置し、仁王門を中心とする平場の南半にあたる。出土した染付碗から推定される平場南半の整地年代と、仁王門の建立年代との間に矛盾は無い。

仏殿と仁王門が建立された平場の面積は、現況で約2,800㎡である。整地層の厚さを約１ｍとすれば、2,800㎥もの土砂が整地されたことになる。今回の調査では、江戸時代中期において寺院建立に伴い実施された、大規模な造成工事の様相を明らかにすることができた。

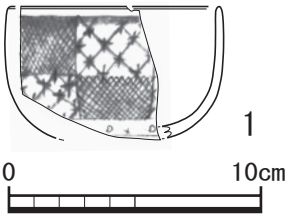
(2) 仁王門礎石跡について

仁王門は桁行23尺、梁行13尺の八脚門であったが、昭和18年の山火事によりに焼失した。今回の調査では、仁王門の礎石跡を確認した。礎石は12石全てが残存しており、うち３石について詳細な断面観察調査（２トレンチ）を行ったところ、掘り方と根固めを伴うことが確認された。このことから仁王門は、18世紀後半に大規模な整地が行われた後、掘り方を掘削し、根固めを伴う礎石を配し建立されたものと考えられる。礎石は、一部に沈下等がみられるものの、仁王門建築時の位置にあると考えられ、より古い掘り方等は、今回の調査では確認されなかった。柱間は６尺５寸（約196㎝）である。礎石にはほぞ穴がみられ、上面、側面にノミ加工痕が認められた。

なお、礎石の掘り方については、今回、整地終了後に掘り方を掘削し、根固め石と礎石を設置したものと解釈したが、掘り方が不明瞭なことから整地と並行して据え方を形成し、根固め石、礎石を設置した可能性も否定できない。特に仁王門を含めた建造物の建築は、造成と一体の計画の下に実施されたとみられることから、整地と並行して礎石が設置された可能性も、類例の増加とともに今後検討していく必要がある。

参考文献

仙台市教育委員会 1993『洞雲寺遺跡』仙台市文化財調査報告書第175集



掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量（cm）			備　考
								口径	底径	器高	
1	2-8	J－1	5トレ	3層	磁器	碗	破片	(8.3)	―	―	肥前　染付　外面：斜格子・市松・○×文　18C後葉

第９図　第２次調査出土遺物

1.　調査地近景（南から）

2.　１トレンチ全景（南東から）

3.　１トレンチ北壁断面（南西から）

4.　仁王門礎石跡全景（上が南西）

5.　２トレンチ全景（西から）

6.　２トレンチ礎石７堀り方断面（北西から）

7.　３トレンチ全景（東から）

8.　３トレンチ北壁断面（南西から）

写真図版１　第２次調査（1）

1.　４トレンチ全景（南東から）

2.　４トレンチ北壁断面（南西から）

3.　５トレンチ全景（南から）

4.　５トレンチ東壁断面（南西から）

5.　６・７トレンチ近景（西から）

6.　トレンチ全景（西から）

7.　７トレンチ全景（北西から）

8.　出土遺物（２トレンチⅢｂ層）

写真図版２　第２次調査（2）

第３章　宮城野区内の調査

第１節　田母神屋敷跡

Ⅰ.遺跡の概要

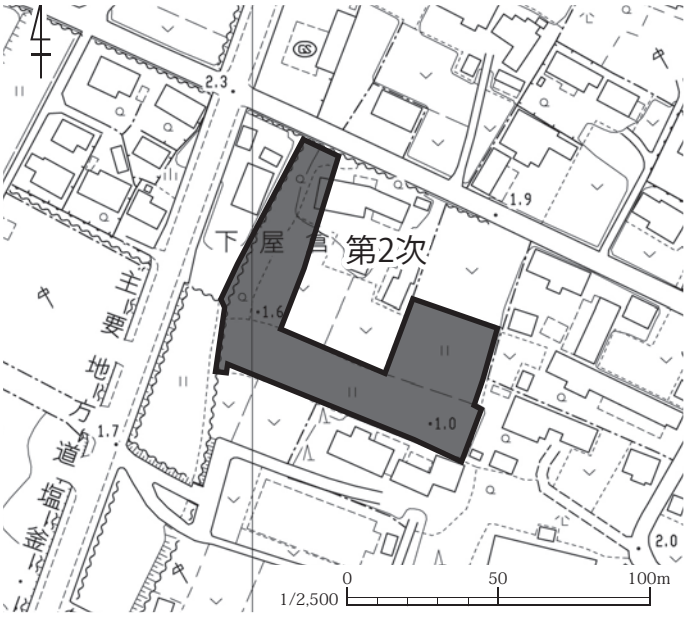
田母神屋敷跡は、仙台市北東部の仙台市宮城野区蒲生字岡田に所在し、JR 仙台駅から東へ約 9.0km に位置する。七北田川右岸に形成された標高 2.0 ｍほどの自然堤防上に立地し、遺跡の範囲は東西約 300m、南北約 200 ｍである。紫桃正隆氏の『史料　仙台領内古城･館　第４巻』によれば､本遺跡は近世初頭に小太刀の師範として伊達家に仕え、450 石を拝領した田母神氏が居住したと伝わる屋敷跡である。屋敷地は周囲を水濠と土塁に囲まれた東西約 250m、南北約 120m におよぶ平城形式の屋敷とされる。

本遺跡では、数次の個人住宅建築などに伴う確認調査が実施されている。平成 18 年度には、今回の対象地西側で集会施設建設に伴う第１次調査が行われ、田母神屋敷跡との関連は明らかにはできなかったが、近世ないしそれ以降とみられる溝跡や土坑が検出されている。

Ⅱ. 第２次調査

1.　調査要項

遺　跡　名　　田母神屋敷跡（宮城県遺跡登録番号 01231）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岡田蒲生字鍋沼 40 － 3
調 査 期 間　　平成 26 年 8 月 25 日～ 9 月 3 日
調査対象面積　　水路：105.6㎡　津波避難タワー：142.0㎡
調 査 面 積　　水路：14.6㎡（1 トレンチ：7.45㎡　2 トレンチ：7.15㎡）　避難タワー：27.5㎡



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	田母神屋敷跡	屋敷跡	自然堤防	近世
2	竹ノ内遺跡	散布地	浜堤	平安
3	牛小舎遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安
4	和田織部館跡	屋敷跡	浜堤	近世

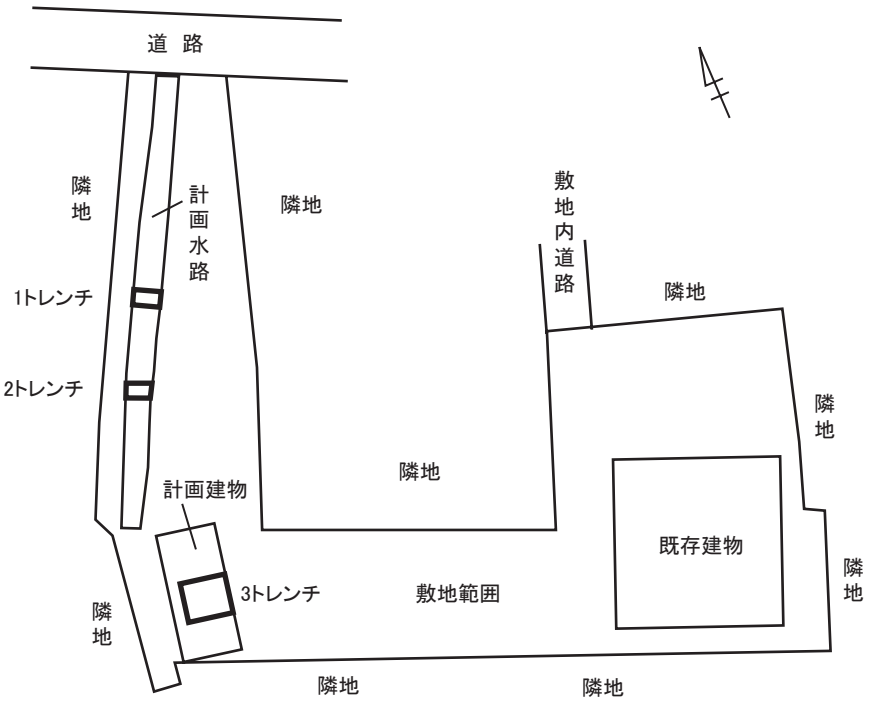
第 10 図　田母神屋敷跡と周辺の遺跡・第２次調査区位置図

調 査 要 因　　津波避難タワー新築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部
　　文化財課調査調整係
担 当 職 員　　小泉博明　　小山紘明
　　小林航

2.　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は担当課より平成 26 年 6 月 9 日付で提出された、「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 26 年 7 月 7 日付 H26 教生文第 109 － 16 号で伝達）に基づき実施した。対象地は遺跡の北西部にあたり、平成 18 年度に行われた集会施設建設に伴う発掘調査地点の西側に位置する。

調査は平成 26 年 8 月 25 日より水路部分の調査から着手した。対象地は現在も機能している南北方向の排水路と重複し、この排水路は田母神屋敷跡の西辺を区画する溝跡を踏襲している可能性が当初から指摘されていた。対象地周辺の現況を考慮して、２箇所の調査区を設定し、北から１トレンチ、２トレンチと調査区番号を付した。表土掘削および現在の排水路に伴う堆積土の掘削を重機と人力を併せて行った。その結果、現在の排水路堆積土より古い粘土質の堆積層が確認され、現在の排水路以前に、南北方向の比較的大規模な溝跡の存在が明らかとなった。



第 11 図　第２次調査区配置図（1/1,000）

津波避難タワー箇所では、平成 26 年 8 月 27 日に調査を開始した。盛土およびそれ以前の耕作土を重機で掘削し、自然堆積層である砂層（基本層Ⅱ層）上面で遺構検出作業を行った。その結果、溝跡１条、土坑１基を検出した。調査では、必要に応じて、平面図および断面図を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。調査は平成 26 年 8 月 28 日に終了し、調査区の埋め戻しを 9 月 2 日に、仮囲いの撤去を 9 月 3 日に行った。

3.　基本層序

対象地は、地点により現況が異なることから、基本層も一様ではない。共通する基本層は、浜堤を形成するとみられる均質な砂層である。

Ⅰ層：避難タワー新築箇所では、盛土以前の畑耕作土である。層厚は約 0.80m で、４層に細別される。暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)などを呈するシルトおよび粘土質シルトで、いずれも砂を含む。ａ層はガラスやプラスチックなどを含み、現代の耕作土である。ｂ層からｄ層の時期は不明である。

Ⅱ層：水路改良工事および津波避難タワー新築箇所のいずれにも分布する灰オリーブ色（5Y5/2）を呈する均質な砂で、グライ化が認められる。津波避難タワー新築箇所の調査では、本層上面を遺構検出面としている。

4.　発見遺構と出土遺物

３箇所の調査区で溝跡２条、土坑１基を検出した。また、遺物は避難タワー新設調査区の基本層Ⅰ層から陶器１点、木製品１点が出土している。以下に調査区ごとに概要を記述する。

(1) 排水路１・２トレンチ

田母神屋敷跡北西部に位置する南北方向の現排水路内に設定した。検出した遺構には、溝跡１条がある。

SD1 溝跡

田母神屋敷跡北西部に位置する南北方向の溝跡で、現排水路と重複している。位置や方向から、現排水路は、SD １溝跡を踏襲し、ある程度、埋没した段階で掘り直されたものと考えられる。確認した検出長は 8.50m 以上で、さらに調査区外南北へ延びる。規模は上端幅 2.70m 以上、下端幅 1.80m 以上で、深さは現地表面から約 1.65m である。断面形は不明である。堆積土は５層を確認した。砂を含む暗褐色などの粘土質シルトおよび粘土で、いずれも自然堆積土とみられるが、一部、人為的に埋め戻されている可能性がある。遺物は出土していない。

(2) 津波避難タワー新設箇所調査区

田母神屋敷跡の北西部に位置する。検出した遺構には、溝跡１条、土坑１基がある。

SD2 溝跡

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。撹乱によって、一部を壊されているが、検出長は約 3.00m で、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約 1.00m、下端幅約 0.70m で、深さ約 0.20m である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層である。砂やスクモを含む黒褐色の粘土で、自然堆積土である。遺物は出土していない。

SK1 土坑

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸約 1.70m、短軸約 1.50m で、深さ約 0.30m である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に細別され、砂とスクモを含む黄灰色、黒褐色の粘土質シルトおよび粘土である。遺物は出土していない。

（３）遺構外出土遺物

津波避難タワー新設箇所調査区の基本層Ⅰ層から、18 世紀代の陶器（大堀相馬産掛分碗）１点と楔とみられる木製品１点が出土した。図示したものはない。

5.　まとめ

調査地点は、田母神屋敷跡の北西部に位置し、平成 18 年度に行われた集会施設建築に伴う第１次調査地点の西側にあたる。今回の調査では、水路改良工事範囲内に２箇所、津波避難タワー建築範囲内に１箇所の調査区をそれぞれ設定し、調査を実施した。

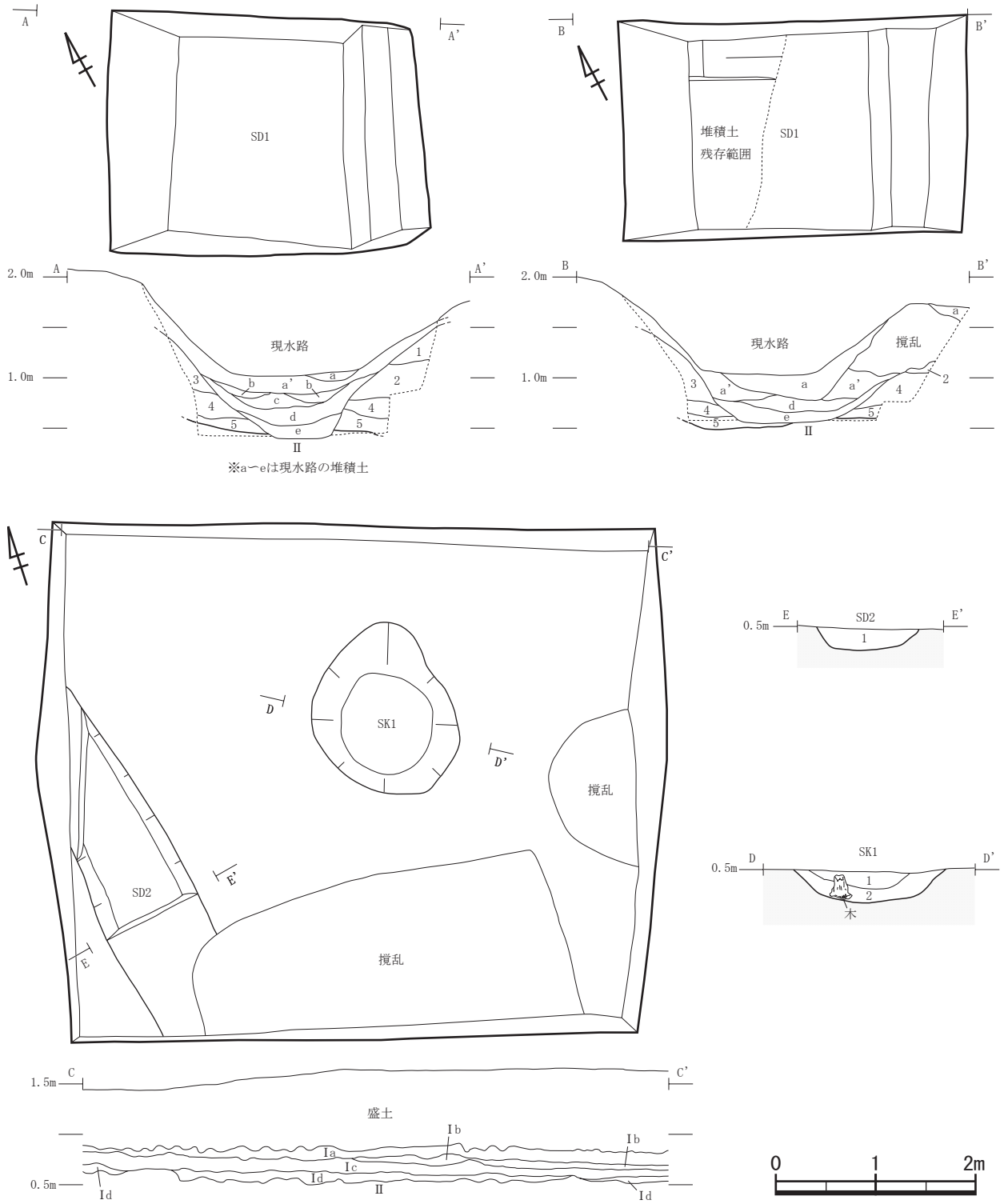
水路改良工事範囲内では、南北方向の溝跡１条を検出した。調査区の制約から検出した溝跡の規模は明らかではないが、上端幅 2.70m 以上の比較的大規模な溝跡である。田母神屋敷跡に伴い、屋敷地の西辺を区画する前述の資料に記載された「水濠」に該当する可能性がある。しかし、出土遺物がないことから時期を検討することができず、断定することはできなかった。また、同資料にみられる「土塁」についても、今回の調査地点やその周辺で踏査を実施したが、地表顕在遺構として確認することはできなかった。

津波避難タワー建築範囲内では、溝跡１条、土坑１基を検出した。いずれも出土遺物がないことから、時期を特定することができず、田母神屋敷跡に関わる遺構か判断することはできない。なお、SK1 土坑は底面に樹木の根が残存していたことから、植栽痕の可能性がある。

今回の調査では、平成 18 年度に実施された調査成果を併せても、田母神屋敷跡に関連すると特定できる遺構の検出には至らなかった。屋敷地内における中枢部や付属施設の検出、屋敷地の範囲の特定や構造の解明などは、今後の調査成果の蓄積を待ちたい。

参考文献

仙台市教育委員会 2007「Ⅸ　田母神屋敷跡発掘調査報告書」『松森城跡他』仙台市文化財調査報告書第 310 集



SD1

層位	色　調	土　質	備　考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	均質
2	2.5 Y 4/1 黄灰色	粘土質シルト	砂を小ブロック状に少量含む
3	2.5 Y 4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	小礫を若干含む
4	5 Y 3/2 オリーブ黒色	粘土	砂を均質に含む
5	2.5 Y 3/1 黒褐色	粘土	植物遺存体を少量含み、砂を均質に含む

SD2

層位	色　調	土　質	備考・混入物
1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	砂を均質に含み、植物遺存体を若干含む

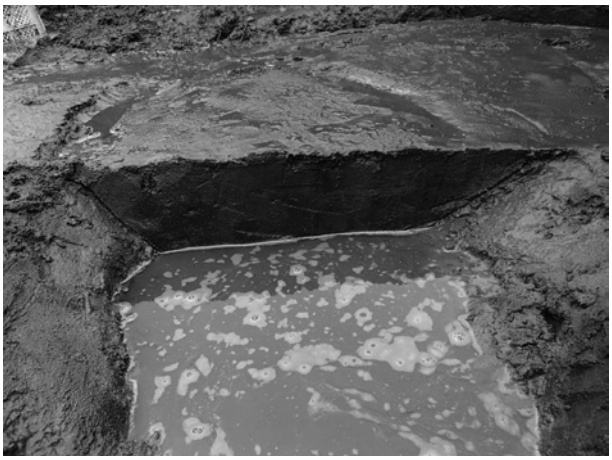
SK1

層位	色　調	土　質	備考・混入物
1	2.5Y4/1 黄褐色	粘土	砂を小ブロック状に若干含む
2	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	砂を均質に含み、植物遺存体、木片を含む

第 12 図　第２次調査区平面・断面図

1.　２トレンチ SD1 断面（南から）

2.　３トレンチ調査区全景（西から）



4.　３トレンチ SD2 断面（北西から）

5.　３トレンチ SK1 断面（南から）

写真図版３　第２次調査

第４章　若林区内の調査

第１節　沓形遺跡

Ⅰ.遺跡の概要

沓形遺跡は仙台市若林区荒井字矢取東・沓形他に所在する生産遺跡である。JR 仙台駅から南東方向に約 6.0km に位置し、遺跡は主に後背湿地上に立地する。現況の標高は約 2.0 ～ 4.0 ｍである。本遺跡では、土地区画整理事業に伴い、平成 19 年度の第１次調査から平成 23 年度の第３次調査まで断続的に調査が実施され、弥生時代中期中葉以前、弥生時代中期中葉、古墳時代前期、古代から中世の水田跡が広範囲に確認されている。特に弥生時代中期中葉の水田跡は、日本海溝付近で発生した震災を原因とする津波によってもたらされた砂を主体とする堆積物に覆われており、仙台平野における過去の災害痕跡を遺跡の発掘調査で確認した事例のひとつとして注目される。

一方、該期の弥生時代に属する遺跡をみると、本遺跡西方の自然堤防上に立地する中在家南遺跡や押口遺跡で、河川跡から木製品を含む遺物が大量に出土し、前者からは土坑墓と土器棺墓で構成される墓域も発見されている。このことから、微高地上には集落が形成されていたと考えられ、後背湿地上に立地する生産遺跡である本遺跡や隣接する荒井南遺跡との関連が想定される。

Ⅱ.第５次調査

１　調査要項

遺　跡　名　　沓形遺跡 (宮城県登録遺跡番号 01562)

調 査 地 点　　仙台市若林区荒井字矢取東 50 他

調 査 期 間　　平成 26 年 9 月 29 日（月）～平成 26 年 10 月 28 日 (火)

調査対象面積　　1477.9㎡

調 査 面 積　　179.02㎡

（１トレンチ：69.58㎡

２トレンチ：109.44㎡）

調 査 原 因　　荒井東土地区画整理事業の整備計画に基づく区画道路等新設工事

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

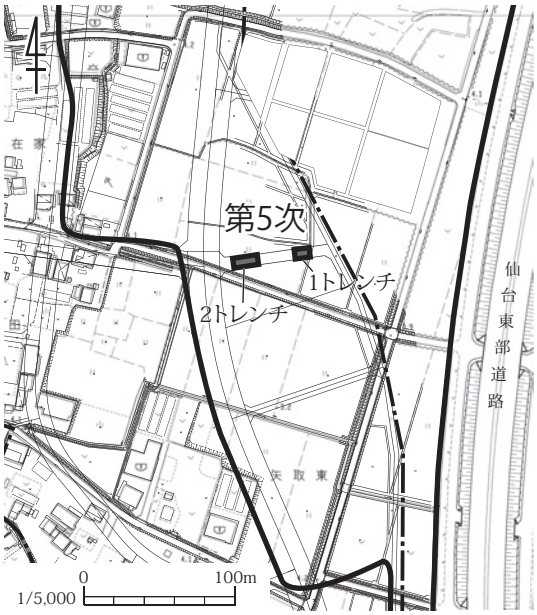
担 当 職 員　　小泉博明　　小山紘明

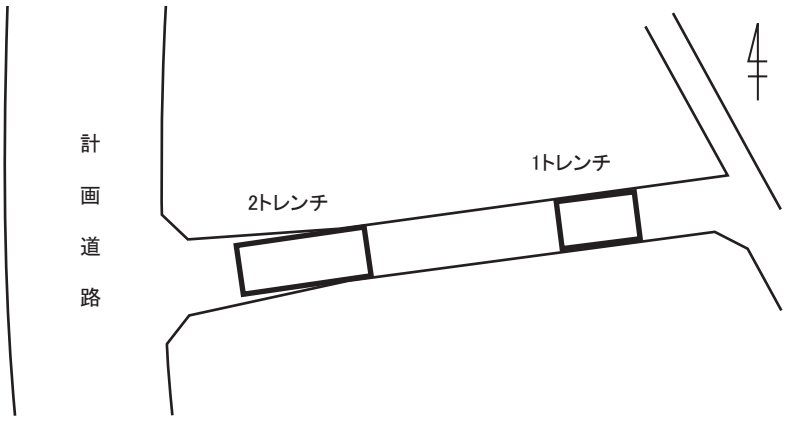
番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	沓形遺跡	生産遺跡	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
2	押口遺跡	河川跡・水田跡・包含地	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・古代・中世・近世
3	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
4	荒井畑中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代・中世
5	荒井館跡	城館跡	自然堤防	中世
6	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
7	仙台東郊条里跡	条里跡	自然堤防	平安
8	中在家南遺跡	土器棺墓・土壙墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	古墳・平安・中世・近世
9	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世
10	荒井南遺跡	水田跡	後背湿地	弥生
11	荒井広瀬遺跡	河川跡	後背湿地	弥生・古墳
12	下荒井遺跡	散布地	自然堤防	平安

第 13 図　沓形遺跡と周辺の遺跡

２　調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は、平成 26 年７月 18 日付で申請者より提出された「仙台市荒井東土地区画整理事業の整備計画に基づく区画道路等新設工事と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」（平成 26 年８月６日付 H26 教生文第 108 － 90 号で回答）に基づき実施した。今回の対象地周辺では、区画整理事業に伴い、平成 19 年度から発掘調査が行われており、広範囲に弥生時代中期の水田跡とそれを覆う津波堆積物、古墳時代前期および古代から中世にかけての水田跡が確認されている。今回の調査は平成 26 年９月 29 日に着手した。調査区は新設される東西道路の両端に計２箇所を設定して、東側の調査区に１トレンチ、西側の調査区に２トレンチと調査区番号を付した。重機による掘削では、区画整理事業に伴う盛土および現水田耕作土（１層）を除去した。いずれの調査区でも、現水田耕作土の直下で確認した基本層２ｃ水田耕作土上面から遺構検出作業を行い、以降の掘削はすべて人力で行った。





第 14 図　第５次調査区位置図・配置図

１トレンチでは、灰白色火山灰を粒状とブロック状に含む水田耕作土（２ｃ層）とその直下で弥生時代の水田耕作土（６ａ層）の水田跡２面を確認したが、弥生時代の水田跡を覆う津波堆積物（５ｂ層）は認められなかった。後世の耕作等によって、津波堆積物および弥生時代の水田層上部は削平を受けていると判断された。

２トレンチでは、１トレンチと同じく２面の水田跡を確認した。耕作土に灰白色火山灰を含む水田跡（２ｃ層）では、擬似畦畔Ｂを検出し、それによって区画された５つの水田区画を確認した。また、弥生時代の津波堆積物（５ｂ層）が調査区東半部を中心に比較的良好な状態で残存し、それに覆われる弥生時代の水田耕作土（６ａ層）と畦畔１条を検出した。なお、本調査区は平成 22 年度に実施された試掘調査№ 62 調査区と重複している。

いずれの調査区でも適宜、平面図および断面図、調査区配置図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査終了後の埋め戻しは、協議の結果、申請者側で行うこととなり、10 月 29 日にすべての調査を完了した。

３　基本層序

今回の調査で確認した基本層は９層である。今回の調査では、第２・３次調査で用いられた基本層序に対応させているが、一部、調査時の所見により新たに層番号を付して基本層の細分を行っている。

１層：区画整理事業に伴う盛土以前の現代の水田耕作土である。いずれの調査区にも分布し、オリーブ黒色（5Y3/2）を呈する粘土質シルトである。層下面に酸化鉄の集積が認められる。

２ａ層：現耕地整理事業以前の水田耕作土で、１トレンチで確認した。黒褐色（10YR2/2）を呈する粘土で、第２・

３次調査基本層２層に対応するものとみられる。

２ｂ層：耕地整理事業以前の水田耕作土で、１トレンチで確認した。黒褐色（2.5Y3/2）を呈する粘土で、植物遺存体を含む。

２ｃ層：黒褐色（10YR3/1）を呈する粘土で、いずれの調査区にも分布する。耕作によって巻き上げた灰白色火山灰を粒状およびブロック状に含む近世以降の水田耕作土である。

３ａ層：２トレンチで確認した灰白色火山灰をブロック状に含む黒褐色（10YR3/2）を呈する粘土で、古代から中世の水田耕作土と考えられている。上層の削平を受け、2c 層水田耕作土に伴う擬似畦畔部分にのみ残存する。

３ｃ層：２トレンチで確認した黒褐色（10YR2/1）を呈する粘土と未分解の植物遺体の互層で、自然堆積層である。２c 層水田耕作土に伴う擬似畦畔部分にのみ残存する。

５ａ層：２トレンチで部分的に確認した砂を多く含む黒褐色（2.5Y3/2）の粘土である。

５ｂ層：いわゆる津波堆積物である。１トレンチでは、上層の耕作の影響で残存していないが、２トレンチでは、ほぼ全域に分布する。黒褐色（2.5Y3/2）の粘土を斑状に含む。弥生時代の水田耕作土と考えられる基本層６層を覆っている。

６ａ層：いずれの調査区でも確認された黒褐色（2.5Y3/2）を呈する粘土で、植物遺存体を少量含む弥生時代中期の水田耕作土である。１トレンチでは、上面が後世の耕作の影響によって上部が失われているが、いずれの調査区でも層下面に耕作によって形成されたと考えられる凹凸が顕著に認められる。

７層：いずれの調査区でも確認された黄灰色（2.5Y4/1）を呈する粘土である。植物遺存体を含む自然堆積層である。

８層：いずれの調査区でも確認された黄灰色（2.5Y5/1）、黒褐色（10YR2/2）、にぶい黄色（2.5Y6/3）を呈する粘土の互層で、自然堆積層である。

９層：いずれの調査区でも確認された砂を含むにぶい黄色（2.5Y6/3）を呈する粘土で、自然堆積層である。

４　発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見した遺構は、水田跡２面、溝跡１条、土坑１基である。２トレンチでは、それぞれの水田耕作土に伴う畦畔および疑似畦畔を検出した。以下に調査区ごとに概要を記述する。

１トレンチ

（１）２c 層水田跡

ⅰ.検出・遺存状況

畦畔は確認されなかった。層上部が基本層２b 層水田跡によって攪拌されているためと考えられる。

ⅱ．耕作土

耕作土は基本層２c 層である。層厚は５～ 20㎝で、下面に若干の起伏がある。灰白色火山灰を含む。

ⅲ．畦畔

層上部が後世の削平を受けていることから、残存していない。

ⅳ．水田区画

畦畔が検出されなかったことから、水田区画の規模は不明である。また、水田面の標高は、層上部が失われていることから明らかにすることはできない。

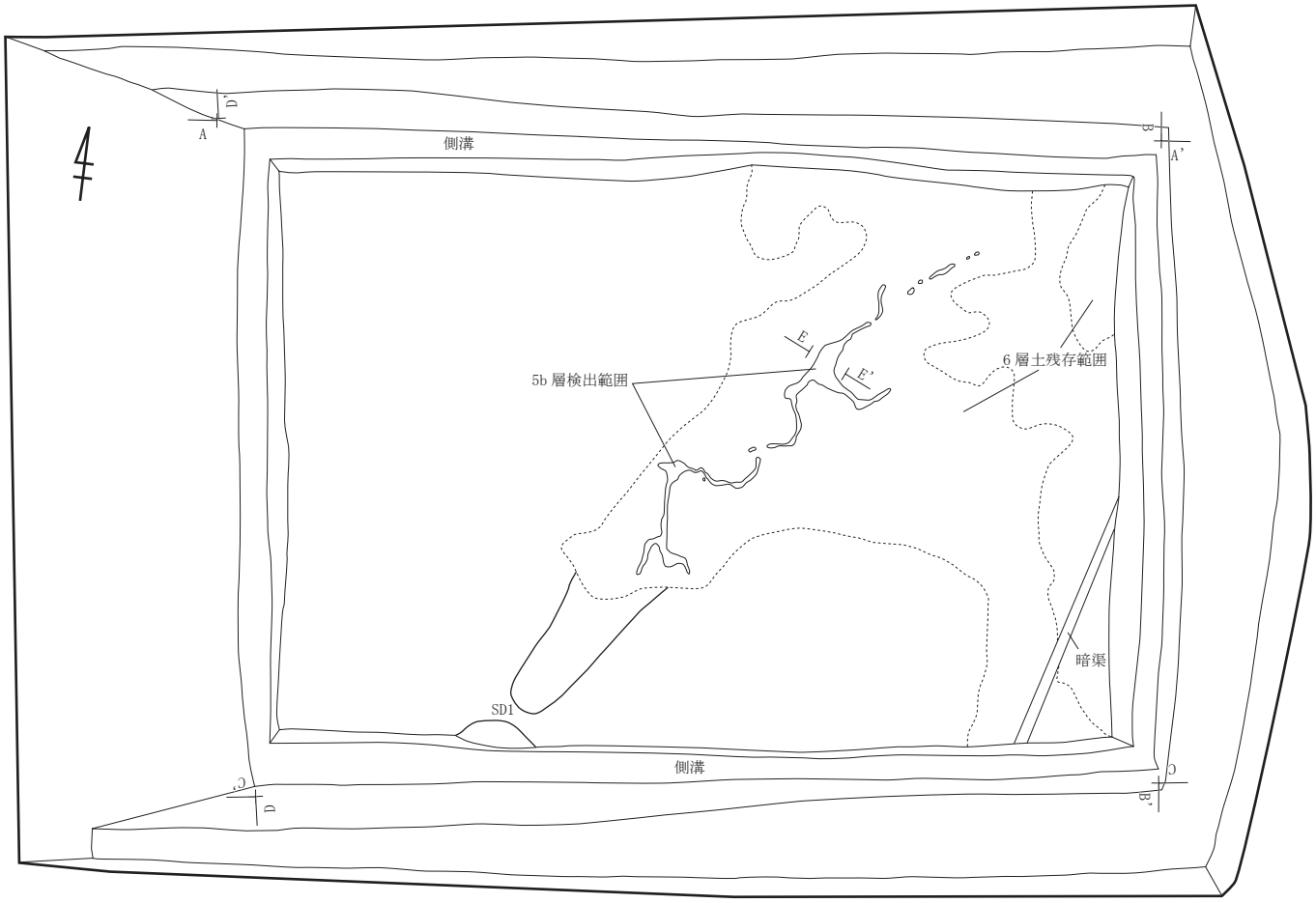
ⅴ．出土遺物

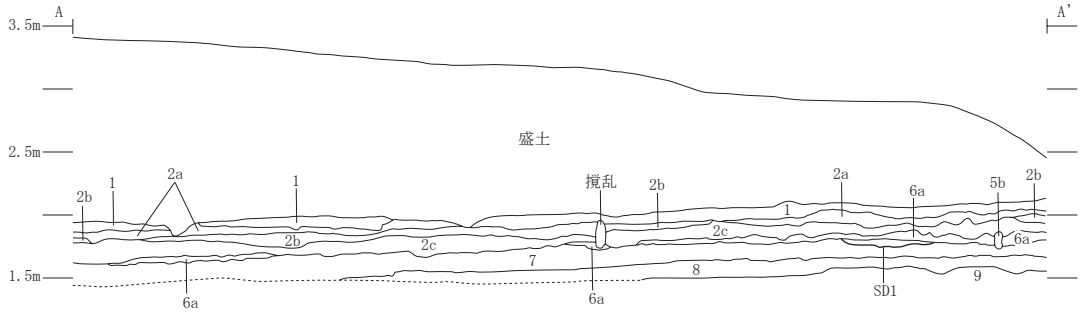
遺物は出土していない。

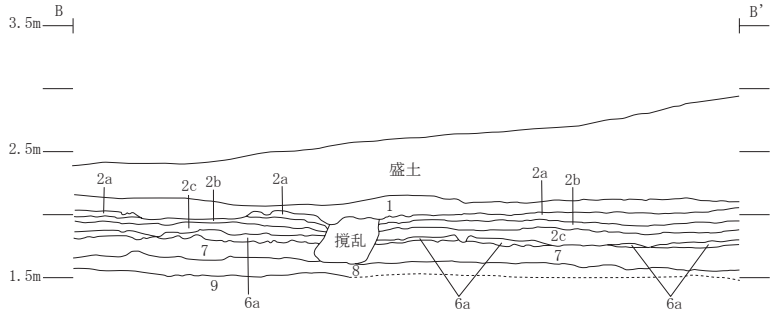
（２）６a 層水田跡

ⅰ.検出・遺存状況

畦畔は確認されなかった。層上部が基本層２c 層水田跡によって攪拌されているためと考えられ、残存状況は不







SD1

層位	色　調	土　質	備　考
1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	7 層粒～小ブロックを若干含み、植物依存体を少量含む

第 15 図　1 トレンチ 6a 層水田跡平面・断面図

良である。

ⅱ．耕作土

耕作土は基本層６ａ層である。層厚は数㎝である。層下面に起伏があり、層直下の黄灰色を呈する粘土を巻き上げて斑状に含む。

ⅲ．畦畔

２ｃ層水田跡の耕作による影響を受け、層上部が失われているため、検出されなかった。

ⅳ．水田区画

畦畔が検出されなかったことから、水田区画の規模は不明である。また、水田面の標高は、層上部が失われていることから明らかにすることはできない。

ⅴ．出土遺物

遺物は出土していない。

ⅵ.その他

本層上面で北東～南西方向に蛇行する溝状の凹部を検出した。第２・３次調査報告で「浅い凹部」と称されるものに該当する。検出長は一部、途切れるが、約 4.00 ｍで、さらに調査区外へ延びる。上端幅は最大で約 15cm、深さは不均等であるが数 cm である。断面形はＵ字状および皿状を呈する。堆積土は津波堆積物である基本層５ｂ層を主体とする。

遺物は出土していない。

（３）７層上面検出遺構

ＳＤ１溝跡

調査区東半部で検出した北東～南西方向の溝跡である。調査区壁面の観察から、基本層６ａ層に覆われている。検出長は約 6.00 ｍで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約 0.35 ～ 1.00 ｍ、下端幅約 0.10 ～ 0.50 ｍで、深さは最大で 10cm ほどである。断面形は逆台形および皿状を呈する。堆積土は単層である。基本層６ａ層に類似し、黄灰色を呈する粘土を含む黒褐色の粘土である。遺物は出土していない。

２トレンチ

本調査区では、２面の水田耕作土とそれに伴う畦畔および擬似畦畔Ｂを検出した。

（１）２ｃ層水田跡

ⅰ．検出・遺存状況

２ｃ層上面において擬似畦畔３条を確認した。層上部は後世の耕作により失われている。

ⅱ．耕作土

耕作土は基本層２ｃ層である。層厚５～ 20cm が残存し、層下面に起伏がある。灰白色火山灰を含む。

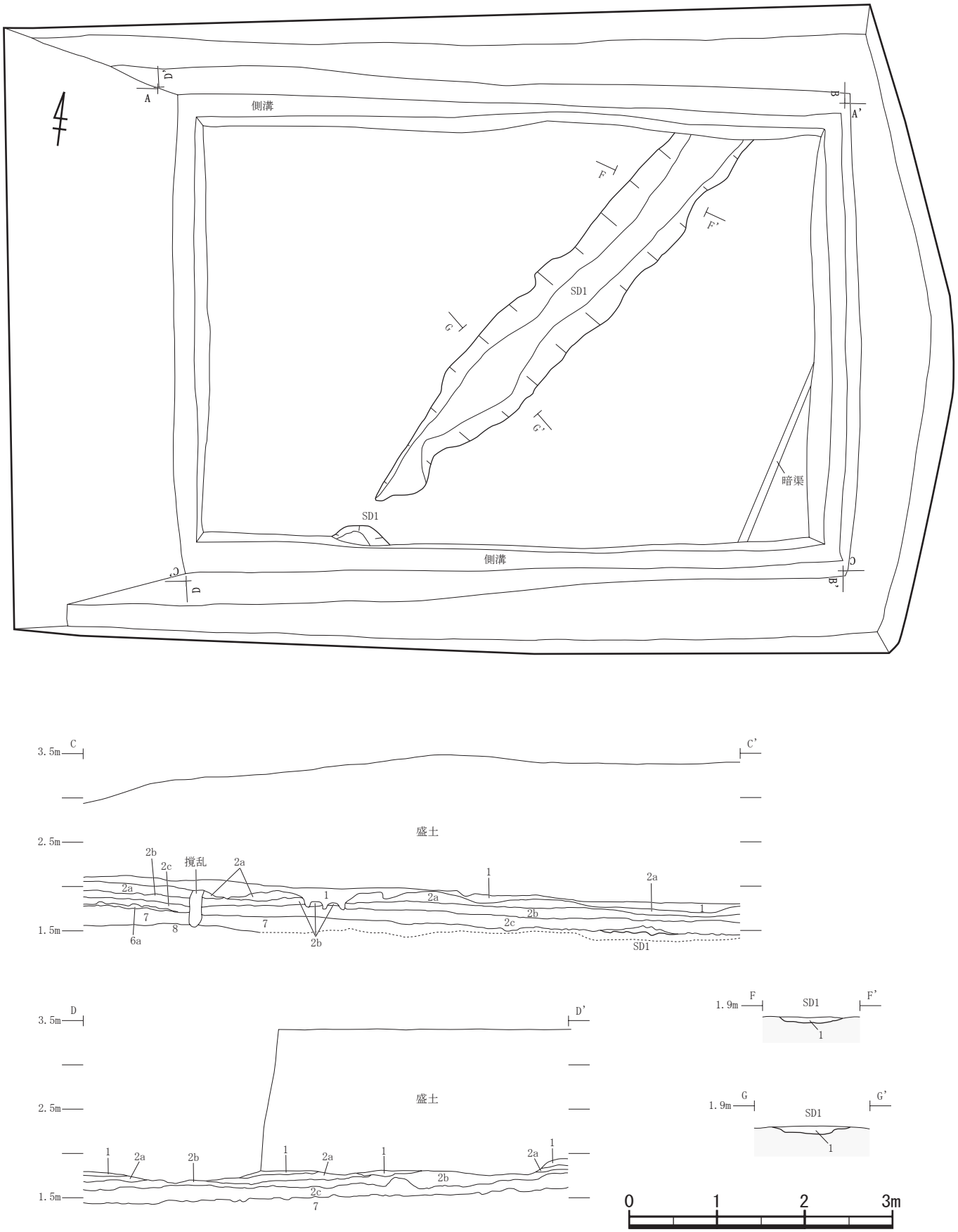
ⅲ．畦畔

層上部は後世の削平を受けているが、擬似畦畔Ｂを検出した。擬似畦畔Ｂは基本層３ａ層および３ｃ層で形成され、東西方向のもの１条（疑似畦畔１）とそれに直行する南北方向のもの２条（擬似畦畔２・３）を検出した。

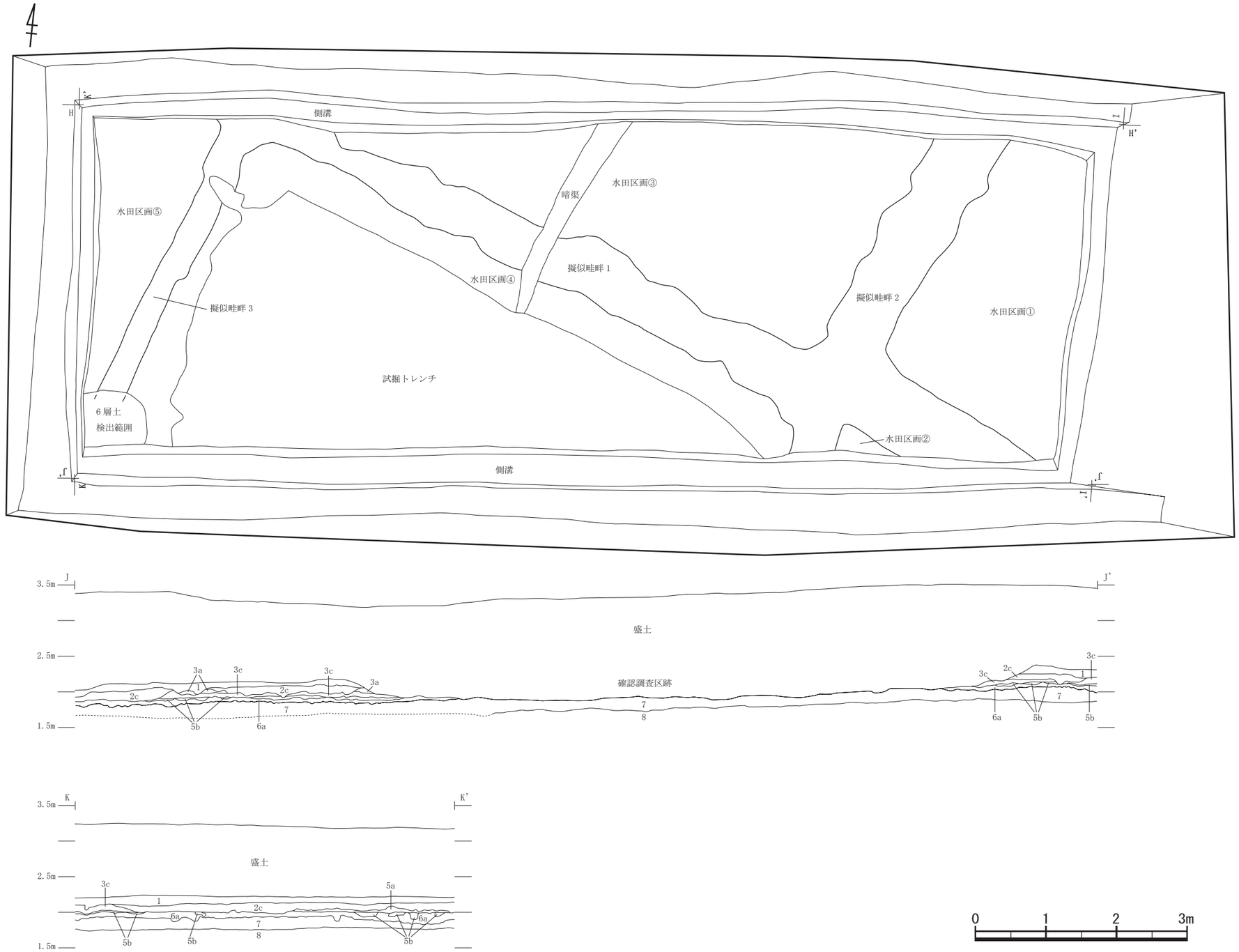
擬似畦畔１は調査区を縦断する東西方向の擬似畦畔である。検出長約 11.5m で、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約 0.30 ～ 1.00 ｍである。調査区壁面で確認した耕作土下面からの高さは最大で約 15㎝である。

擬似畦畔２は調査区東部で検出した南北方向の擬似畦畔である。検出長約 5.00m で、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約 0.55 ～ 1.00 ｍである。調査区壁面で確認した耕作土下面からの高さは最大で約 15㎝である。

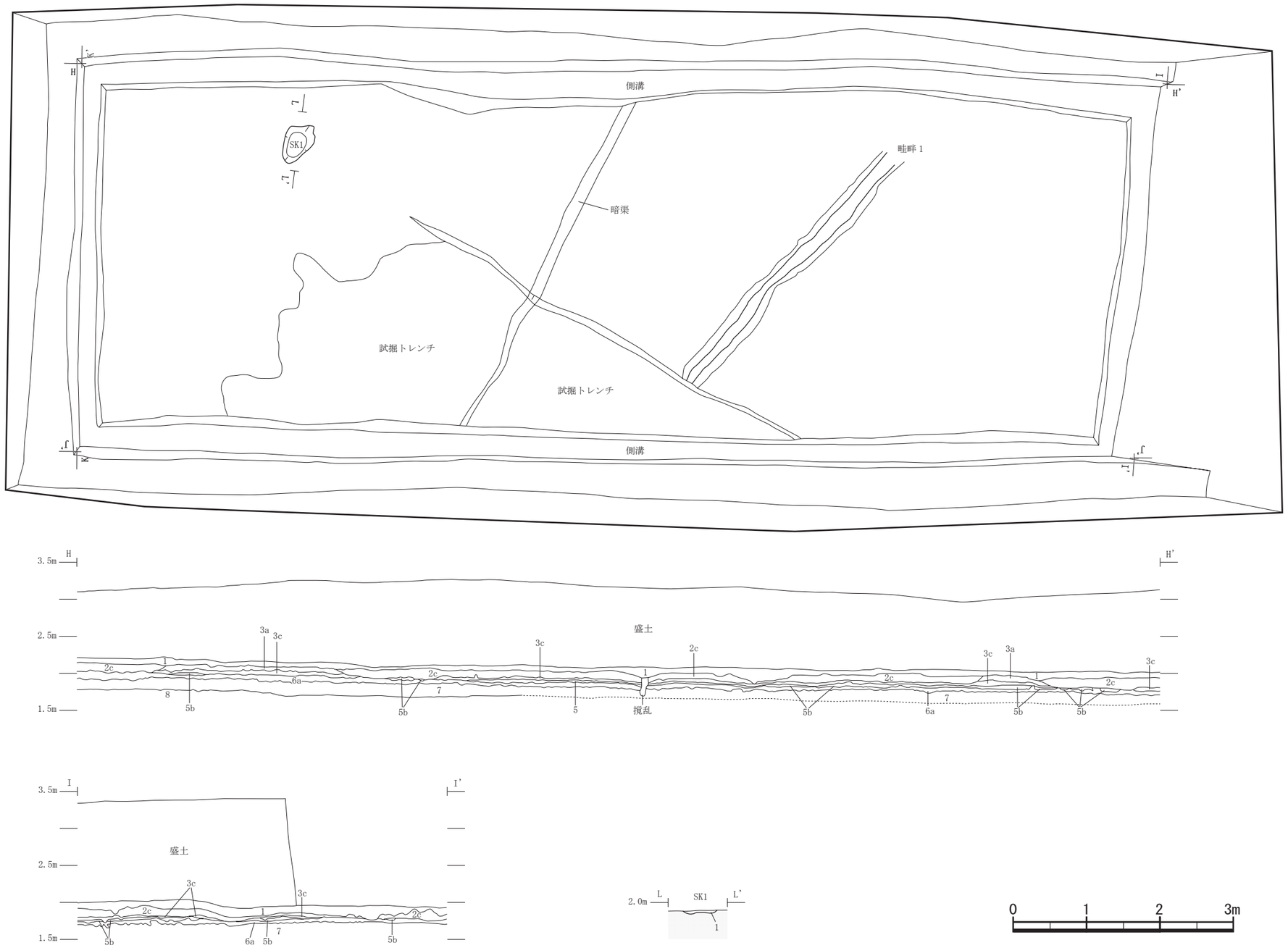
疑似畦畔３は調査区西部で検出した南北方向の擬似畦畔である。検出長約 5.20m で、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約 0.30 ～ 0.40 ｍである。調査区壁面で確認した耕作土下面からの高さは最大で約 10㎝である。



第16図　１トレンチ７層上面平面・断面図



第 17 図　２トレンチ 2c 層水田跡平面・断面図



第 18 図　２トレンチ 6a 層水田跡平面・断面図

ⅳ．水田区画

擬似畦畔で画された水田区画①・②・③・④・⑤を確認した。いずれも部分的な検出のため、規模は不明であるが、水田区画④は現状で東西約 8.6 ｍである。また、水田面の標高は、層上部が失われていることから明らかにすることはできない。

ⅴ．出土遺物

耕作土である基本層２ｃ層から、土師器甕、土師質土器小皿、肥前産白磁小坏（第 19 図 3）、肥前産灰釉碗（第 19 図 1）、瀬戸美濃産灰釉小坏（第 19 図 2）、大堀相馬産灰釉碗・白濁釉鉢・鉄釉瓶類、堤焼とみられる鉄釉小壺、銭貨（文久永宝）（第 19 図 4）が出土している。

（２）６ａ層水田跡

ⅰ．検出・遺存状況

津波堆積物である５層下面において畦畔１条を確認した。水田面は５層によって覆われており、遺存状況は比較的良好である。

ⅱ．耕作土

耕作土は基本層６ａ層である。層厚は最大で 10㎝ほどである。層下面に起伏があり、層直下の黄灰色を呈する粘土を巻き上げて斑状に含む。

ⅲ．畦畔

南北方向の畦畔（畦畦１）を１条検出した。畦畔１は調査区東部に位置する。耕作土を盛り上げて造られている。検出長約 4.10m で、さらに調査区外へ延びるものとみられる。規模は上端幅約 0.10 ～ 0.20 ｍ、下端幅約 0.20 ～ 0.35 ｍである。水田面と畦畔上面の比高差は最大で約４㎝である。

ⅳ．水田区画

畦畔で画された水田区画①～②を確認した。部分的な検出であることなどから、水田区画の規模は不明である。水田面の標高は、1.74 ～ 1.98 ｍで、西から東に向かって緩やかに傾斜している。

ⅴ．出土遺物

遺物は出土していない。

（３）６ａ層上面検出遺構

ＳＫ１土坑

調査区西部で検出した土坑である。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸約 0.60 ｍ、短軸約 0.40 ｍで、深さ約５cm である。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層で、津波堆積物である基本層５ｂ層が土坑底面に直接堆積している。遺物は出土していない。

５　まとめ

今回の調査地点は、沓形遺跡の北東部に位置する。今回の調査で検出した主な遺構には水田面２面がある。

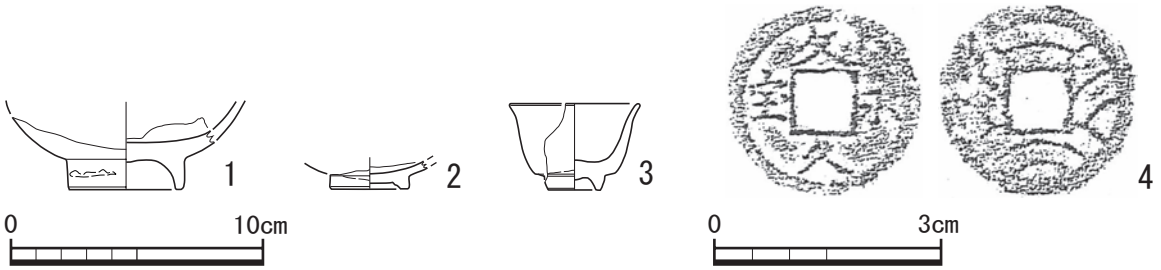
１トレンチでは、それぞれの時期の検討については後述するが、堆積層の様相から灰白色火山灰降下以降の２ｃ層水田跡と弥生時代中期にあたる６ａ層水田跡を確認した。いずれも後世の削平を受け、畦畔は残存しておらず、水田区画を明らかにすることはできなかった。同じ理由により、弥生時代中期の津波堆積物も水田面を覆う状態で確認されていない。一方、６ａ層耕作土に覆われた状態で、SD1 溝跡を検出した。今回の調査では、畦畔は検出されなかったが、これまでの仙台市内における水田の調査で、検出された畦畔に沿って確認される溝状の窪みと同様の性格が想定される。したがって、６ａ層水田跡に伴い、弥生時代中期に属する可能性がある。

２トレンチでは、灰白色火山灰降下以降の２ｃ層水田跡と弥生時代中期にあたる６ａ層水田跡を確認し、それぞれに伴う擬似畦畔Ｂおよび畦畔を検出した。擬似畦畔を伴う２ｃ層水田跡の時期は、古代から中世にかけての水田耕

作土と考えられている３a 層より新しく、耕作土である基本層２c 層から近世陶磁器などが出土していることから、近世以降と考えられる。これまでの調査では、灰白色火山灰を含む水田耕作土は、基本層３a 層として古代から中世にかけてとされていたが、近世以降まで下る可能性があることが判明した。６a 層水田跡では、南北方向の畦畔１条を検出した。出土遺物がなく、時期を限定することはできないが、本層を直接覆う津波に起因する堆積物と考えられている砂層（基本層５b 層）の年代観から、弥生時代中期と考えられる。

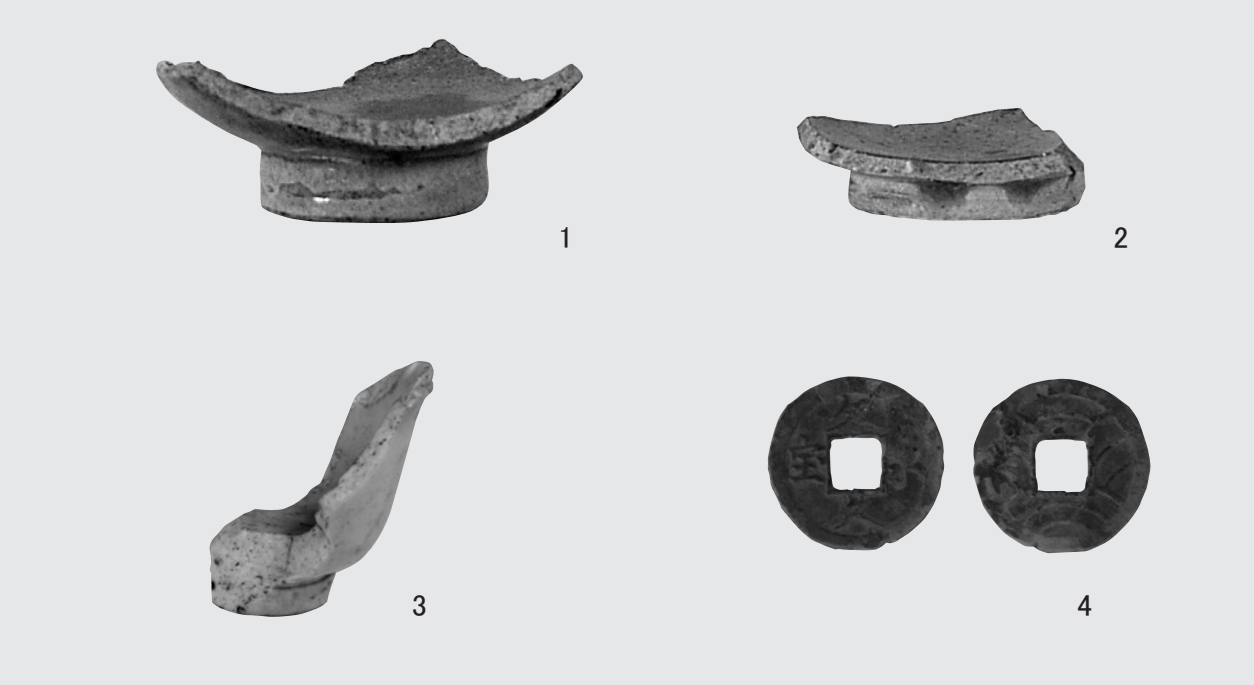
また、１トレンチ検出の「溝状の凹部」および２トレンチ検出のＳＫ１土坑は、検出や堆積土の状況から、第２・３次調査報告にある性格不明遺構およびピットと類似し、同様の性格が推定される。

今回の調査では、弥生時代中期と考えられている水田耕作土である６a 層がいずれの調査区でも認められた。第１次から３次にわたる発掘調査の成果では、該期の多くの水田区画の面積が約 20 ～ 50㎡である。しかし、上層の影響で耕作土上面が削平されていることや調査区が区画整理事業地内の道路予定地で細長い形態となったことから、今回の調査では、該期の水田の構造や区画を捉えることはできなかった。



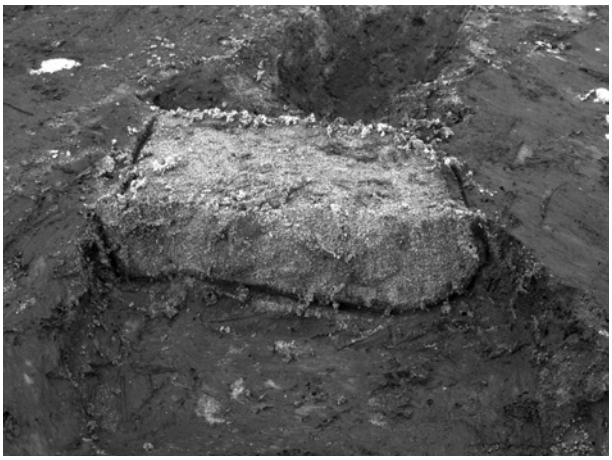
掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量（cm）			備　　考
								口径	底径	器高	
1	4-1	I-1	２トレ	2c 層	陶器	碗	下部	―	4.5	―	肥前、灰釉、17C 後葉～ 18C 前葉
2	4-2	I-2	２トレ	2c 層	陶器	小坏	底部片	―	3	―	瀬戸美濃、灰釉、高台部露胎、18C ～ 19C
3	4-3	J-1	２トレ	2c 層	磁器	小坏	1/4		(2.1)	3.5	肥前、白磁、高台無釉、端反、17C
4	4-4	N-1	２トレ	2c 層	銭貨	文久永宝	完形	直径 2.6			波銭（銅銭）、初鋳 1863（文久 3）年

第 19 図　第５次調査出土遺物



写真図版４　第５次調査出土遺物

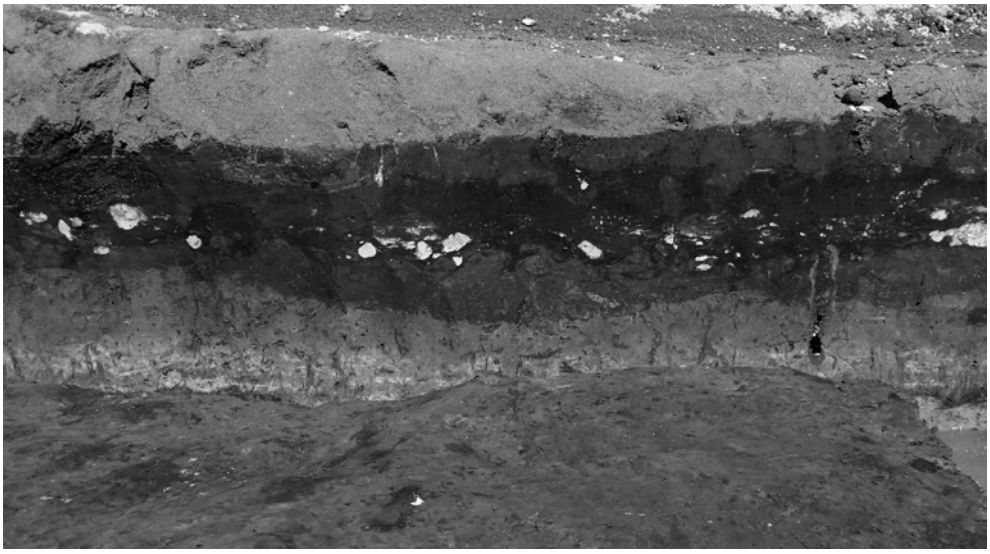
1.　1 トレンチ 6a 層検出（西から）



2.　1 トレンチ 6a 層上面浅い凹部断面（南西から）

3.　1 トレンチ 7 層上面 SD1 溝跡検出（南西から）

4.　1 トレンチ 7 層上面 SD1 溝跡①断面（南西から）

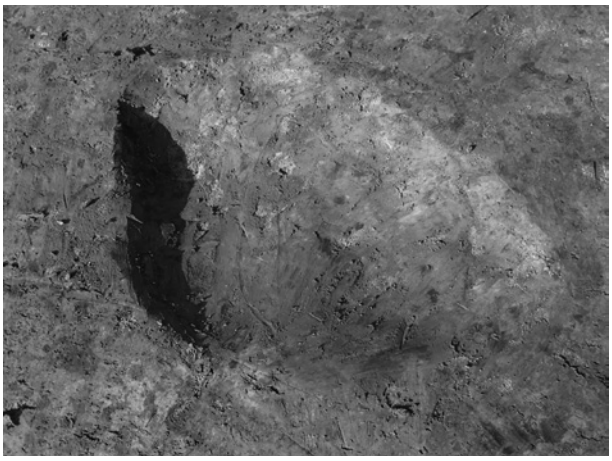


5.　1 トレンチ北壁 7 層上面検出 SD1 溝跡断面（南から）

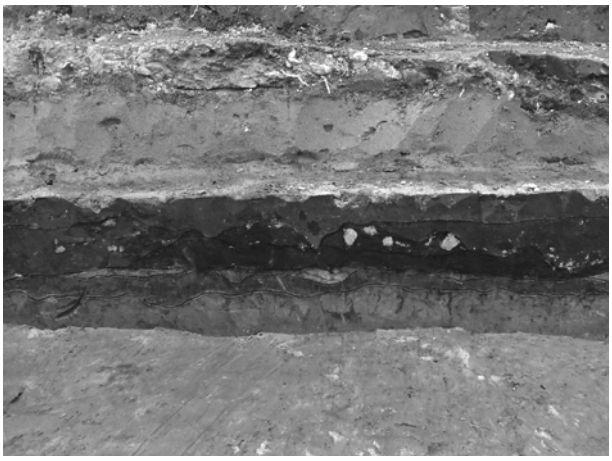
写真図版５　第５次調査（1）

6.　２トレンチ３層上面全景（東から）

7.　２トレンチ６層畦畔（北東から）



8.　２トレンチ SK1（東から）



9.　２トレンチ南壁３層疑似畦畔①断面（北から）

写真図版６　第５次調査（2）

Ⅲ　第６次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　沓形遺跡（宮城県遺跡登録番号 01562）

調 査 地 点　　仙台市若林区広瀬東 39-1 外

調 査 期 間　　平成 26 年７月 23 日～８月１日

調 査 面 積　　44㎡

調 査 原 因　　戸建復興公営住宅２棟分の平屋、鉄筋造、基礎形式布基礎＋鋼管杭・柱状改良（GL-5m）を伴う整備事業

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

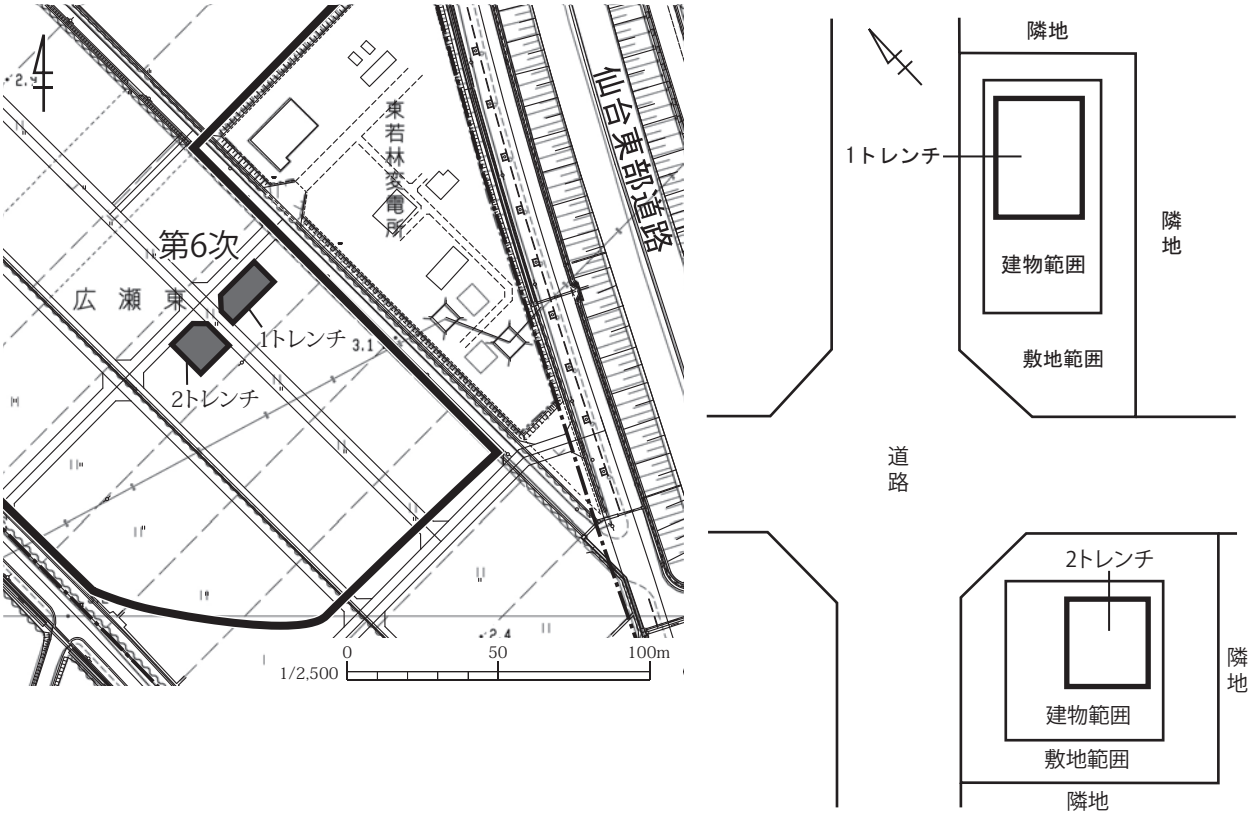
担 当 職 員　　文化財教諭　千葉悟　早坂純一

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 26 年５月 19 日付で担当課より提出された「仙台市荒井東地区（第一期）戸建復興公営住宅整備事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」（平成 26 年５月 29 日 H26 教生文 109-11 号で伝達）に基づき実施した。

重機により盛土および基本層１・２層を除去後、基本層３層以下で人力により遺構検出作業を行った。その結果、弥生時代と推定される水田耕作土とそれに伴うと推定される段差を検出した。

適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。



第 20 図　第６次調査区位置図（1/2,500）・配置図（1/400）

３．基本層序

１層：10YR3/2 黒褐色粘土である。層厚約 20cm で、現代の水田耕作土である。

２層：10YR3/1 黒褐色泥炭層である。層厚約 10cm で、植物遺存体を多量に含む。灰白色火山灰を層状に含む。

３層:10YR4/2 灰黄褐色細砂である。層厚 2 ～ 15cm で、部分的に遺存する。弥生時代の津波堆積物と推定される。
5 次調査区の 5b 層に対応する。

４層：10YR2/2 黒色泥質粘土である。層厚 20cm で、下面には凹凸がある。弥生時代の水田耕作土と推定される。
5 次調査区の 6a 層に対応する。

５層：10YR6/1 褐灰色粘土である。層厚 20cm 以上で洪水堆積層と推定される。

４．発見遺構と出土遺物

1・2 トレンチより水田耕作土と推定される層を検出し、1 トレンチでは水田耕作土の下面で溝状の落ち込みを検出した。遺物は出土していない。

1 トレンチ

本調査区では、水田耕作土と畦畔の痕跡と考えられる段差を検出した。また、5 層上面で、畦畔とほぼ並行する溝状の落ち込みを検出した。

（1）水田跡

ⅰ．検出・遺存状況

2 層下部において段差 1 条を確認した。

ⅱ．耕作土

耕作土は基本層 4 層である。層厚は 5 ～ 15㎝で下面は起伏がある。

ⅲ．畦畔

畦畔は確認できなかったが、南北方向の段差を 1 条検出した。検出長は約 4.0m で、高さは 5㎝である。また、水田耕作土下面から段差にほぼ沿う形で溝跡が検出された。

ⅳ．水田区画

部分的な検出のため規模は不明である。

ⅴ．出土遺物

遺物等は出土していない。

2 トレンチ

本調査区では、水田耕作土とそれに伴うと推定される段差を検出した。

（1）水田跡

ⅰ．検出・遺存状況

2 層下部において段差 1 条を確認した。

ⅱ．耕作土

耕作土は基本層 4 層である。層厚は 5 ～ 18㎝で下面は起伏がある。

ⅲ．畦畔

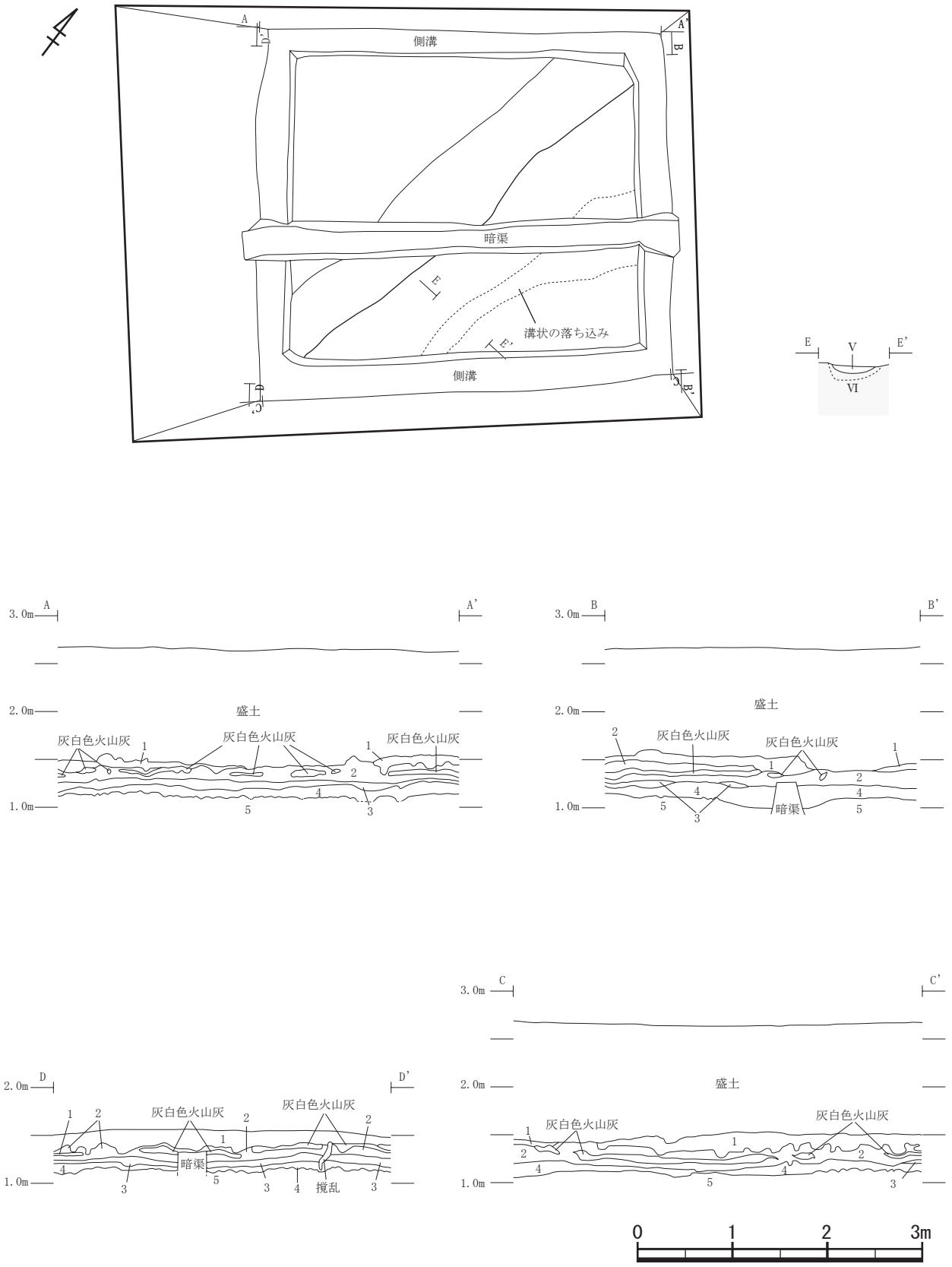
畦畔は確認できなかったが、南北方向の段差を 1 条検出した。検出長は約 3.5m、高さは 8 ～ 10㎝である。

ⅳ．水田区画

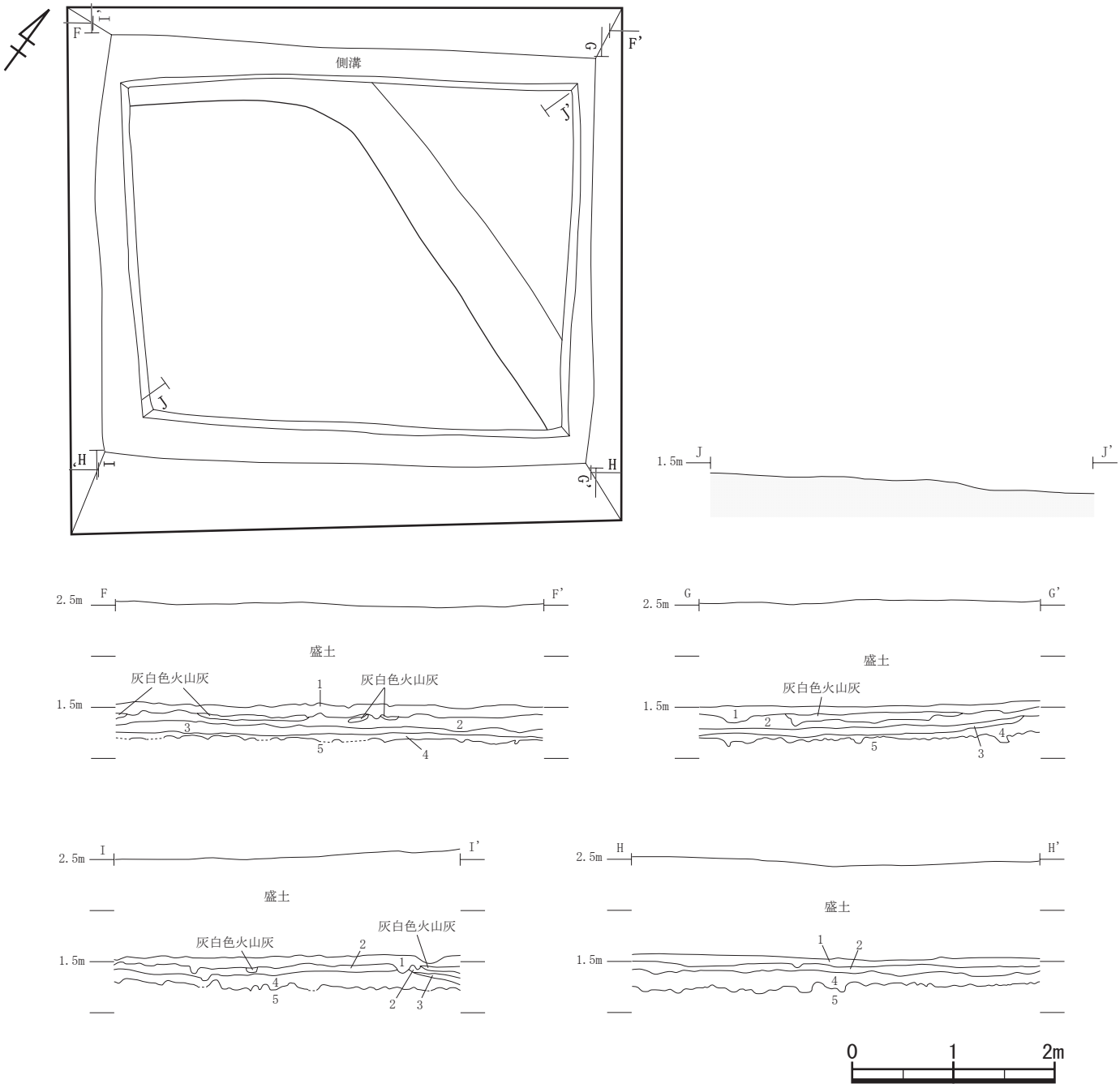
部分的な検出のため規模は不明である。

ⅴ．出土遺物

遺物は出土していない。



第 21 図　１トレンチ５層水田跡平面・断面図



第 22 図　２トレンチ５層水田跡平面・断面図

５．遺構外出土遺物

遺物は出土していない。

６．まとめ

今回の調査地点は、１トレンチ、２トレンチで水田耕作土と推定される４層と畦畔の痕跡と考えられる段差を検出した。

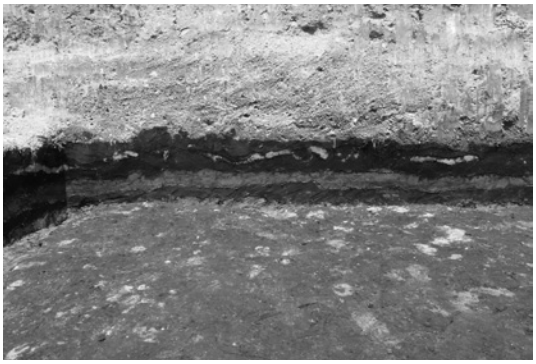
また、１トレンチでは、水田耕作土下に溝状の落ち込みを１条検出した。これは段差にほぼ並行することから、水田耕作に伴う痕跡と推定することができる。しかし、鋤・鍬痕などは検出されなかった。

1.　１トレンチ４層上面検出（南西から）

2.　１トレンチ５層水田跡検出（南西から）

3.　１トレンチ６層上面検出（南西から）

4.　１トレンチ SD1 溝跡完掘（南西から）



5.　１トレンチ北西壁断面（南東から）

6.　２トレンチ４層上面検出（南西から）

7.　２トレンチ５層水田跡検出（南西から）

8.　２トレンチ北西壁断面（南東から）

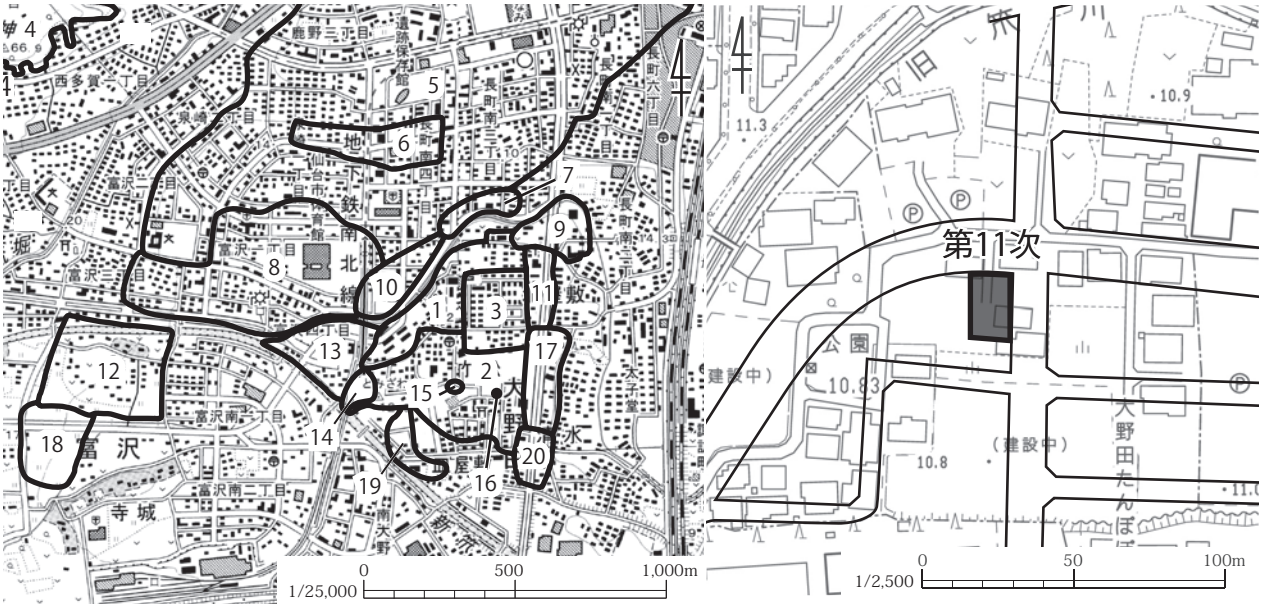
写真図版７　第６次調査

第５章　太白区内の調査

第１節　六反田遺跡

Ⅰ．遺跡の概要

六反田遺跡は仙台市の南東部にあたる太白区大野田字六反田に所在し、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。名取川の左岸に形成された標高 11.0 mほどの自然堤防上に立地する。遺跡は、東西約 0.10km、南北約 0.55km の範囲におよび、面積は約 77,700㎡である。縄文時代から奈良時代の集落跡である下ノ内遺跡、多数の円墳が検出された大野田古墳群、奈良時代の官衙跡と推定されている大野田官衙遺跡などと隣接している。発掘調査は 1976（昭和 51）年から開始された。平成６年度以降は「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査が行われ、その後も個人住宅建築に伴う発掘調査などが断続的に行われている。調査の結果、縄文時代中期後葉から後期初頭の集落、古墳時代の石棺墓・木棺墓、奈良時代から平安時代の集落跡が発見されている。さらに本遺跡と大野田古墳群、袋前遺跡に跨る形で大野田官衙遺跡がある。



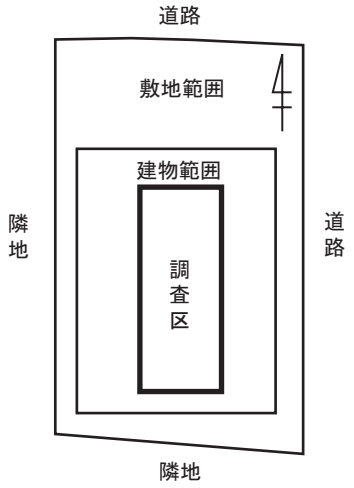
番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世
2	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
3	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	古代
4	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、平安
5	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世
6	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
8	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～中世
9	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
10	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
11	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文～古代
12	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世
13	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良
14	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳～古代
15	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
16	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳中期
17	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
18	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	平安
19	伊古田Ｂ遺跡	集落跡水田跡	自然堤防	古墳～古代
20	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	古代、中世

第 23 図　六反田遺跡と周辺の遺跡・調査区位置図

Ⅱ.第 11 次調査

1.調査要項

遺　跡　名　六反田遺跡（宮城県遺跡登録番号 01189）
調 査 地 点　仙台市太白区大野田字六反田 35-1、35-3、35-5、35-6
35-7、35-8 の一部（20 街区 12 画地）
調 査 期 間　平成 26 年 1 月 20 日～ 1 月 23 日
調査対象面積　建築面積 147.60㎡
調 査 面 積　46.23㎡
調 査 原 因　店舗建築工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　小泉博明　早坂純一　佐藤高陽　千葉悟



第 24 図　第 11 次調査区配置図（1/400）

2.調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より提出された、「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」(平成 25 年 12 月 26 日付 H25 教生文第 124-121 号で回答) に基づき実施した。確認調査は平成 26 年 1 月 20 日に着手した。申請者側で表示した建築範囲内に調査区を設定し、重機と人力によって、盛土および基本層Ⅰ～Ⅳ層を掘削した。基本層Ⅴ層上面で遺構検出作業を行い、竪穴住居跡１軒、溝跡３条、ピット６基を検出した。これを受けて、記録保存を目的とした本発掘調査に移行した。調査では、必要に応じて、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。遺構精査および記録保存終了後の調査区埋戻しは、協議の結果、申請者側で行うこととなり、平成 26 年 1 月 23 日に現場を引き渡して、今回の調査を終了した。

3.基本層序

今回の対象地は、富沢駅周辺土地区画事業に伴って、層厚約 0.60m の盛土による宅地造成が行われている。調査では、その下に大別６層の基本層を確認した。富沢駅周辺土地区画整理事業に関係する遺跡の調査は、平成６年度以降、事業地内の７遺跡で継続的に行われている。その中で、遺存状況が良好な地点の基本層を検討し、土地区画整理事業に関わる遺跡の調査では、共通した基本層序が用いられてきた。今回の調査でも、この基本層序に対応させて層番号を付している。なお、今回の調査地点は、全体的に若干のグライ化が認められる。

Ⅰ層：灰色（7.5Y5/1）を呈する均質なシルトである。宅地化以前の水田耕作土で、調査区全域に分布する。

Ⅲ層：部分的に残存する暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈するシルトである。富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査では、地点により 10 世紀初頭に降下したとされる灰白色火山灰の混入が認められるが、今回の調査では、確認されなかった。

Ⅳ層：黒褐色（10YR3/2）を呈する粘土質シルトで、調査区全域に分布する。基本層Ⅴ層起源の黄褐色（2.5Y5/3）の粘土質シルトを斑状に含む。土色により２層に分層されるが、グライ化の影響によるものの可能性がある。

Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR5/3）もしくは黄褐色（2.5Y5/3）を呈する粘土質シルトである。本層上面で古墳時代から 10 世紀初頭までの遺構が検出される。今回の調査における遺構検出面である。

Ⅵ層：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈する粘土である。

4.発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構には、竪穴住居跡１軒、溝跡３条、ピット６基がある。遺物は、主に遺構堆積土から土師器、須恵器などの土器類や金属製品が出土している。

（１）竪穴住居跡

ＳＩ１竪穴住居跡

調査区北部で検出した竪穴住居跡である。SD １溝跡と重複し、これよりも古い。北半部は削平を受け、床面が残存していないが、平面形は隅丸方形を基調としたものとみられる。推定される規模は東西約 3.00 m、南北約 2.70 mである。床面は掘方埋土を床面としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残りのよい住居跡南壁で床面から 0.08 mほどである。カマドは住居東辺南寄りに敷設されている。カマド両袖、燃焼部が残存し、燃焼部には被熱による赤変と河原石を用いた支脚が認められた。貯蔵穴はカマド右側の住居南東隅に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 0.95 m、短軸約 0.60 mで、深さ約 0.15 mである。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層で、炭化物を多く含む黒褐色の粘土質シルトである。なお、主柱穴、周溝などは検出されていない。住居内堆積土および埋土は、４層に細別される。１層は炭化物を含む暗灰黄色の粘土質シルトで、住居廃絶後の自然堆積層である。２層は炭化物と黄褐色の粘土質シルトを含む黒褐色の粘土質シルトで、カマド崩落土とみられる。３層はカマド燃焼部に堆積した炭化物を多く含むカマド機能時の堆積土である。４層は住居掘方埋土である。

遺物は、確認面や堆積土１層、貯蔵穴（SK- １）から非ロクロ調整およびロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕などが出土している。図化できたのは貯蔵穴 SK1 から出土した須恵器坏２点（第 26 図１・2）とロクロ調整の土師器甕２点（第 26 図４・5）、堆積土１層中の土師器甕１点（第 26 図 3）、遺構確認面の土師器甕２点（第 27 図１・2）と須恵器甕２点（第 27 図３・4）である。

（２）溝跡

ＳＤ１溝跡

調査区東部で検出した南北方向の溝跡である。SI１竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。一部途切れるが、検出長約 8.50 mで、さらに調査区外南へ延びる。規模は上端幅約 0.25 ～ 0.70 m、下端幅約 0.15 ～ 0.45 mで、深さ約 0.10 mほどである。断面形は逆台形およびＵ字状を呈する。堆積土は単層で、黄褐色の粘土質シルトをブロック状に多く含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、土師器甕４点、ロクロ土師器甕４点が出土している。

ＳＤ２溝跡

調査区南部で検出した南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。一部途切れるが、検出長約 3.80 mで、さらに調査区外南へ延びる。規模は上端幅約 0.30 ～ 0.65 m、下端幅約 0.15 ～ 0.40 mである。底面には凹凸が認められ、深さ約 0.05 ～ 0.20 mほどである。断面形は逆台形およびＵ字状を呈する。堆積土は単層で、黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＤ３溝跡

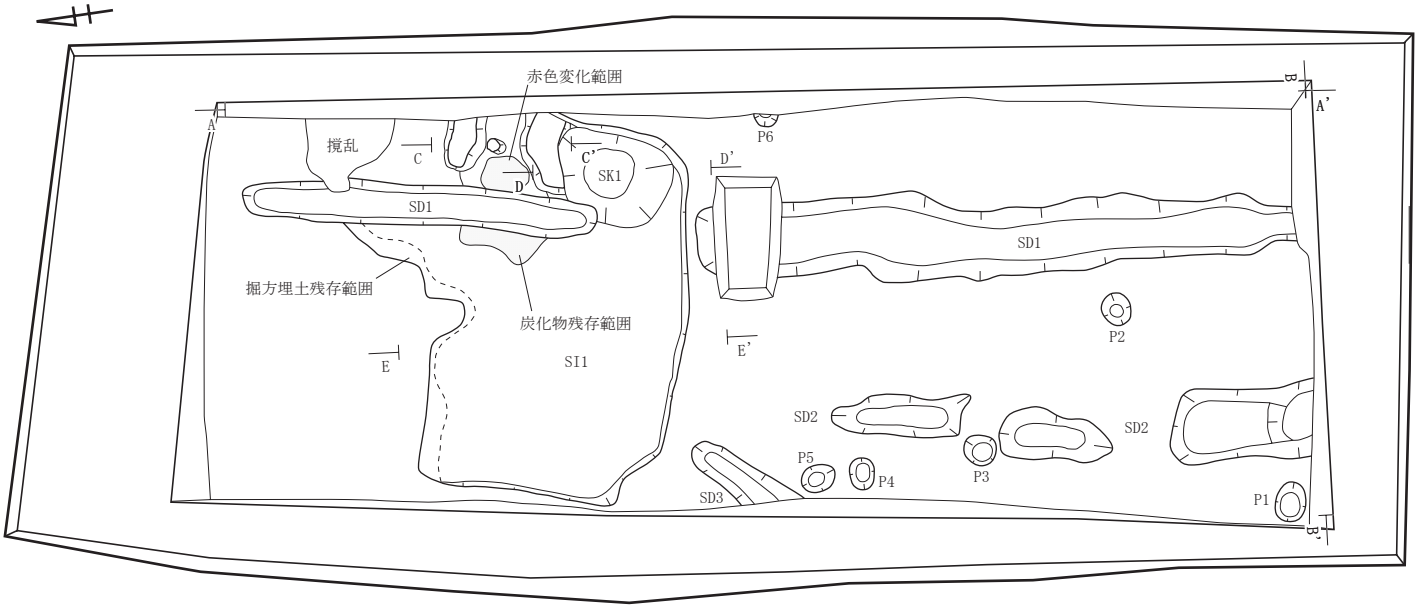
調査区南部で検出した北東～南東方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長約 0.95 mで、さらに調査区外西へ延びる。規模は上端幅約 0.30 m、下端幅約 0.10 mである。深さ約 0.10 mほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトである。

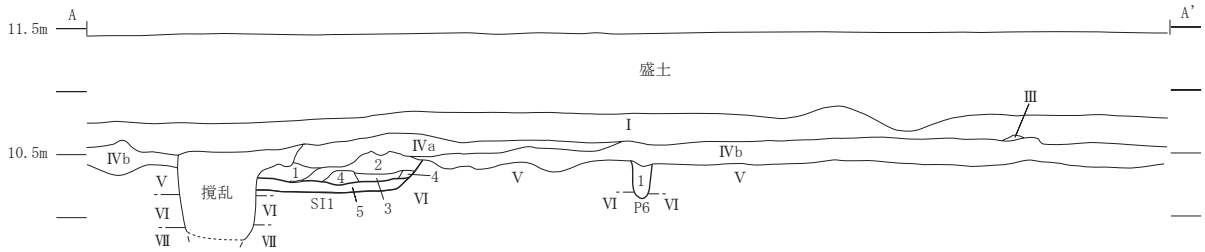
遺物は出土していない。

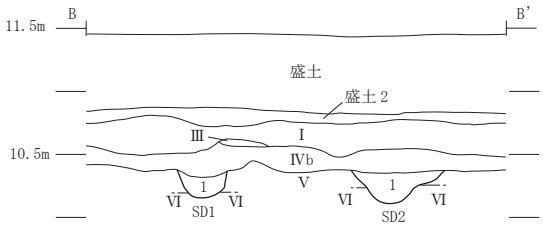
（３）ピット

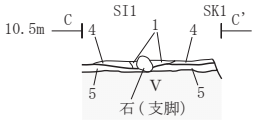
調査区南部で６基のピットを検出した。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。いずれも小規模で、柱痕跡が確認されたものはない。堆積土は単層で、炭化物や黄褐色の粘土質シルトを含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルトである。

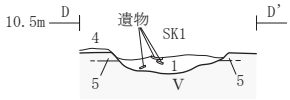
遺物は出土していない。

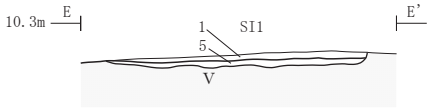












SI1

層位	色　調	土　質	備　考
1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒、小ブロックを少量含む（住居内堆積土）
2	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	炭化物、焼土ブロックを若干含む（カマド崩落土）
3	7.5YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物多、焼土ブロック若干含む（カマド内堆積土）
4	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	均質（カマドソデ）
5	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	住居掘方埋土

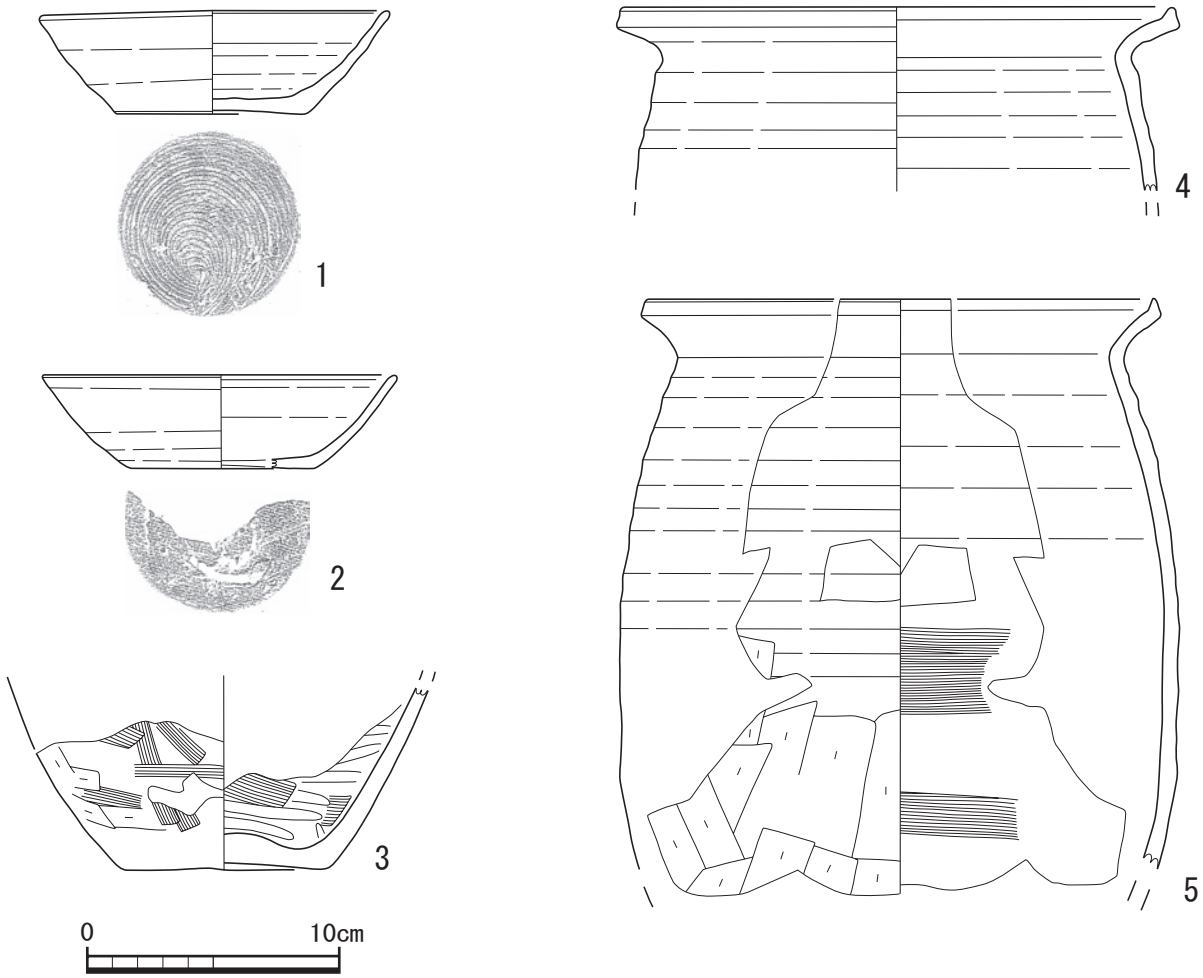
第 25 図　第 11 次調査区平面・断面図

５.まとめ

今回の調査地点は、六反田遺跡の北部に位置し、土地区画事業に伴い平成 18 年度に調査が実施された六反田遺跡３Ａ区に隣接している。今回の調査では、竪穴住居跡１軒、溝跡３条を検出した。

SI １竪穴住居跡は、後世の畠耕作の影響で全体を把握することはできなかったが、住居南辺は東西約３ｍで、比較的小規模である。調査では、カマドの一部および貯蔵穴を検出した。カマドは住居東辺に敷設され、燃焼部には被熱による赤変と河原石を用いた支脚が認められた。貯蔵穴はカマドの右側に位置し、比較的多量の土器類を主体とする遺物が出土している。出土遺物の特徴をみると、器種の欠落が著しいが、貯蔵穴出土遺物はロクロ土師器甕が主体を占める。須恵器坏は底部切り離しが回転糸切り無調整とヘラ切りがある。一方、還元不良の軟質な須恵器坏や赤焼土器の出土は認められない。さらに須恵器坏の器形の特徴も併せて検討すると、本竪穴住居跡の年代は、概ね９世紀代を中心とした平安時代に属するものと考えられる。

溝跡は、ＳＤ１～３溝跡の３条を検出した。規模と配置から、富沢駅周辺の調査で、その分布が広範囲に認められている畠耕作に関わる小溝状遺構と考えられ、方向から２時期（１群：ＳＤ１・２溝跡、２群：ＳＤ３溝跡）の



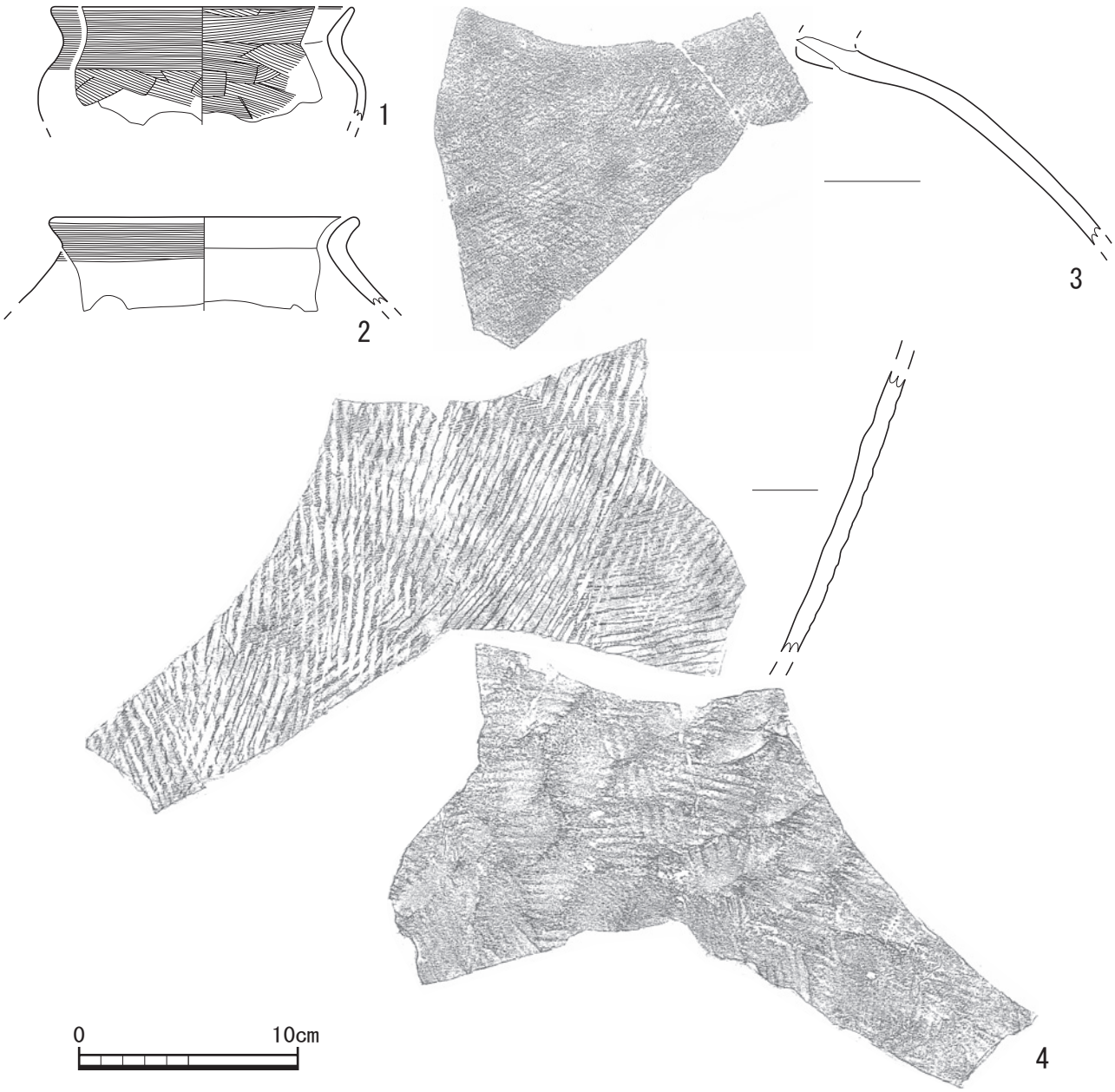
掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量（cm）			調整		備考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	9-1	E-3	SI- 1	SK-1	須恵器	坏	ほぼ完形	13.8	7.4	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整
2	9-2	E-4	SI- 1	SK-1	須恵器	坏	1/3	14	7.3	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ
3	9-5	C- 3	SI- 1	１層	土師器	甕	底部付近	7.2	—	—	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	非ロクロ
4	9-7	D-1	SI- 1	SK-1	土師器	長胴甕	上部	22	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	9-6	D-2	SI- 1	SK-1	土師器	長胴甕	1/4	(20)	—	—	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	
写真のみ	9-8	K-1	SI- 1	カマド	自然礫	支脚	完形	長 19.9	幅 9.7				上部変色

第 26 図　第 11 次調査出土遺物（1）

変遷が推定される。出土遺物が土師器およびロクロ土師器の小破片で、出土遺物から時期を推定する材料に乏しいが、９世紀代と考えられるSI１竪穴住居跡と基本層Ⅲ層の年代観から、10世紀初頭を下限とした平安時代にあたると推定される。

ピットは６基を検出した。いずれも小規模であり、柱痕跡が確認されたものはない。また、調査区の制約もあるが、掘立柱建物跡と考えられる配置となるものもない。

以上のことを周辺の調査成果を併せて検討すると、今回の対象地周辺では、分布は比較的希薄であるが、竪穴住居跡を主体とする集落が９世紀代の平安時代に存在し、10世紀初頭までに畠地に変遷したものと考えられる。また、居住域と生産域が同時期に混在していた可能性もある。



掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量（cm）			調整		備考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	9-3	C-1	SI-1	検出面	土師器	小型甕	上部1/5	(13.8)	—	—	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	非ロクロ
2	9-4	C-2	SI-1	検出面	土師器	小型甕	上部1/4	(14.2)	—	—	ヨコナデ、摩滅	摩滅	非ロクロ
3	9-9	E-1		検出面	須恵器	甕	体部片	—	—	—	平行タタキ	あて具痕	
4	9-10	E-2	SI-1	検出面	須恵器	甕	体部片	—	—	—	平行タタキ、一部ハケメ	あて具痕（木目）	

第27図　第11次調査出土遺物（2）

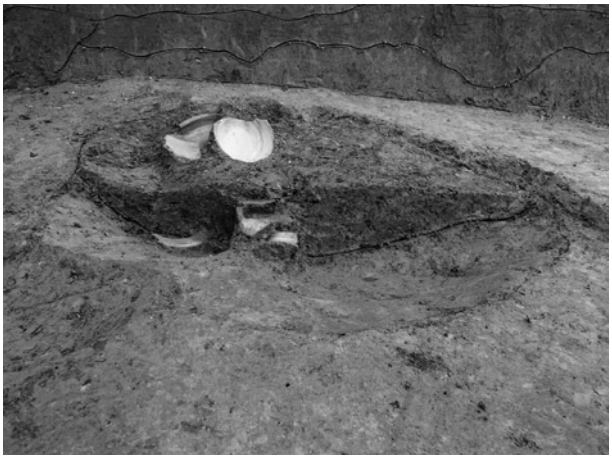
1.　調査区全景（南から）

2.　調査区南壁断面図（北から）

3.　SI1 竪穴住居跡（西から）

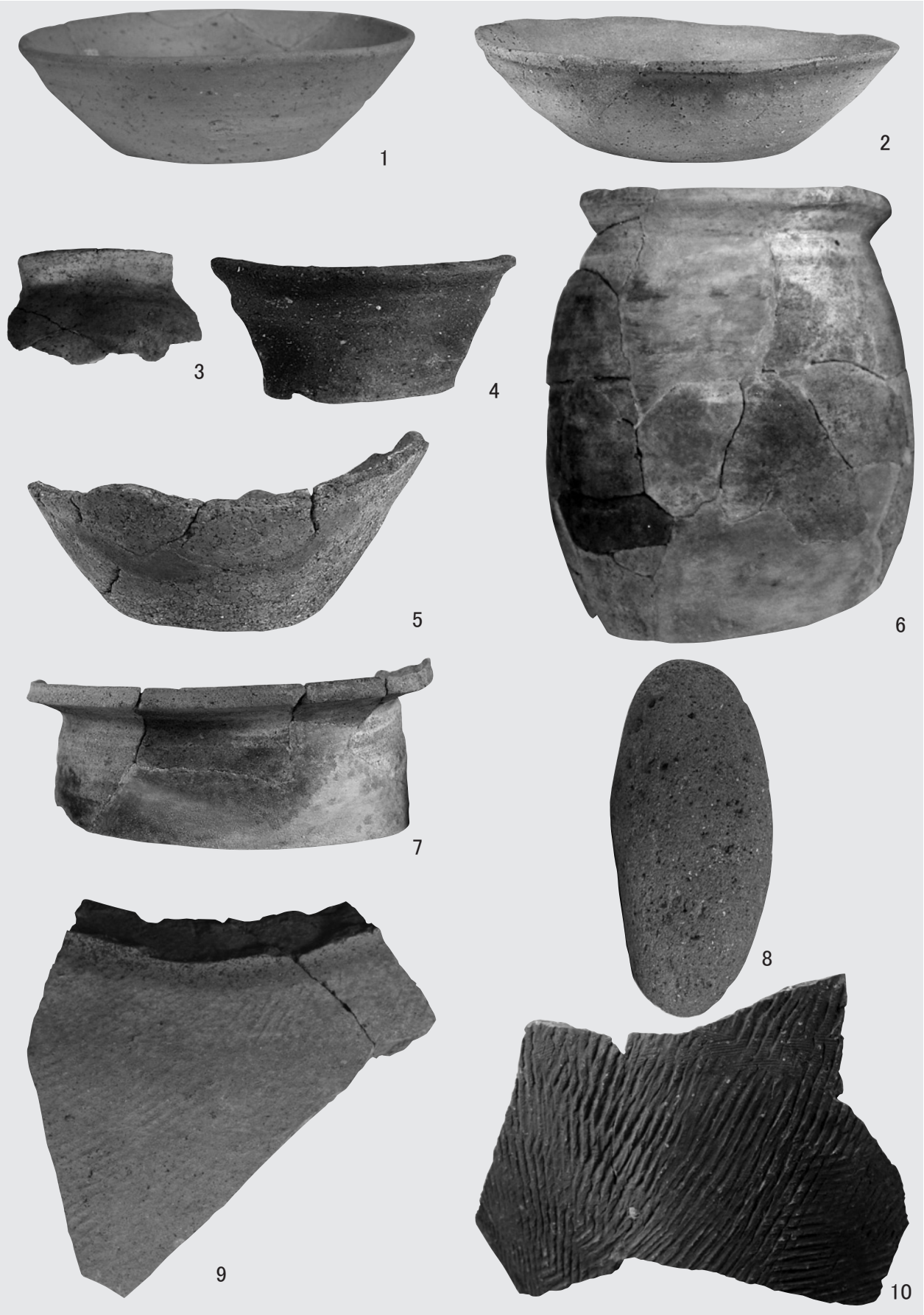
4.　SI1 竪穴住居跡カマド（西から）

5.　SI1 竪穴住居跡貯蔵穴検出（西から）



6.　SI1 竪穴住居跡貯蔵穴断面（西から）

写真図版８　第 11 次調査



写真図版９　第 11 次調査出土遺物

第 2 節　大野田古墳群

Ⅰ．遺跡の概要

大野田古墳群は、仙台市太白区大野田に所在し、地下鉄富沢駅の東側に位置している。遺跡は、名取川下流域左岸の自然堤防上の微高地に立地し、その範囲は東西約 600m，南北約 400m におよび、標高は 10 ～ 12 mである。大野田古墳群は、個人住宅建築、共同住宅建築工事、市関連施設建築工事に伴う調査のほか、平成 6 年度以降は「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査が行われ、その後も個人住宅建築に伴う発掘調査などが断続的に行われている。

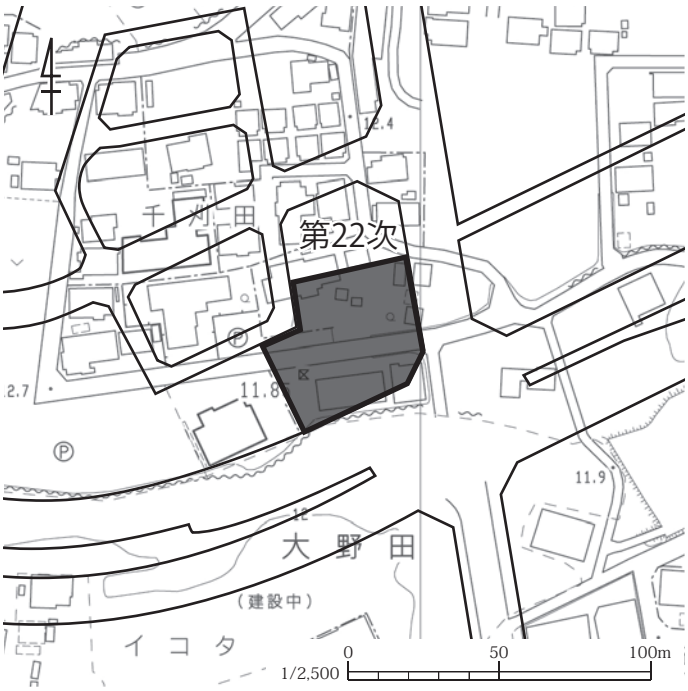
古墳群は当遺跡だけではなく、北側の六反田遺跡と東側の王ノ壇遺跡にかけて分布している。これまでに確認されている古墳は、春日社古墳、五反田古墳、王ノ壇古墳、鳥居塚古墳、1 号～ 40 号墳の計 44 基で、このうち鳥居塚古墳のみが前方後円墳、その他は円墳である。また、この他に墳丘を伴わないと考えられる石棺墓 1 基と木棺墓 5 基が確認されている。平成 22 年に調査された六反田遺跡 7F-1 区の木棺墓は比較的良好な遺存状態であり、棺内から人骨・銅鏡・管玉・ガラス玉、墓壙の掘り方壁面の掘り込みからは土師器壺と坏が埋納された状態で発見されている。

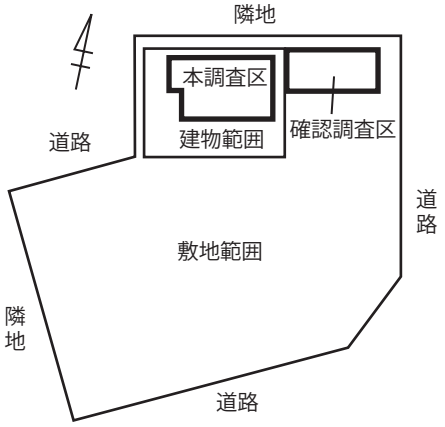
古墳の他は、前期、中期の竪穴住居跡が確認されているが数は少ない。奈良時代になると当遺跡と北側に隣接する六反田遺跡、袋前遺跡に重複して大野田官衙遺跡が造られる。平安時代以降は小規模な集落も認められるが、大部分は畠として利用されている。

Ⅱ．第 22 次調査

1. 調査要項

遺　跡　名　　大野田古墳群（宮城県遺跡登録番号 01361）
調 査 地 点　　仙台市太白区大野田字千刈田 60 ブロック 10 ロット
調 査 期 間　　平成 26 年 5 月 8 日～ 5 月 12 日 (確認調査)、 平成 26 年 6 月 11 日～ 6 月 26 日 (本調査)
調査対象面積　　343.10㎡





第 28 図　第 22 次調査区位置図（1/2,500）・配置図（1/1,000）

調 査 面 積　　105.27㎡
調 査 原 因　　賃貸施設新築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主事　小泉　博明　　文化財教諭　千葉　悟　　早坂　純一　　小山　紘明

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 26 年 3 月 28 日付で申請者より、「埋蔵文化財の取扱いについて (協議)」平成 26 年 4 月 4 日付 H26 教生文第 108-1 号で回答）に基づき実施した。対象地は、大野田古墳群の西部にあたる。確認調査は平成 26 年 5 月 8 日に着手した。申請者側が表示した建築範囲内に調査区を設定し、重機を用いて、盛土と耕作土である基本層Ⅰ層などを掘削して、基本層Ⅴ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、32 号墳の西端と新たな古墳を検出した。現地で今後についての協議を行い、本発掘調査を 6 月 11 日より開始した。調査では、必要に応じて、平面図および断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真の撮影を行った。調査は、6 月 26 日に調査区を埋め戻して終了した。

3. 基本層序

調査区内の盛土厚は約 0.30 ～ 0.60 m で、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴うものである。その直下に基本層を 6 層確認した。当該調査区の周辺では、平成 6 年度以降、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査などが断続的に行われており、これらの調査では、共通した基本層序が用いられている。今回の調査でも、これまでの調査成果に基づいて、基本層の分層を行っている。

Ⅰ層：調査区全域に分布する。区画整理事業に伴う盛土以前の畑地耕作土で、3 層に細分される。

Ⅱ層：黒褐色（10YR2/2）を呈する粘土質シルトで、基本層Ⅲ層を粒状に含む。41 号墳周溝内とその外側に分布し、41 号墳墳丘上では認められない。層厚は 41 号墳の外側では最大で 0.10m ほどではあるが、41 号周溝墳内では、0.20m 以上で厚く堆積している。

Ⅲ層：黄褐色（2.5YR5/3）を呈するシルトでわずかに灰白色火山灰を含む。41 号墳周溝内で最も厚く、最大で 0.25m ほどである。

Ⅳ層：黒褐色（10YR3/2）および暗褐色（10YR3/3）を呈する粘土質シルトで、基本層Ⅴ層を斑状に含む。41 号墳周溝内とその外側に分布し、41 号墳墳丘上では認められない。層厚は 0.10m ほどであるが、41 号墳周溝内では 0.40m 以上である。

Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する砂質シルトで、調査区全域に分布する。今回の調査における遺構検出面である。
2 層に細分される。

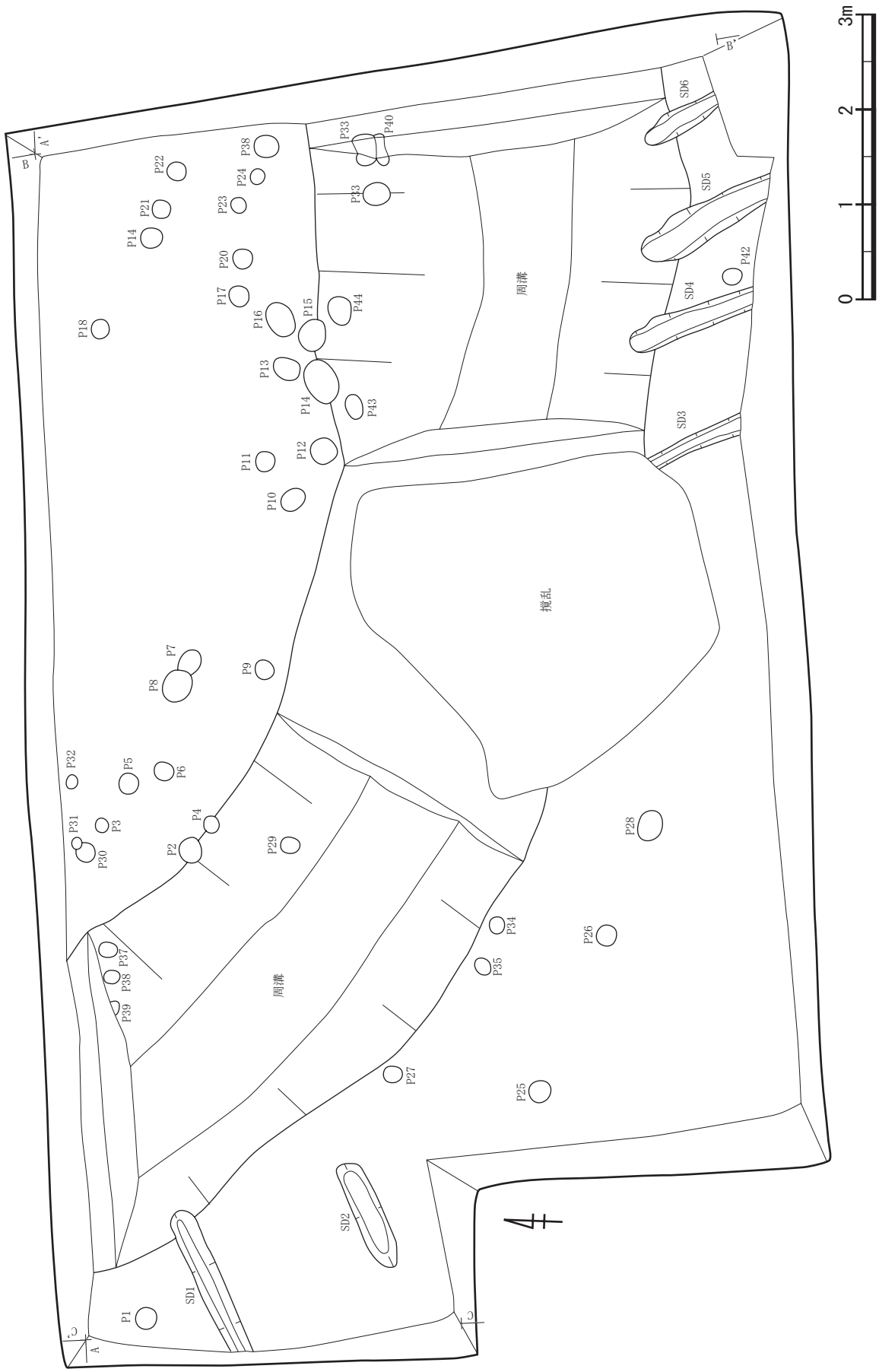
Ⅵ層：調査区西部にあたる 41 号墳周溝底面で確認したやや小ぶりな礫とⅤ層土の混合層である。

4. 発見遺構と出土遺物

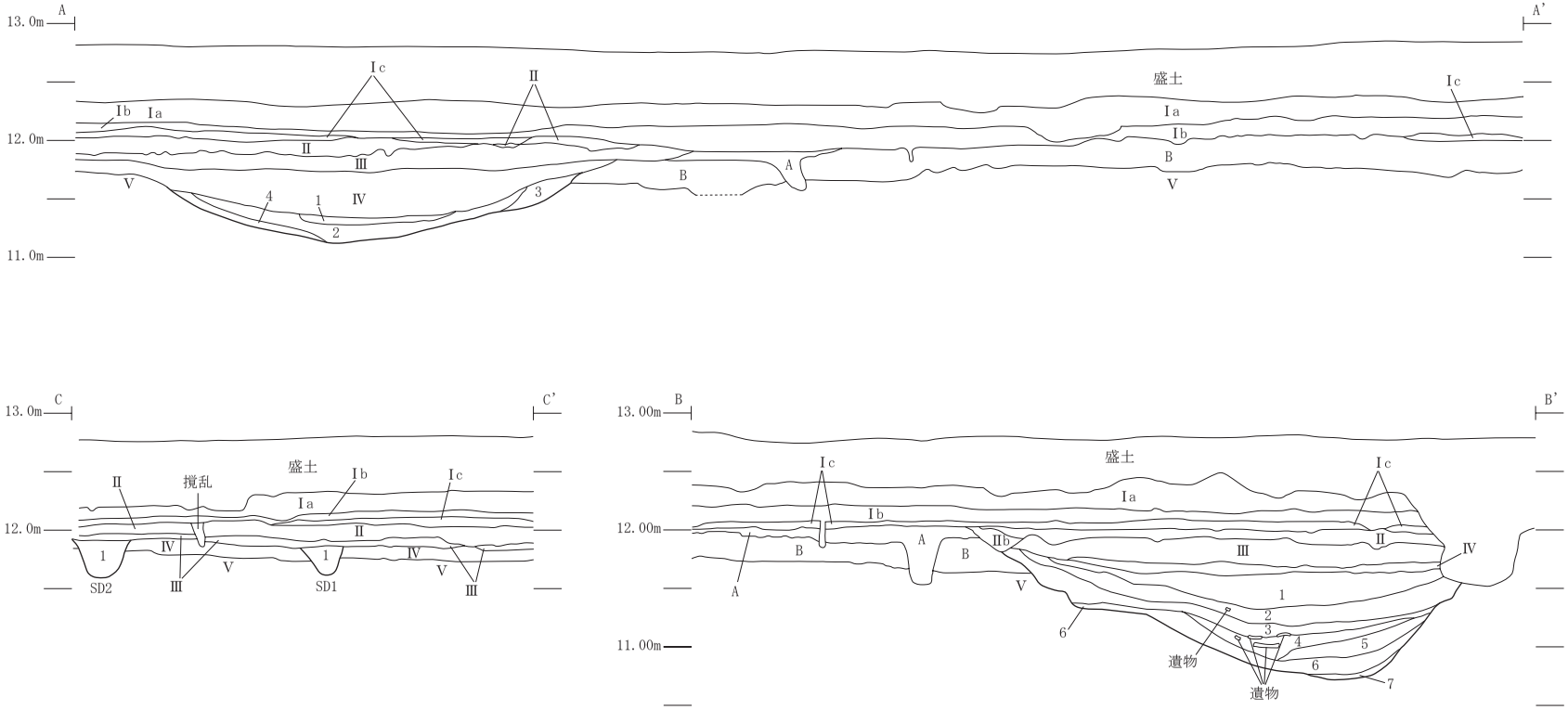
今回の調査では、Ⅴ層上面で 41 号墳、小溝状遺構 6 条、ピット 44 基を検出した。遺物は、41 号墳周溝堆積土から埴輪が、基本層及びピット堆積土から土師器が出土している。

（1）41 号墳

今回の調査では古墳南西部を検出した。周溝の一部が撹乱によって壊されている。周溝の外縁径が約 22m の円



第 29 図　第 22 次調査区平面図



第30図　第22次調査区断面図

周溝（北壁）

層位	色　調	土　質	備　考
1	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	5層土、炭化物を粒上にごく少量含む
2	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	5層土をブロック状、粒状に若干含む
3	10ＹＲ3/4暗褐色	粘土質シルト	5層土をブロック状にやや多く含む
4	10ＹＲ3/3暗褐色	粘土質シルト	5層土をブロック状に多く含む

周溝（東壁）

1	10ＹＲ3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状に少量含む
2	10ＹＲ3/2黒褐色	粘土質シルト	炭化物・5層土を粒状にごく少量含む
3	10ＹＲ3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土・5層土を粒状にごく少量含む
4	10ＹＲ3/4暗褐色	粘土質シルト	炭化物・5層土を粒状にごく少量含む　遺物含む
5	10ＹＲ4/2灰黄褐色	粘土質シルト	5層土をブロック状にやや多く含む　炭化物を粒状にごく少量含む
6	10ＹＲ3/3暗褐色	粘土質シルト	5層土をブロック状に若干含む
7	10ＹＲ3/4暗褐色	粘土質シルト	5層土をブロック状に少量含む

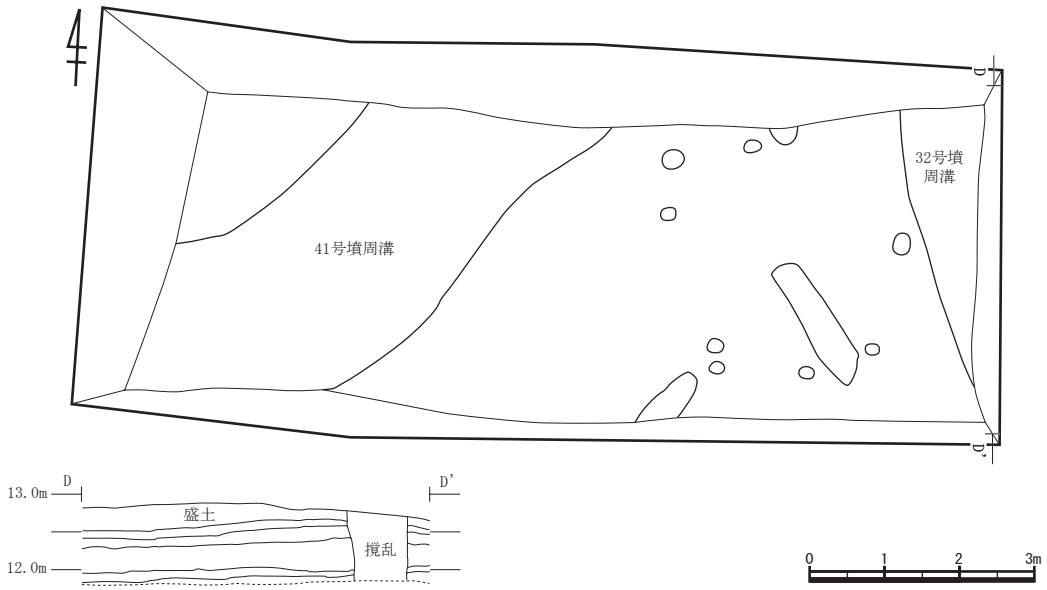
A	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
B	10YR4/2黒褐色	粘土質シルト	Ｖ層土を斑状に含む

墳であると推測される。墳丘は、後世の水田耕作によって上部を失っているが、墳丘積土もしくは古墳構築以前の旧表土と考えられる堆積層２層を確認した（第 30 図 A・B)。図中の A 層は 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトで、炭化物粒を少量含んでいる。B 層は 10YR4/2 にぶい黄褐色粘土質シルトで基本層Ⅴ層の小ブロックを少量含んでいる。周溝の上端幅は 2.9 ～ 3.8m、検出面から底面までの深さは西部で約 50cm、東部で約 80cm である。断面形は大きく開く皿状を呈しているが、墳丘側の立ち上がりは緩やかで、外側の立ち上がりの傾斜がやや急である。堆積土は 6 層に細分される自然堆積層で、上部には基本層Ⅱ層～Ⅳ層が堆積している。周溝からは多くの円筒埴輪が出土し、2 地点でまとまって出土した。

図化できたのは円筒埴輪 1 点（第 32 図 1)、円筒埴輪と推定される破片 7 点（第 32 図 2・3、第 33 図 1 ～ 3、第 34 図 3･4)、朝顔形埴輪 1 点（第 35 図)、朝顔形埴輪と推定される破片 2 点（第 34 図 1･2）と土師器高坏 1 点（第 33 図 4）である。全体形が判別できるのは円筒埴輪 1 点（第 32 図 1）のみである。凸帯は 2 条で、断面は台形を呈する。器形はやや内湾しながら開き、口縁部はわずかに外反する。スカシ孔は円形で 2 段目の上部の凸帯に接した位置にある。調整技法は、外面が 1 次調整タテハケのみ、内面が縦方向のナデである。底部には棒状の圧痕が認められた。なお、他の埴輪片の調整技法は第 32 図 1 と同じであるが、凸帯が認められたもののうち、凸帯の端面がわずかに窪むものも認められる（第 33 図 2、第 34 図 4)。なお、朝顔形埴輪は全体形は不明であるが、調整技法は円筒埴輪と共通する。

（２）小溝状遺構

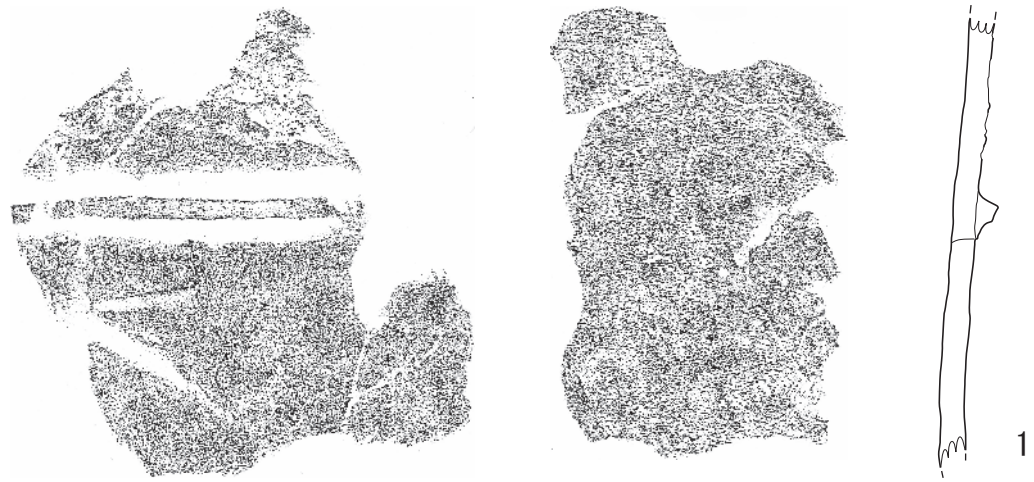
6 条を検出した。方向から 2 群に大別される。東西方向に延びるものが 1 群、南北方向に延びるものが 1 群ずつである。いずれも 41 号墳と重複し、これより新しい。検出長の規模は上端の幅 30cm ～ 40cm 前後、深さ 15 ～ 30cm 程度である。堆積土は基本層Ⅴ層を含む暗褐色の粘土質シルトである。遺物の出土はなく、時期の特定にはいたらないが、周辺の調査の結果から古墳時代後期～奈良・平安時代の畠の耕作に関わる遺構と考えられる。

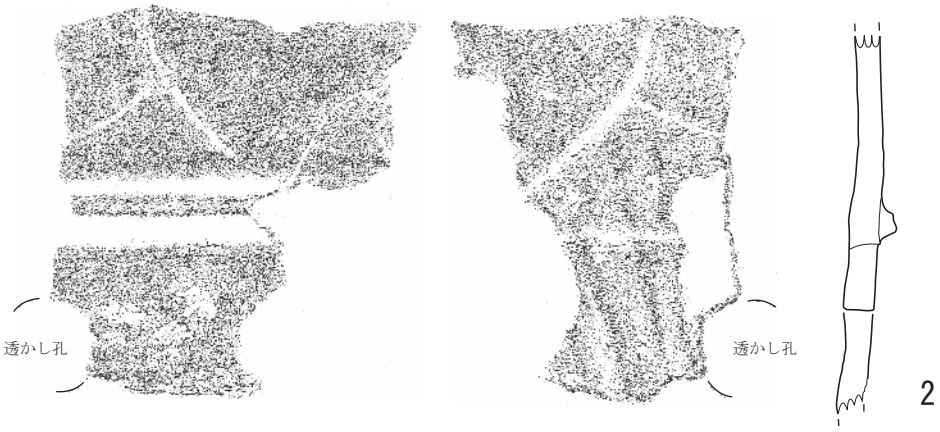


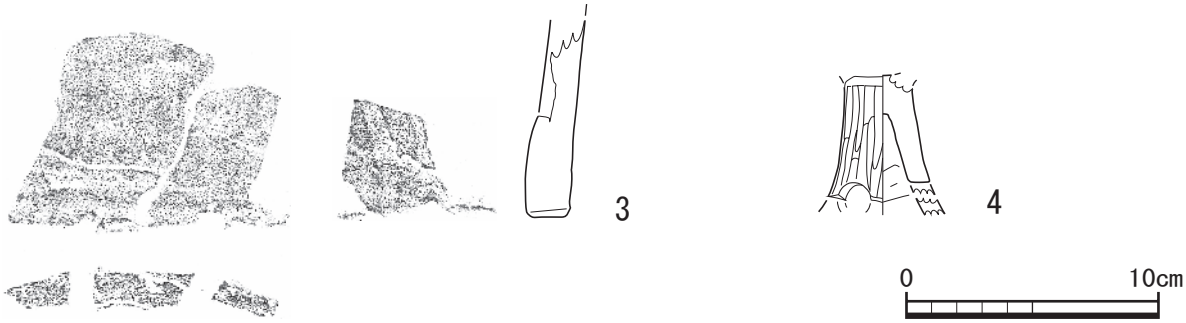
第 31 図　確認調査区平面・断面図

掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			調　整		備　考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	11-1	S-2	41号墳	周溝	埴輪	円筒	2/3	(28.3)	18.2	49.0	タテハケ、凸帯ヨコナデ	ナデ(指)	円形透かし孔、底部棒状圧痕
2	11-2	S-4	41号墳	検出面	埴輪	円筒？	円筒部片	—	—	—	タテハケ、凸帯ヨコナデ	ナデ(指)	3と同一個体か
3	11-3	S-3	41号墳	検出面	埴輪	円筒？	下段	—	16.8	—	タテハケ、凸帯ヨコナデ	ナデ(指)	

第 32 図　第 22 次調査出土遺物（1）







掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			調整		備考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	11-4	S-5	41号墳	周溝	埴輪	円筒？	円筒部片	—	—	—	タテハケ、凸帯ヨコナデ、沈線（指描き）	ナデ（指）	
2	11-5	S-6	41号墳	周溝	埴輪	円筒？	中段	—	—	—	タテハケ、凸帯ヨコナデ	ナデ（指）	円形透かし孔
3	11-6	S-7	41号墳	周溝	埴輪	円筒？	下段	—	—	—	タテハケ	ナデ（指）、底部付近横位ナデ	底部棒状圧痕
4	12-1	C-1	41号墳	周溝	土師器	高坏	脚部片	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラケズリ	円形透かし孔

第 33 図　第 22 次調査出土遺物（2）

（３）ピット

44 基を検出した。建物跡を示すような有意な配置状況は確認できなった。

5. まとめ

今回の調査では、古墳が新たに１基確認され、41 号墳とした。大野田古墳群の古墳の総数は 45 基となった。41 号墳は周溝の外縁径が約 22 ｍの円墳とみられ、大野田古墳群の古墳の中でも比較的規模の大きな古墳である。墳丘部分には、古墳構築土、もしくはそれ以前の旧表土が残存している。

出土した埴輪は調整技法が同じで、外面が１次調整タテハケのみ、内面が縦方向のナデである。凸帯の形状もほぼ同じものが多く、藤沢氏の編年案による 2a 段階に含まれると考えられる。

参考文献

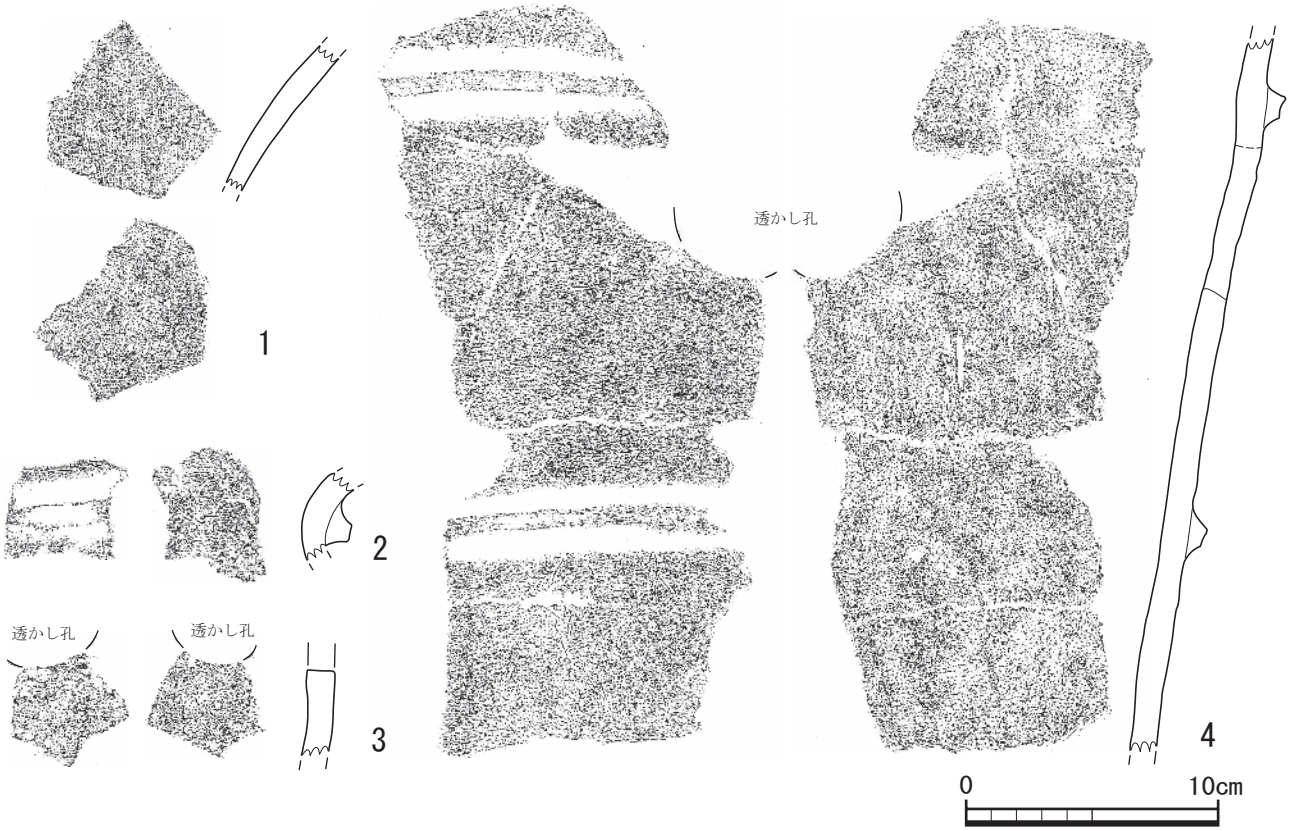
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号

仙台市教育委員会 1987『大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 108 集

藤沢敦 1992「円筒埴輪　東北」『古墳時代の研究９　古墳Ⅲ　埴輪』雄山閣

仙台市教育委員会 2000『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』―仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ―　仙台市文化財調査報告書第 243 集

仙台市教育委員会 2011「六反田遺跡 7F-1 区の調査」『郡山遺跡 31』仙台市文化財調査報告書第 394 集



掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			調整		備考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	12-2	S-8	―	Ⅱ～Ⅳ層	埴輪	朝顔形？	口縁部片	―	―	―	タテハケ	ヨコハケ	
2	12-3	S-9	―	Ⅱ～Ⅳ層	埴輪	朝顔形？	頸部片	―	―	―	凸帯ヨコナデ	ナデ？	
3	12-4	S-10	―	Ⅱ～Ⅳ層	埴輪	円筒？	円筒部片	―	―	―	タテハケ	ナデ（指）	円形透かし孔
4	12-5	S-11	―	Ⅲ～Ⅳ層	埴輪	円筒？	円筒部片	―	―	―	タテハケ、凸帯ヨコナデ	ナデ（指）	円形透かし孔

第 34 図　第 22 次調査出土遺物（3）

掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			調　整		備　考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	12-6	S-1	41 号墳	周溝	埴輪	朝顔形	円筒部欠	推定 43.0	—	—	タテハケ、凸帯ヨコナデ	ヘラナデ	

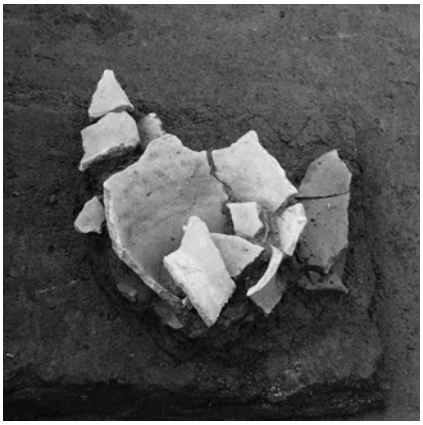
第 35 図　第 22 次調査出土遺物（4）

1.　第 22 次調査完掘状況（北西から）

2.　調査区東壁断面図（南西から）

3.　調査区北壁断面図（南から）

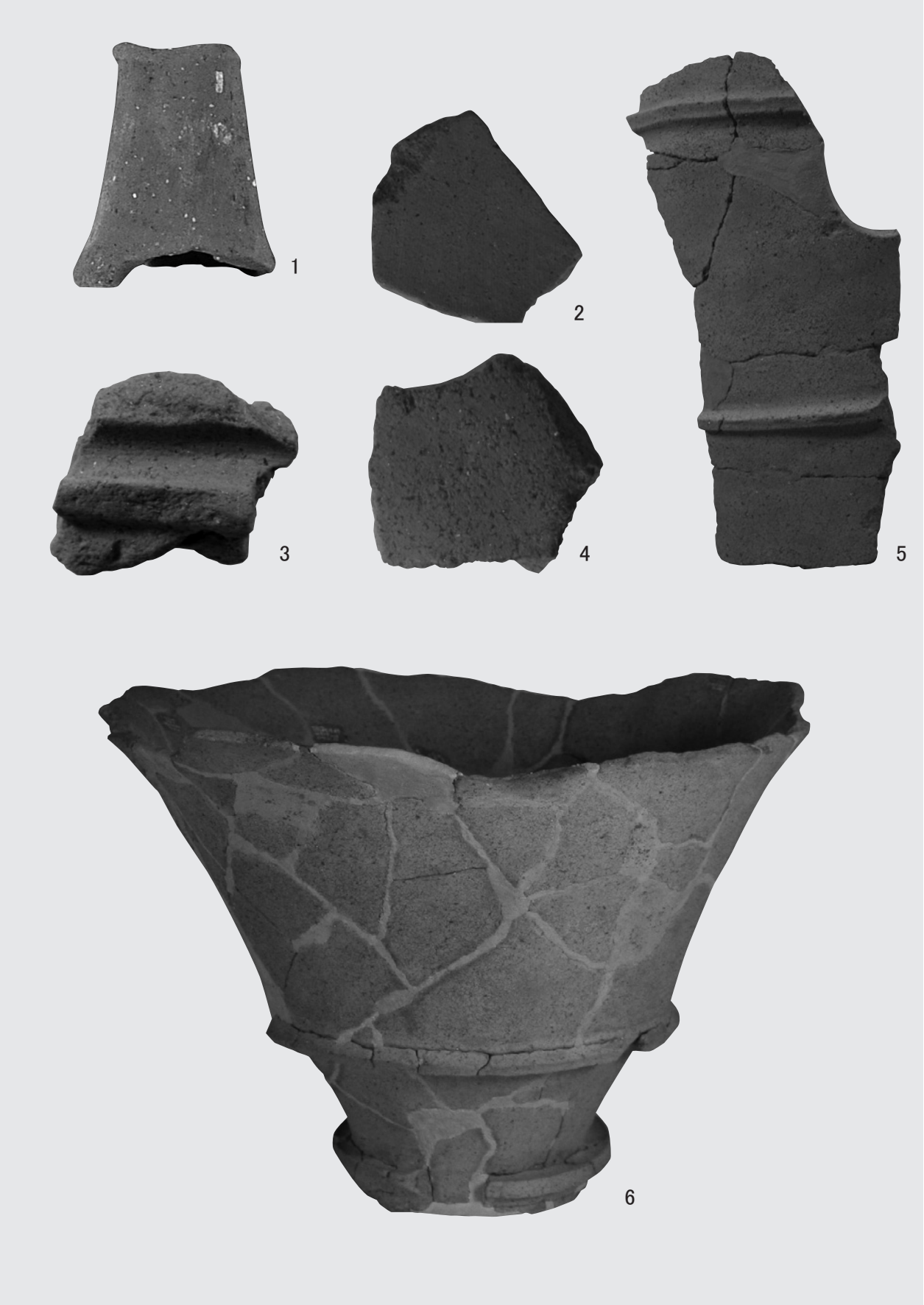
4.　41 号墳周溝東半部（南東から）



5.　埴輪 No2 出土状況（北から）

写真図版 10　第 22 次調査

写真図版 11　第 22 次調査出土遺物（1）



写真図版 12　第 22 次調査出土遺物（2）

第３節　辻遺跡

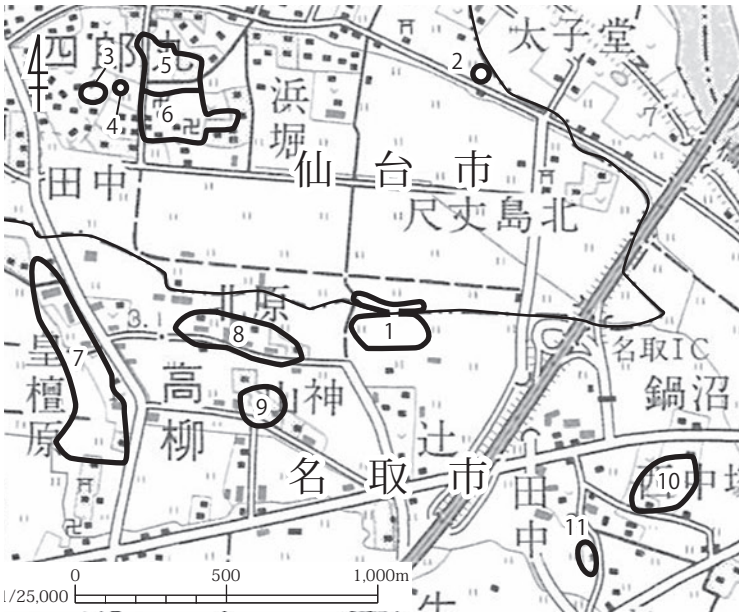
Ⅰ．遺跡の概要

辻遺跡は、名取市高柳字辻および仙台市太白区四郎丸字昭和南に所在する。ＪＲ名取駅の北東約 3.8km に位置し、名取川右岸の自然堤防および後背湿地に立地する。辻遺跡は、元来名取市の遺跡であったが、今回、仙台市側の遺跡隣接地において試掘調査を実施し、古墳時代から古代の水田跡や遺物が確認されたことから、遺跡範囲を仙台市側へ拡大することとなった。なお、今回の調査は、仙台市側における第１次調査として実施した。

Ⅱ．第１次調査

1. 調査要項

遺　跡　名　　辻遺跡（宮城県遺跡登録番号 12116）
調 査 地 点　　仙台市太白区四郎丸地内外
調 査 期 間　　平成 26 年 5 月 22 日（木）～ 6 月 4 日（水）
調査対象面積　　4.26ha
調 査 面 積　　106㎡
調 査 原 因　　基盤総合整備事業
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主任　鈴木隆、
主事　小林航、
同　小泉博明、
文化財教諭　早坂純一
同　小山紘明



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	辻遺跡	散布地	自然堤防	古代
2	芳塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
3	神明遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
4	弁天囲古墳	古墳	自然堤防	古墳
5	戸ノ内遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然堤防	古墳・奈良・平安
6	四郎丸館跡	方形周溝墓・集落跡・城館跡	自然堤防	古墳・平安・中世
7	皇壇ヶ原遺跡	散布地	自然堤防	古代
8	中北田遺跡	散布地	自然堤防	古代
9	北原上屋敷跡	屋敷跡	自然堤防	近世
10	寺田遺跡	散布地	自然堤防	中世
11	龍泉寺跡	寺院跡	自然堤防	中世

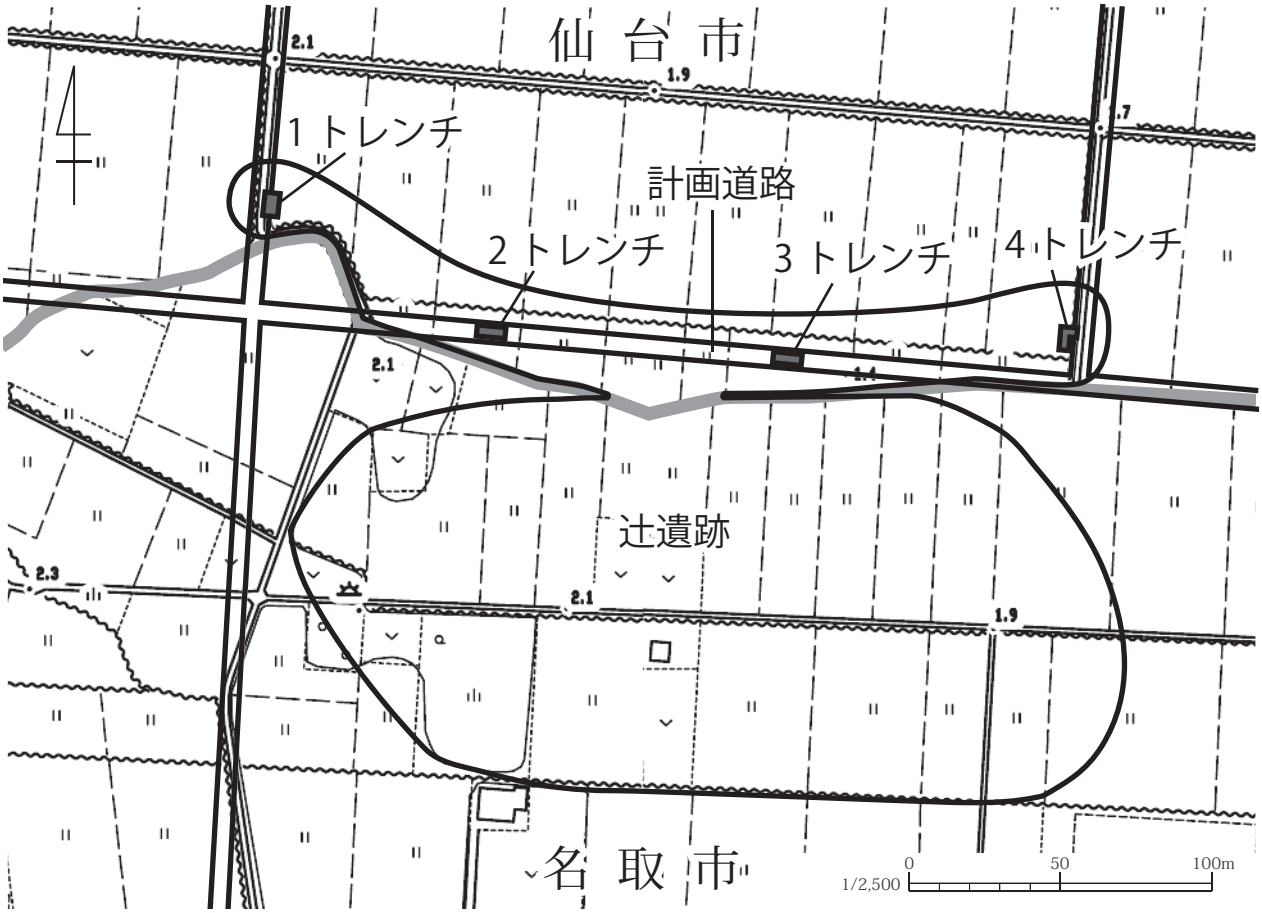
第 36 図　辻遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より提出された「農山漁村地域復興基盤総合整備事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」（平成 26 年 3 月 4 日付 H25 教生文第 253-30 号で伝達）に基づき実施した。

調査は、名取市に所在する辻遺跡の隣接地における試掘調査として実施し、平成 26 年 5 月 22 日に着手した。調査区は、基盤整備に伴う道路拡幅および新設の範囲内に 80 ～ 90 m間隔で 4 箇所設定し、西から順に 1 ～ 4 トレンチの調査区番号を付した。調査地点の状況から、1・4 トレンチの調査範囲について協議の必要が生じたため、調査は 2 トレンチから開始した。2 トレンチの調査終了後 3 トレンチの調査を行い、その後 1 トレンチと 4 トレンチの調査を同時並行して行った。

1 トレンチは 18㎡のＬ字型の調査区を設定し、5 月 28 日に調査を開始した。2 層まで重機掘削した後に、人力で掘下げ、10 層上面で遺構検出作業を行った。擬似畦畔Ｂを検出したため、調査区南西部を 5m × 2m 拡張して南北 7m ×東西 4m の長方形に変更し、記録保存を目的とした本調査に移行した。



第 37 図　第１次調査区配置図

２トレンチは５月 22 日に調査を開始した。規模は南北 3m ×東西 10m である。２層まで重機掘削し、人力で排水兼土層確認用の側溝を掘削した後、３層上面で遺構検出作業を行った。その後更に６層まで重機掘削し、７層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。２トレンチでは調査区南西角で深堀りを行った。３トレンチは２トレンチの東約 80m に、南北 3m ×東西 10m の規模で設定し、５月 26 日に調査を開始した。重機で２層まで掘削後、２トレンチ同様に側溝を掘削し、３層上面で遺構検出作業を行った。調査区断面で遺構と思われる箇所が認められたため、重機で更に６層まで掘り下げ７層上面で遺構検出作業を行い、擬似畦畔を検出した。４トレンチは 18㎡のＬ字型の調査区を設定し､1 トレンチと同じ５月 28 日に調査を開始した。２層まで重機掘削し、側溝を掘削した後に３層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

今回の調査では、平面図（S=1/40）、調査区壁面断面図（S=1/20）を作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査区は調査が終了したものから適宜埋戻しを行った。2 トレンチを５月 26 日､4 トレンチを５月 29 日、1・3 トレンチを６月４日に埋め戻し、一切の調査を終了した。

3. 基本層序

現代耕作土である１～２層より下層においては、１トレンチと２～４トレンチで様相が異なり、厳密な対応が不明確であるため、基本層の記述はそれぞれ分けて行う。

（1）１トレンチ

２～ 11 層を確認した。１層は確認されなかったため２層以下の特徴について記述する。１トレンチでは、特に基本層７・８層で、他トレンチにはない土層の著しい撹拌が認められた。土層下面の凹凸や層相が通常の耕作土とは全く異なることから、撹拌は人為的なものではなく地震等の自然的要因が関係したものとみられる。7･8 層は、9･

10 層が撹拌を受け変質したものと考えられる。撹拌が生じた時期は、10 層耕作土が廃絶し 9 層（自然堆積層）が堆積した段階である。10 層からの遺物の出土はなく、8 層から古墳時代前期の土師器、5 層から古墳時代中期の土師器が出土している。古墳時代前期から中期の時期と推定される。

２層：現代耕作土。

３層：10 ＹＲ 3/2 黒褐色粘質シルト。耕作土。調査区北西側に 8~14㎜程度の層厚で分布。十和田起源の灰白色火山灰とみられる白色土をブロック状に含む。同じく白色土を含む 2~4 トレンチの 6 層と土質は異なるが、おおむね同時期の層と推測される。

４層：10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。

５層：10 ＹＲ 4/2 灰黄褐色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。東壁では 10 層直上の耕作土となる。非ロクロ土師器片が出土。

６層：10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘質シルト。耕作土。調査区西壁でのみ確認。下部に酸化鉄の堆積あり。

７層：10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘土。撹拌土。擬似畦畔の南北両脇で確認。11 層土（地山土）をブロック状に少量含む。9・10 層土が撹拌されたもの。部分的に 9 層土由来とみられるラミナ状の土層を含む。

８層：11 層土に 10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘土を一部ラミナ状またはブロック状に含む。　撹拌土。調査区西壁と東壁南部で確認された。9・10 層土が撹拌されたもの。非ロクロ土師器が出土。

９層：11 層土と 10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘土のラミナ。自然堆積土。西壁南側から南壁のごく一部でのみ確認。10 層耕作土の廃絶後に堆積。9 層堆積時に撹拌が生じたものとみられる。

10層：10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘土。耕作土。畦畔（擬似畦畔）を伴う。11 層土をブロック状に少量含む。西壁の擬似畦畔北側では、11 層の内側に一部深く入り込んでいるが、撹拌を受けた結果と考えられる。

11層：2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト。洪水堆積土か。擬似畦畔周辺では暗黄褐色、それ以外の箇所ではグライ化し暗青緑色を呈する。

（２）２～４トレンチ

１～ 15 層を確認した。10 層以下については 2 トレンチ深堀区でのみ確認した。

１・2 層：現代耕作土。

３層：10 ＹＲ 4/1 褐灰色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。

４層：10 ＹＲ 3/2 黒褐色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。

５層：10 ＹＲ 4/1 褐灰色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。6 層との境界は漸移的。

６層：10 ＹＲ 4/1 褐灰色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。灰白色火山灰をブロック状に含む。1 トレンチ３層と同時期か。

７層：10 ＹＲ 3/2 黒褐色粘質シルト。耕作土。調査区全体に分布。3 トレンチでは擬似畦畔（8 層）を確認。

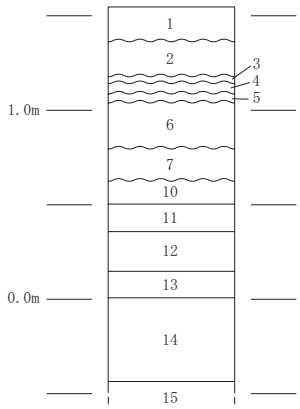
８層：10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘質シルト。耕作土。3 トレンチでのみ、7 層水田跡に伴う擬似畦畔として一部確認。作土部分は 7 層の耕作時に消失。

９層：10 ＹＲ 3/2 黒褐色砂質シルト。3 トレンチでのみ確認。トレンチ東側では、より砂質が強い。

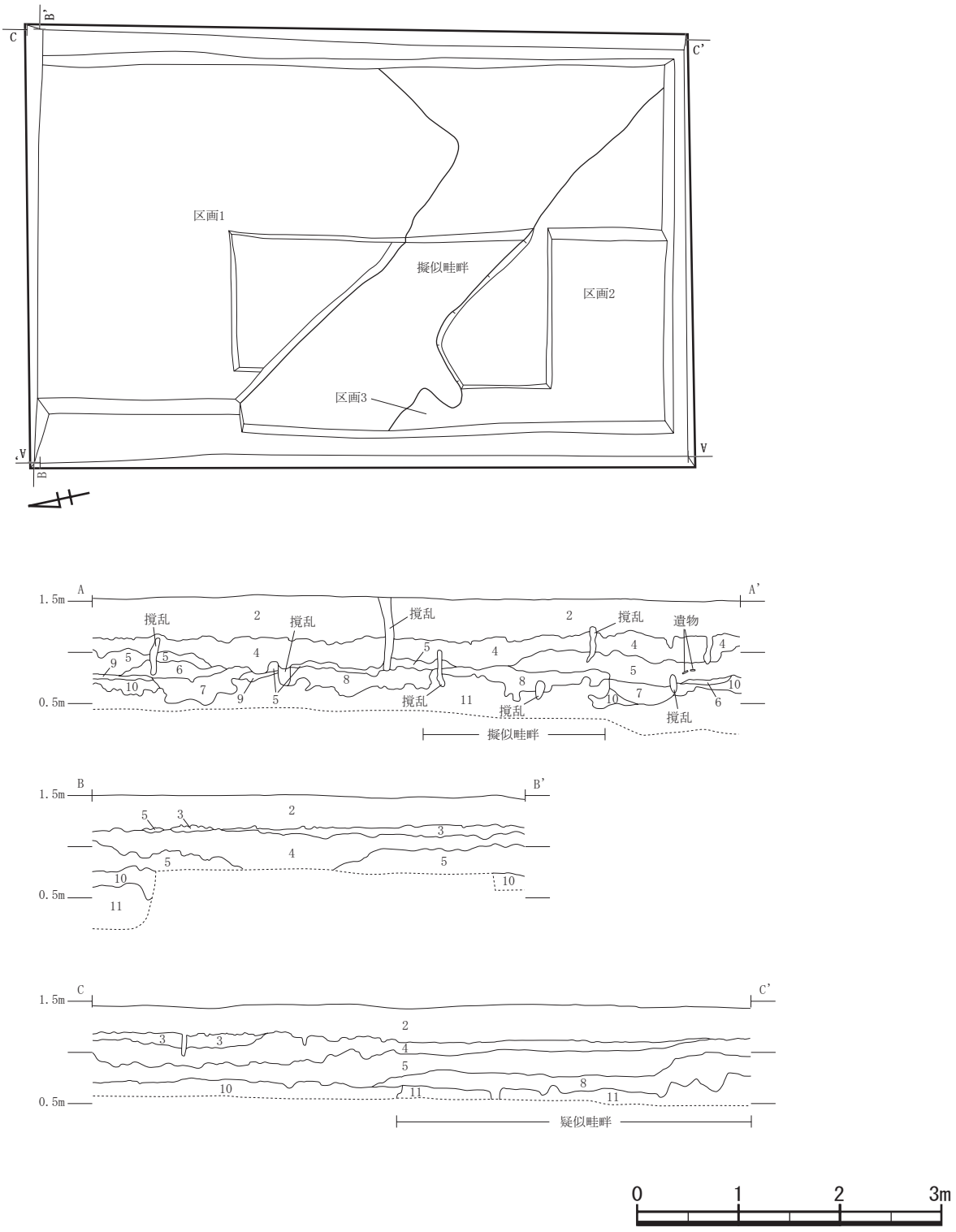
10層：10 ＹＲ 4/1 褐灰色粘質シルト。以下 15 層までは 2 トレンチ深堀区で確認。

11層：10 ＹＲ 3/1 黒褐色粘質シルト。自然堆積土。

12層：10 ＹＲ 4/2 灰黄褐色シルト質砂。洪水堆積土か。1 トレンチの 11 層に対応。



第 38 図　２トレンチ基本層柱状図



第 39 図　1 トレンチ平面・断面図

13層：10 Ｙ Ｒ 5/2 灰黄褐色シルト質粘土。自然堆積土。

14層：2.5 Ｙ 5/1 黄灰色シルト質粘土。自然堆積土。

15層：10 Ｙ Ｒ 2/2 黒褐色シルト質粘土。スクモを含む泥炭層。

（３）各調査区の標高と地形

今回の調査対象地は、自然堤防から後背湿地へ地形が変換する境界付近に位置している。主に名取市側の自然堤防上に位置する辻遺跡中心部の標高は約 2.0 mで、地形的には自然堤防からその北側に拡がる後背湿地へ向け緩やかに傾斜している。

現地表面での標高は、調査対象地の西端に位置する１トレンチが 1.4 ～ 1.5 mと最も高く、東端の４トレンチが 1.1 ～ 1.2 mと最も低い。十和田起源とみられる灰白色火山灰（10 世紀前葉）を含む地層間の標高比較においても、１トレンチと４トレンチで同程度の標高差が認められるが、１トレンチと４トレンチ間の距離 270 mに対し、標高差は約 30㎝である。対象地における斜度は 0.06° と極めて緩やかで、東西方向ではほぼ平坦な地形であったといえる。次に、洪水堆積土とみられる砂質土上面の標高を比較すると、1 トレンチ（11 層）が 0.6 ～ 0.8 m、2 トレンチ（12 層）が 0.5 mで、調査深度の関係から 3･4 トレンチでは対応する土層を確認していないが、それぞれ標高 0.5 m以下、0.0 m以下の深度に位置するものとみられる。このことから、より標高の高い１トレンチは、自然堤防の縁もしくは自然堤防に比較的近い箇所に位置し、3･4 トレンチは自然堤防からやや離れた後背湿地の中に位置すると考えられる。

4. 発見遺構と出土遺物

１・３トレンチで擬似畦畔を伴う水田跡を検出した。遺物は、１トレンチから古墳時代前・中期を主体とする土師器 68 点、敲石２点、３トレンチから主に灰白色火山灰層より上位で土師器・須恵器 12 点が出土した。

（１）１トレンチ

10 層水田跡

ⅰ検出・遺存状況

10 層上面での遺構検出作業中、北西－南東方向の擬似畦畔と、それに伴う水田３区画を検出した。擬似畦畔のみで畦畔はなく、上面は４～６層により削平され失われたとみられる。

ⅱ畦畔

北西から南西方向に延びる擬似畦畔 B を検出した。擬似畦畔はトレンチ南東部で北東方向に 90 度折れる。擬似畦畔は 11 層土で構成されており、上面は上位層により削平されている。平面的な規模は、上端幅 0.8m ～ 1.2m、下端幅 0.92m ～ 1.28m である。高さは、区画１で 0.14m、区画２で 0.12m である。その規模から比較的大きな区画を構成する畦畔の擬似畦畔と考えられる。

また、トレンチ南西部では、壁際で切れる小畦畔の擬似畦畔も検出した。規模は上端幅 0.1m ～ 0.14m である。途中で途切れており、水口の可能性がある。

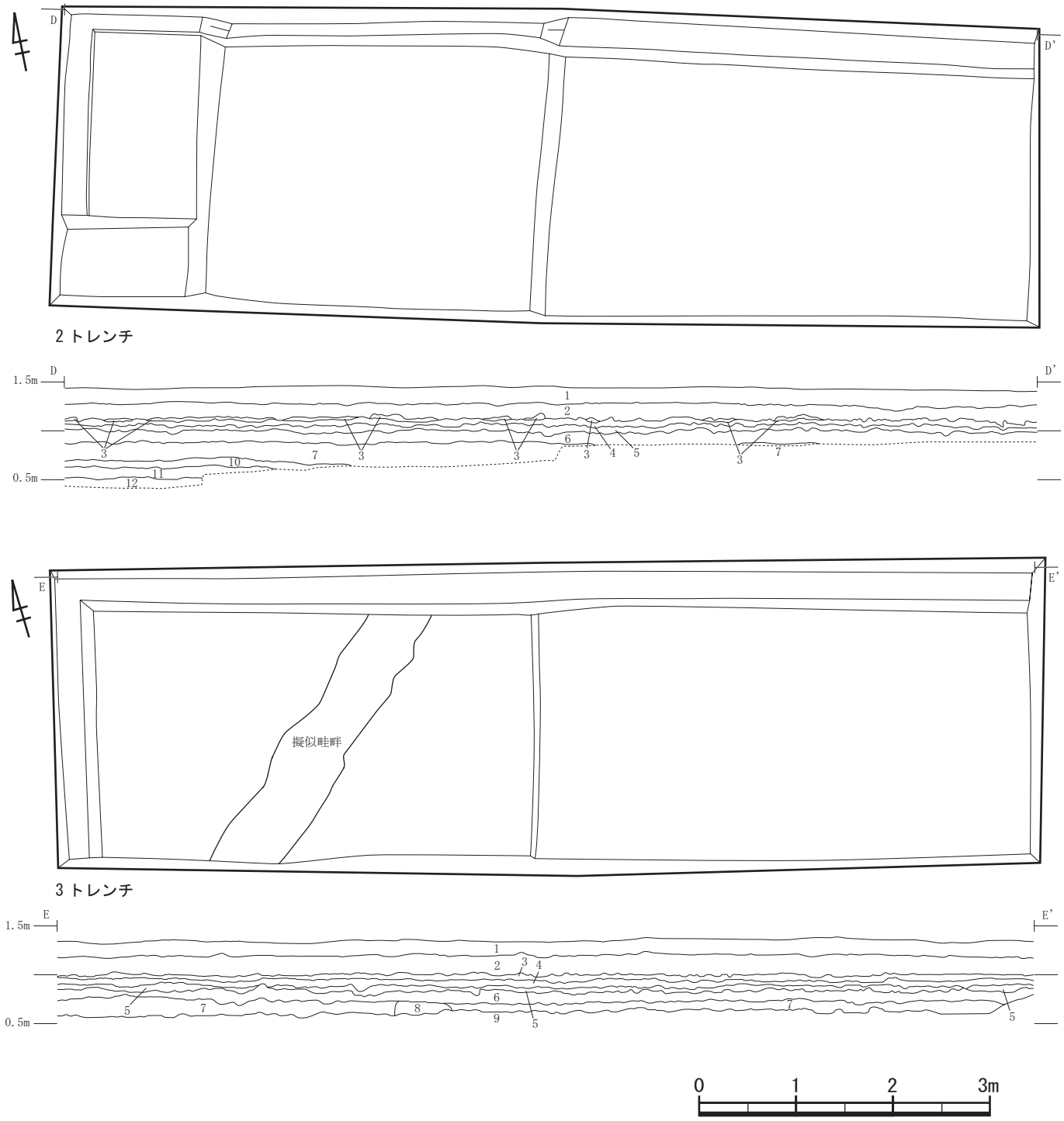
ⅲ区画

３区画を確認した。区画全体の規模は不明であるが、区画１が１辺４m以上、区画２が１辺 2.5 m以上、区画３が１辺 0.5 m以上である。耕作土下面での標高は、区画１が 0.63~0.68m、区画２が 0.69m ～ 0.70m で、より北側に位置する区画１がわずかに低い。原地形は、南側の自然堤防から北側の低湿地に向かって傾斜している。水田は、この緩斜面を利用して形成されたものと考えられる。

ⅳ出土遺物

本来の耕作土である 10 層およびそれを覆う自然堆積層（9 層）が自然の撹拌により変形した土層とみられる 8 層中より、古墳時代前期の塩釜式とみられる小型器台（第 42 図 1）が出土している。

（２）３トレンチ



第 40 図　2・3 トレンチ平面・断面図

７層水田跡

ⅰ検出・遺存状況

７層上面で北東から南西方向に延びる擬似畦畔を１条検出した。上面は６層により削平され失われたとみられる。

ⅱ畦畔

擬似畦畔Ｂのみ検出された。８層土で構成されるが、上面は６層により削平されている。規模は、上端幅 0.52m ～ 0.72m である。主軸方向は１トレンチで検出された擬似畦畔の主方向とほぼ直交する。

ⅲ区画

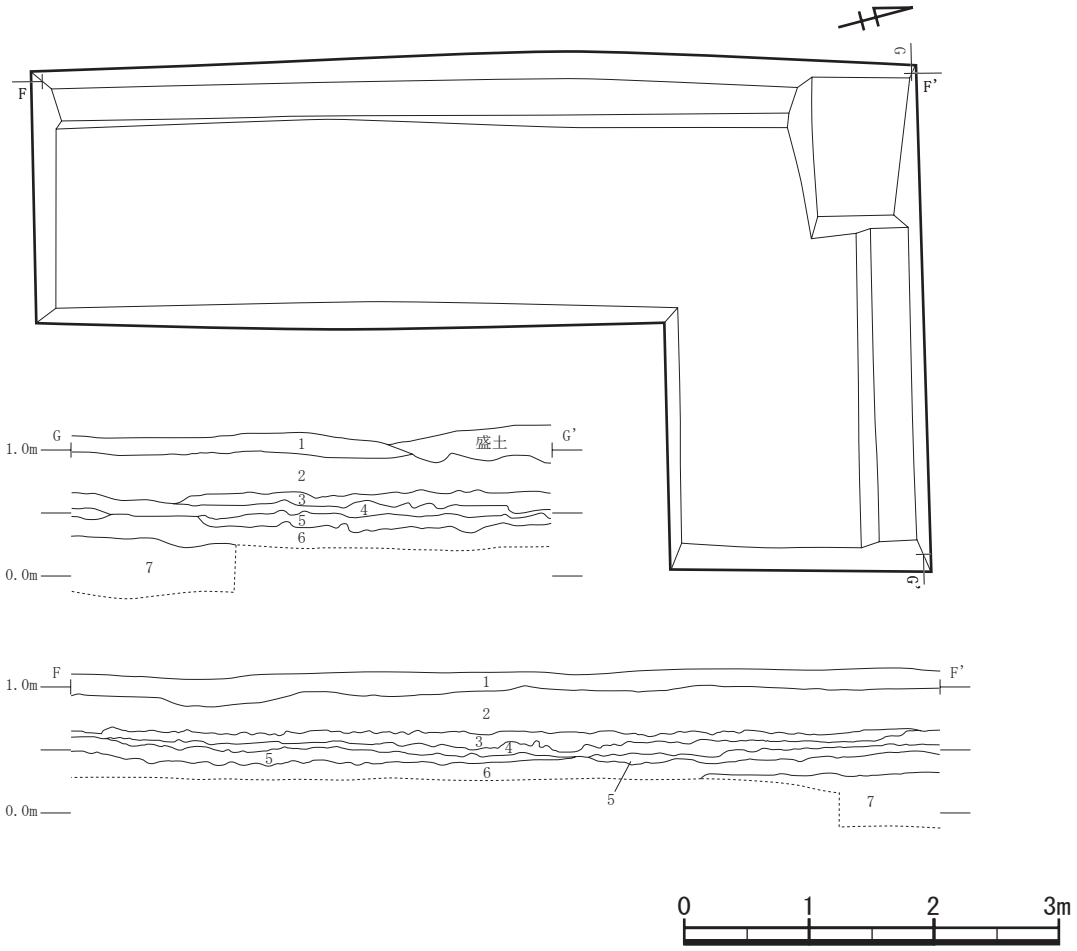
擬似畦畔が単独で１条検出されたのみであり、明確な区画の存在は不明確である。

ⅳ出土遺物

この水田跡に伴う遺物の出土はない。

（３）出土遺物

遺物は１・３トレンチからのみ出土した。全て基本層からの出土である。全体に小片が多く、図示できたのは小型器台の１点のみである。比較的まとまって出土したのは１トレンチで、破片を含め 68 点の遺物が出土した。灰白色火山灰を含む土層（３層）より下位の４～５層では、古墳時代中期南小泉式期とみられる土師器の甕がまとまって出土した。５層からは敲石が２点出土した（第 42 図 2･3）。また、10 層水田跡に伴うとみられる８層からは、古墳時代前期塩釜式期の小型器台の他、土師器の甕が出土した。３トレンチでは、灰白色火山灰を含む土層（６層）より上位の層から出土したが、小片のため図示していない。３トレンチの３層上面からはいわゆる赤焼土器の坏を



第 41 図　４トレンチ平面・断面図

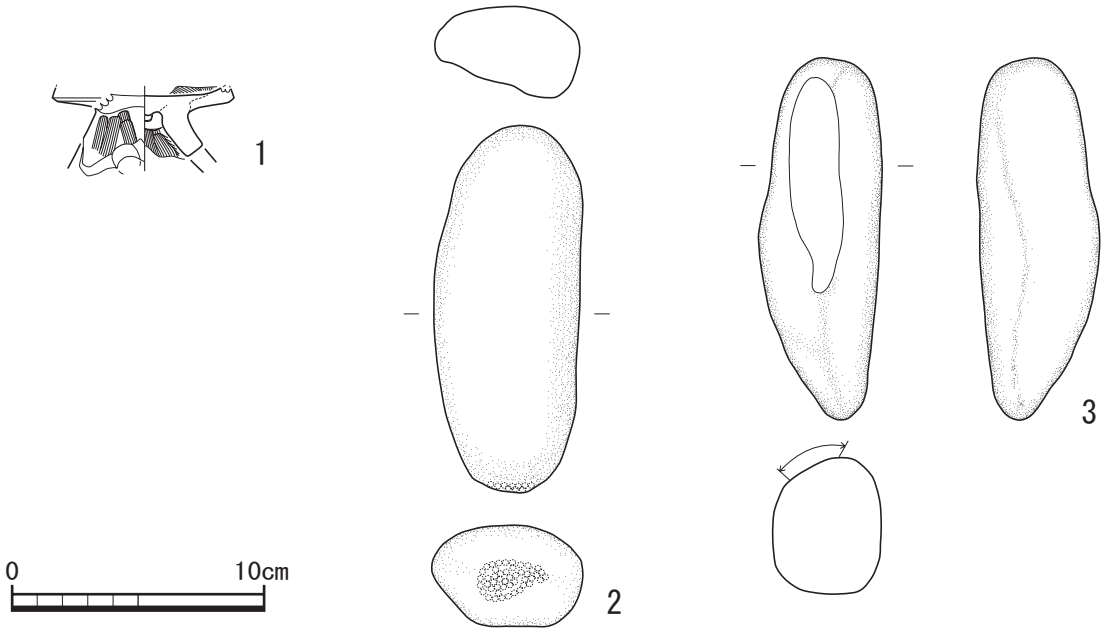
含む土師器の坏、甕が出土した。

５　まとめ

今回の調査により、自然堤防の北端および後背湿地にあたる当該地では、古墳時代前期から古代にかけて、また、現代まで比較的連続的な水田耕作の営みのあったことが明らかとなった。１トレンチで５枚、２～４トレンチで６枚の耕作土を確認した。これらの厳密な対応付けは難しいが、共通する灰白色火山灰を含む土層を基準にすると、２～４トレンチではこれより新しい耕作土を３枚（３～５層）確認した。１トレンチではこの段階の耕作土は確認されておらず、灰白色火山灰を含む基本層３層が現代耕作土の直下となっている。次に灰白色火山灰層を含む層より古い耕作土は、１トレンチで４枚（４～６層、10 層）、２～４トレンチで２枚（７・８層）確認した。この内、１トレンチ 10 層（古墳時代前期）および３トレンチ７層で擬似畦畔を伴う水田跡を確認した。

１・３トレンチにおける各擬似畦畔の方向についてみると、10 層水田跡が N-37°-W、７層水田跡が N-47°-E でおおむね直交する。また、擬似畦畔上面の標高は、１・３トレンチ共に 0.7 ～ 0.8 m とほぼ水平であるが、基盤となる洪水堆積土では１トレンチでの標高が若干高く、水平をもって両水田跡が同時期とは断定できない。１トレンチ 10 層水田跡より３トレンチ７層水田跡がやや新しい可能性も考えられる。断定はできないが、現時点では、既存畦畔の方向性をある程度踏襲して、比較的近い時期の水田が連続して形成されたものと考えたい。

また、今回の調査では、１トレンチ７・８層において著しい土層の撹拌を確認した。撹拌の生じた時期は古墳時代前期から中期にかけての時期と推定される。詳細は不明であるが、人為的要因による可能性は低く、現状では地震等の自然的要因に起因した現象と考えられる。今後周囲の調査において、注意していく必要がある。



掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			調整		備考
								口径	底径	器高	外面	内面	
1	15-1	C-1	１トレ	８層	土師器	器台	上部		—	—			脚部透かし孔、非ロクロ
2	15-4	K-1	１トレ東溝	５層	石器	敲石	完形	長14.6	幅5.8	厚4.0			先端に敲打痕
3	15-5	K-2	１トレ東溝	５層	石器	磨石	完形	長14.3	幅4.8	厚5.7			磨り面１ヶ所
写真のみ	15-2	C-2	１トレ	４～５層	土師器	坏	上部					放射状ミガキ	非ロクロ
写真のみ	15-3	J-1		表採	磁器	変形皿	底部片						

第 42 図　第１次調査出土遺物

1.　１トレンチ擬似畦畔検出状況（南から）

2.　１トレンチ完掘状況　（南から）

3.　１トレンチ西壁　南端部（東から）

4.　１トレンチ西壁　擬似畦畔南側（東から）

5.　１トレンチ西壁　擬似畦畔北側（東から）

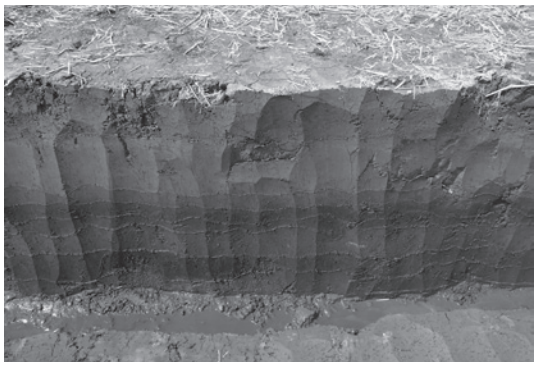
6.　１トレンチ西壁　北端部（東から）

7.　２トレンチ完掘状況（西から）

8.　２トレンチ西壁断面（東から）

写真図版 13　第１次調査（1）

1.　1 トレンチ擬似畦畔検出状況（西から）

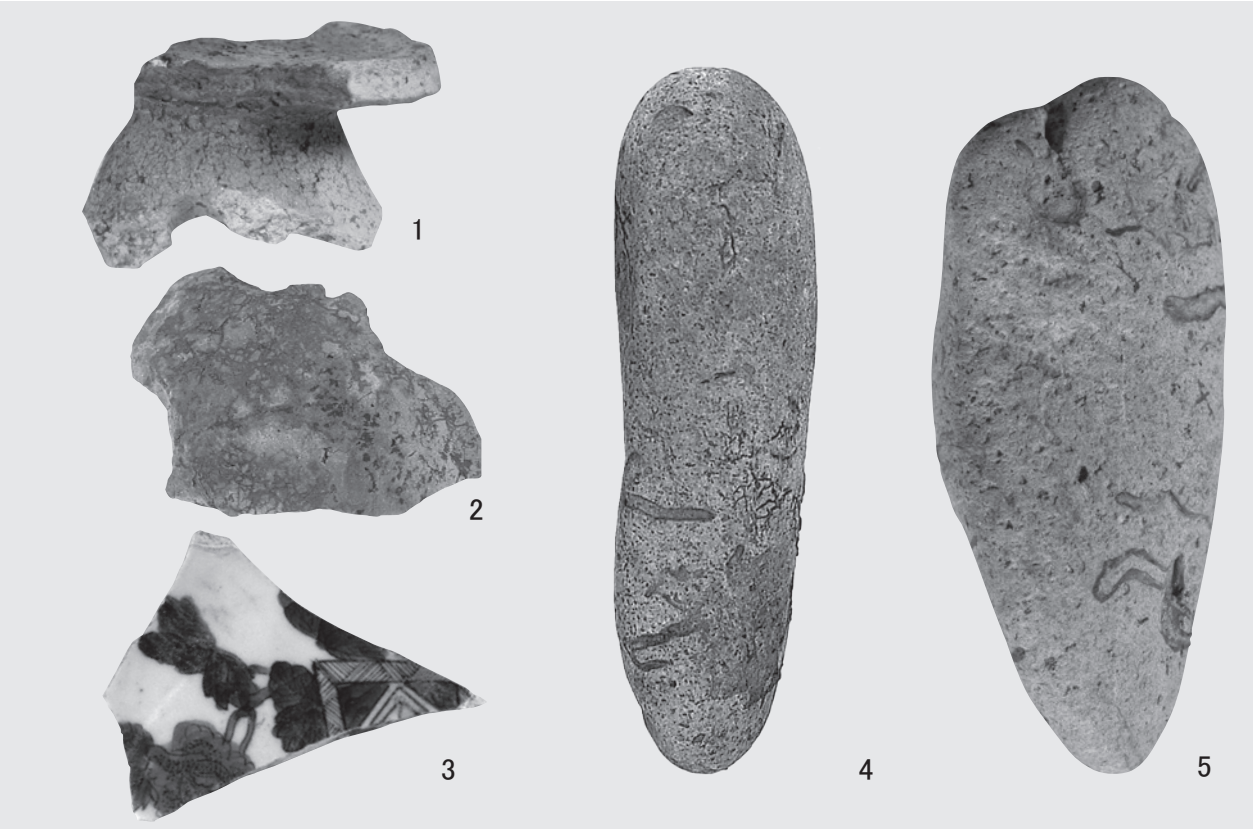


2.　3 トレンチ北壁擬似畦畔周辺　（南から）

3.　4 トレンチ完掘状況（南から）

4.　4 トレンチ西壁最北部（北東から）

写真図版 14　第 1 次調査（2）



写真図版 15　第 1 次調査出土遺物

総　　括

平成 25 年度末から平成 26 年度に仙台市、宮城県、国の予算で実施した公共事業に伴う発掘調査は、表 1 で示したように、平成 25 年度末が 1 件、平成 27 年 2 月末で 10 件（10 遺跡）である。一方、民間の開発に伴う発掘調査件数は平成 25 年度末が 4 件、26 年度が 16 件（11 遺跡）である。本書では、平成 25 年度末を含め、平成 27 年 1 月 31 日までに行った調査の中で、別に報告される郡山遺跡を除き、7 件を報告した。その成果は、以下のようにまとめられる。

1　泉区内の調査

（1）山の寺廃寺

18 世紀後半と推定される整地層が確認され、その面積は 2,800㎡に及ぶ大規模な事業であったことが判明した。また、昭和 18 年の山火事によって焼失した仁王門の礎石を調査した結果、仁王門はこの整地作業と同時期まで溯る可能性も考えられた。

2　宮城野区内の調査

（1）田母神屋敷跡

調査範囲が限られていたため、遺跡の詳細を明らかにすることはできなかったが、遺跡の西辺に相当する調査区では、現水路と重複して南北方向の溝跡が確認された。断定はできなかったが、屋敷の西辺を区画する水濠の可能性が考えられた。

3　若林区内の調査

（1）沓形遺跡第 5 次・6 次調査

5 次調査は民間の区画整理事業、6 次調査は復興公営住宅建設に伴う調査である。両調査区共に弥生時代の畦畔や段差を確認したが、調査区の制約から水田区画の詳細等をとらえるには至っていない

4　太白区内の調査

（1）六反田遺跡第 11 次調査

竪穴住居跡 1 軒と、畑の耕作に伴う溝跡 3 条が調査された。竪穴住居跡は 9 世紀代で、その後 10 世紀初頭までに畑地になったと考えられた。

（2）大野田古墳群第 22 次調査

古墳群の分布域の西端で新しく 41 号墳が発見され、同古墳群の古墳総数は 45 基となった。周溝内からは円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。

（3）辻遺跡第 1 次調査

今回の調査は、名取市の登録遺跡である辻遺跡の北側隣接地での調査であったが、擬似畦畔 B を伴う耕作土が確認された。これまでの遺跡範囲の北側に水田跡が存在することが予想される。水田跡の年代は、出土遺物から古墳時代頃と考えられている。

報告書抄録

ふ り が な	やまのてらはいじほか
書　　名	山の寺廃寺ほか
副　書　名	発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 436 集
編 著 者 名	平間亮輔　鈴木隆　小泉博明　黒田智章　小林航　千葉悟　早坂純一　千葉靖彦
編 集 機 関	仙台市教育委員会
所　在　地	〒 980-0811　仙台市青葉区一番町 4 丁目 1-25　東二番丁スクエア　3 階　TEL：022-214-8894
発 行 年 月 日	平成 27 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
	種　別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	要　約							
山の寺廃寺（2 次）	仙台市泉区山の寺二丁目	4100	19005	38° 20'6″	140° 53'43″	‘2014.4.7 ‘2014.4.15 '2014.8.4	68.7㎡	記録保存（山門新築・擁壁設置）
	寺院跡	中世・近世		礎石跡		磁器		
	18 世紀の寺院建築に伴う造成盛土および旧仁王門礎石跡を検出した。							
田母神屋敷跡（2 次）	仙台市宮城野区岡田蒲生字鍋沼	4100	01231	38° 15'16″	140° 59'16″	‘2014.8.25 ‘2014.9.3	42.1㎡	記録保存（津波避難タワー新築）
		近世		溝跡・土坑		遺物なし		
	屋敷西辺を区画する水濠の可能性がある南北方向の溝跡を検出した。							
沓形遺跡（5 次）	仙台市若林区荒井字矢鳥東ほか	4100	01562	38° 14'31″	140° 57'1″	‘2014.9.29 ‘2014.10.28	179.02㎡	記録保存（区画整理）
	生産遺跡	弥生・古墳・古代・中世		水田跡・溝跡・土坑		陶器・磁器・銭貨		
	畦畔 1 条を伴う弥生時代の水田跡を検出した。							
沓形遺跡（6 次）	仙台市若林区荒井広瀬東ほか	4100	01562	38° 14'7″	140° 57'4″	‘2014.7.23 ‘2014.8.1	44.0㎡	記録保存（戸建復興公営住宅）
	生産遺跡	弥生・古墳・古代・中世		水田跡		遺物なし		
	畦畔の可能性がある段差を伴う弥生時代の水田跡を検出した。							
六反田遺跡（11 次）	仙台市太白区大野田 z 字六反田	4100	01189	38° 13'5″	140° 52'31″	‘2014.1.20 ‘2014.1.23	46.23㎡	記録保存（店舗建築）
	集落跡	縄文～古代、近世		竪穴住居跡・溝跡		須恵器・土師器・金属製品		
	竪穴住居跡 1 軒（9 世紀）、溝跡 3 条を検出した。							
大野田古墳群（22 次）	仙台市太白区大野田字千刈田	4100	01361	38° 12'51″	140° 52'23″	‘2014.5.8 ‘2014.5.12	343.10㎡	確認調査
						'2014.6.11 '2014.6.26		記録保存（賃貸施設新築）
	古墳	古墳		古墳（41 号墳）・溝跡		土師器・埴輪		
	円墳 1 基、小溝状遺構 6 条、ピット 44 基を検出した。古墳の周溝からは円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土した。							
辻遺跡（1 次）	仙台市太白区四郎丸字昭和南	4100	12116	38° 11'0″	140° 55'28″	2014.5.22	2014.6.4	記録保存（基盤整備）
	散布地	古代		水田跡		土師器・須恵器		
	擬似畦畔を伴う古墳時代前期～古代の水田跡を検出した。遺物は古墳時代前期の土師器が出土した。							

仙台市文化財調査報告書第436集

山の寺廃寺ほか

発掘調査報告書

2015年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区一番町4丁目1－25
東二番丁スクエア
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1－14
TEL 022（231）2245㈹